



Title	ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史
Author(s)	越野, 剛
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7041号
Issue Date	2018-03-22
DOI	10.14943/doctoral.r7041
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88745">http://hdl.handle.net/2115/88745</a>
Type	theses (doctoral)
File Information	Go_Koshino.pdf



[Instructions for use](#)

博士論文

ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史

越野剛

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

# ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史

## 目次

序章 ドストエフスキーの癲癇の言説史	2
1. 病気の文化史とドストエフスキー	2
2. 作家と病気の関係の言説史：ドストエフスキーの癲癇研究	3
3. 病跡学から病気の文化史へー本論の構成	12
第1章 身体 of 結核と精神 of 結核	17
1-1. ロマン主義とプーシキンの結核	17
1-2. ドストエフスキーと結核—『椿姫』とのテキスト上の対話	19
1-3. 病のイメージの過剰とパロディ	26
第2章 人間の無意識の探求：メスメリズムから心理小説へ	28
2-1. ロシアのロマン主義文学とメスメリズム	28
2-2. ドストエフスキーの心理描写とメスメリズム	41
2-3. メスメリズムの受容とドストエフスキー	48
第3章 悪魔憑きとムハンマド	50
3-1. 悪魔憑きと癲癇	50
3-2. ムハンマドと癲癇	63
第4章 19世紀ロシア文学とコレラ	69
4-1. プーシキンとコレラ	69
4-2. コレラ暴動の文化史：病気・ナロード・ツァーリ	82
4-3. ドストエフスキー『悪霊』におけるコレラ	93
第5章 ドストエフスキーにおける火事と病気のイメージ	108
5-1. モスクワ大火と民衆の聖なる暴力	109
5-2. ペテルブルグの火事とナロードのイメージの変化	113
5-3. オリガ・ウメツカヤ裁判と放火の女性イメージ	116
結論 ロシアと西欧	120

## 序章—ドストエフスキーの癩癩の言説史

### 1. 病気の文化史とドストエフスキー

文化史研究の資料として文学作品を扱うことは今日においては盛んに行われている。文化史の隆盛の前提条件として 1970 年代から 80 年代にかけて歴史学の言語論的転回や構築主義が議論になり、物語や言説として「歴史的事実」が言語によって構成されるという側面が意識されるようになったことが重要である<sup>1</sup>。もちろん客観的な事実を完全に捨象してしまうような極端な立場をだれもが受け入れたわけではない。しかしともすれば主観的な描写でしかない文学作品がある時代の人々の認識や心性を明らかにする重要なテキストであることは疑いえない。例えばキャシー・フライアソンは『農民のイコン』(1993 年)において 19 世紀後半のロシア農民のイメージの変遷を様々な史料を駆使して分析するが、農村を描いたナロードニキ作家の文学作品が重要な構成要素としてその中に組み込まれている<sup>2</sup>。

一般に文化史の資料として相応しいのは凡庸であっても広い範囲の読者に受け入れられるような物語とイメージを量産した大衆作家である。著名な古典作家を特別扱いたないレイトブラトの大衆小説研究は文学という制度の歴史社会的分析の好例となっている<sup>3</sup>。他方でドストエフスキーやトルストイのような古典作家のテキストは他と比べて際立った特異性を持つのが特徴であり、その描写を文化史の資料として単純に受け入れることはできない。19 世紀のロシア人の心性をすべてドストエフスキーの登場人物によって説明するとしたら大いに偏った見取り図ができあがるだろう。それはロシア文化のある側面を深く指し示すものではあっても決して平均的な表象ではない。例えば歴史小説は大衆小説のジャンルと見なされることが多く、人々の歴史意識の変遷を跡付けるのに有効な資料だといえる。アリトシュレルやウングリアヌの研究ではミハイル・ザゴスキ、ファデー・ブルガーリン、グリゴリイ・ダニレフスキーといった同時代には人気があったが、芸術的には高く評価されてこなかった作家の作品によって文化史的な潮流が規定される一方で、プーシキンの『大尉の娘』やトルストイの『戦争と平和』のような古典作品はむしろその枠組みをほみ出すところに価値が置かれている<sup>4</sup>。

本論のテーマである病の文化史とは言説やイメージを題材にしてある文化の中で病気がどのように想像され描かれてきたかに関心を向ける。人間の身体に生起する病理現象は普遍的なものとも考えられるが、精神的な疾患を中心にして現在ではむしろ文化によって規

<sup>1</sup> ピーター・バーク『文化史とは何か』法政大学出版局、2008 年。第 5 章を参照。

<sup>2</sup> Cathy A. Frierson, *Peasant Icons: Representations of Rural People in Late 19th Century Russia* (Oxford Univ. Press, 1993)

<sup>3</sup> *Рейтблат А.И.* От Бовы к Бальмонту: очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века. М.: МПИ, 1991.

<sup>4</sup> *Альтиулер М.Г.* Эпоха Вальтера Скотта в России: Исторический роман 1830-х годов. СПб.: Академический проект, 1996; Dan Ungurianu, *Plotting History: the Russian Historical Novel in the Imperial Age* (The University of Wisconsin Press, 2007)

定される「文化結合的 culture-bound」な要素が大きいことが議論されている<sup>5</sup>。文学作品を分析する場合にはソクタグのいう病気の現実とは必ずしも一致しない「病のメタファー」に着目することになるだろう。例えばロシアに限らずロマン主義期のヨーロッパの文学では狂気や結核が盛んに描かれ、たぶんに誇張されて美化されたイメージ（狂気の人、結核病みの美女）が生み出された。こうした場合には今日では名前を忘れられているような凡庸な作家のテキストが有益な材料を提供してくれる。

しかしロシアにおける病気の文化史を考える上ではドストエフスキーの存在を無視することができない。『白痴』で描かれたムイシキン公爵の癲癇発作や作家自身の病気体験などがその後の癲癇のイメージに大きな影響を残したからだ。病気をめぐり当時の人々の意識や理解がテキストに反映したのではなく、テキストの方が新しく病気のイメージを創り出し、集合的意識や言説に変化をもたらした。もちろん作家が全く新しい形象をゼロから生み出すことはありえない。癲癇に関する既存の言説、学知、ステレオタイプの網目の上に作家の新しい言葉が書き加えられたのであり、個別の文学テキストと全体の構造の間にある動的な相互関係を見るのがドストエフスキーのような古典作家を文化史で扱う際に必要な作業だと思われる。そのような研究の好例を具体的に挙げるなら、ムラフは同時代の宗教・医学言説と幅広く対比させることでドストエフスキー作品における聖痴愚（ユロージヴィ）のイメージを浮かび上がらせ、シロトキナはゴゴリやドストエフスキーなどの古典作家を病跡学的に分析する試み自体をある種の文化史・言説史として描き出している<sup>6</sup>。以下では作家の病気体験と文学テキストを文化史に接続するための補助線として、ドストエフスキーの癲癇に関する証言と先行研究をある種の言説史として整理してみよう。ここではドストエフスキーの病歴および作家自身の癲癇理解について分析したジェイムス・ライスの『ドストエフスキーと治癒の術』（1985年）<sup>7</sup>をひとつの転換点として考えたい。ここでライスは作家自身が病気のイメージを創出するプロセスにも注意を払っているように思えるからだ。

## 2. 作家と病気の関係の言説史：ドストエフスキーの癲癇研究

ドストエフスキーの癲癇については多くの研究の蓄積があるが、医学的な事実を確定したうえで作家の活動における病気の影響を論じるのが古典的な病跡学の戦略であったように思われる。まず第一にその病気が何であったのかが問題になりえる。そもそも本当に癲癇だったのか否か、癲癇だったとしたらどんな種類の癲癇だったのか。とりわけドストエフスキーの発作に特有のエクスタシー体験をどのように説明するかがカギとなる。第二に罹病

---

<sup>5</sup> アーサー・クラインマン『病いの語り—慢性の病いをめぐり臨床人類学』誠信書房、1996年、29頁。

<sup>6</sup> Harriet Murav, *Holy Foolishness: Dostoevsky's Novels and the Poetics of Cultural Critique* (Stanford UP, 1992); Irina Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius: A Cultural History of Psychiatry in Russia, 1880-1930* (The John Hopkins UP, 2002)

<sup>7</sup> James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art* (Ann Arbor: Ardis, 1985)

した時期とその病因を論じる研究がある。幼少期、青年期、シベリア懲役期、釈放後というように研究者によって様々な見解が提示されてきた。ドストエフスキー自身が矛盾に満ちた言葉を残していることがその要因のひとつになっている。

## 2-1. 病気の本質をめぐる議論

今日の理解によれば癲癇は脳の器質的な要因（脳波の異常）によって起きるものとされる。フロイトは有名な論文『ドストエフスキーと父殺し』（1928年）でそのような意味での癲癇という診断を否定して、ドストエフスキーの病を心因性のヒステリーと解釈した<sup>8</sup>。精神分析の体系に従って作家の病歴をエディプス・コンプレクスという心理的な要因に結びつけたのである。ヒステリーと癲癇の発作は似ているが、例えば睡眠中に発作が起きるかどうかという顕著な違いがある。作家自身や近親者の残した記録などによりドストエフスキーの発作は眠っている間にも起きたことがわかっているため、フロイトのヒステリー説は誤りというのが今日では通説となっている。ただし癲癇患者であると同時にヒステリー（神経症）を病むことは矛盾しない。精神分析のタームを使うことで作家の言動や作品のもつれた一端が理解しやすくなるのも確かであり、フロイトの理論を全面的に放棄する必要はないだろう。近年ではモイセエヴァのように作家の病気は癲癇ではなく高血圧症の一種であったとする研究者も現れ<sup>9</sup>、作家の子孫であるドミトリー氏がこれに賛同した<sup>10</sup>。偉大な作家が癲癇患者であったことを否定したいという欲望は裏を返せば特定の病気に対する偏見に根差したものだともいえよう。そもそも病気の文化史を論じる上では現代の医学的な観点から見てそれが何であったかを特定するよりも、ドストエフスキー本人や同時代人たちが目の前にある現象を癲癇として理解していたという認識上の事実の方が重要である。

癲癇は脳波の乱れの発生する場所や特定できる脳の障害の有無などにより様々なグループに分類される。今日においてもその病因が完全に解明できていないようなタイプの癲癇も存在する<sup>11</sup>。ドストエフスキーの発作が癲癇であることは間違いないとしても、それは医学的にはどのような症例として説明されるのだろうか。とりわけ『白痴』の主人公ムイシキンが体験する神秘的なエクスタシー発作の描写は医学者の関心を強くひき、「ドストエフス

---

<sup>8</sup> ジグムント・フロイト「ドストエフスキーと父親殺し」『フロイト全集』岩波書店、第19巻、289-311頁。

<sup>9</sup> *Моисеева Н.И.* Был ли Достоевский эпилептиком? История одной врачебной ошибки. // *Знамя*, 1993, № 10, С.199-204.

<sup>10</sup> 「特集＝文豪ドストエフスキーの曾孫ドミトリー氏来日」『ドストエフスキー広場』14号、2005年、49-64頁。

<sup>11</sup> 国際抗癲癇連盟（ILAE）の1989年の定義によれば脳の器質的な損傷が病因となっているかどうか（症候性／特発性）と脳波の異常がどの範囲で生じるか（全般性／部分性）という二つの基準を横断させることで基本的に四つのカテゴリーに分類される。金澤治『知られざる万人の病てんかん』南山堂、1998年。90-118頁。ドストエフスキーの時代にはまだこのような分類法は存在せず、そのことが現代医学の枠組みで過去の作家の病を診断する困難さのひとつの要因となっている。

キー型」という特別な名称が定着してきている。様々な分類のカテゴリーがある中で側頭葉癲癇（症候性部分癲癇）による発作は幻聴や不安・恐怖などの精神や感情の変容を引き起こすことが知られており、しばしばドストエフスキーの症例にあてはめられてきた。

癲癇研究の権威であるアンリ・ガストーはもともと側頭葉癲癇説を提唱していたが、1978年の論文ではドストエフスキーの病気の特徴はむしろ特発性全般癲癇に当てはまるとした。有名なエクスタシー発作の描写は作家による創作であって現実の症例としては存在しないと論じ、記録されたほとんどのケースでドストエフスキーの発作は全身の痙攣を伴っていたこと、また多くの発作が睡眠中に起きたことなどは側頭葉癲癇よりも特発性全般癲癇によって説明されるとした。その後、「ドストエフスキー型」の発作が実際に記録・報告されたこともあり、ガストーは1984年に修正意見を発表する<sup>12</sup>。分野の第一人者ですら何度も見解が変わらざるをえなかったことは、それだけ癲癇という病の複雑さを物語っている。

## 2.2. 病歴をめぐる議論

ドストエフスキーがいつ癲癇の発作に襲われるようになったのかについても多くの議論がなされてきた。とりわけ作家の死後の1881年2月から3月にかけて新聞『新時代』の紙上にこの問題をめぐって多くの互いに矛盾する証言が現れた。アレクセイ・スヴォーリンによる追悼記事は「なにか恐ろしい忘れ得ないような辛い出来事が幼少期にあって」それが病気の原因になったという曖昧な説明をしている<sup>13</sup>。オレスト・ミルレルによる最初の評伝（1883年）はこの論争に触れて後述する医師ヤノフスキーの意見に同意しながらも、脚注で青年期の始めに起きた「家庭生活におけるある悲劇的事件」が病気と結びついているという話に触れている。ミルレルはそれを「ドストエフスキーに個人的に非常に親しい人物」から直接に聞いたが、裏付けとなる確証が得られなかったので詳細には立ち入らないことにしたという<sup>14</sup>。娘リュボフィ（エーメ）の回想録（1920年）によればドストエフスキーは父親が農奴に殺害されたというショッキングな知らせを受けて癲癇の発作を起こしたという<sup>15</sup>。事件が起きた1839年は未来の作家がペテルブルグで就学していたときであり幼少期とはいえないが、研究者の多くはこれをスヴォーリンやミルレルが示唆した出来事だとみなしている。レオニード・グロスマンのソ連期の代表的な評伝（1965年）もこの説に依拠している<sup>16</sup>。

<sup>12</sup> Henri Gastaut, "New Comments on the Epilepsy of Fyodor Dostoevsky," *Epilepsia* 25-4 (1984), pp.408-411. ガストーは「原発性 primary」という用語を使っているが「特発性 idiopathic」とほぼ同じ意味である。

<sup>13</sup> [Суворин А.С.] О покойном. // Новое время, №1771, 1 февраля 1881. С.1.

<sup>14</sup> Миллер О. Ф. Материалы для жизнеописания Ф. М. Достоевского. // Полное собрание сочинений Ф. М. Достоевского. СПб., 1883. С.141. ノイフェルトおよびフロイトはミルレルのこの態度を批判している。

<sup>15</sup> エーメ・ドストエフスキイ「ドストエフスキイ伝」『ドストエフスキイ文献集成』17巻、大空社、1996年、44頁。原著はドイツ語。

<sup>16</sup> Гроссман Л.П. Достоевский. М.: Молодая гвардия, 1965. С.41.

上述したフロイトの論文および彼が依拠したヨラン・ノイフェルトの『ドストエフスキーの精神分析』（1923年）はエディプス・コンプレクスの格好の事例としてこの話を利用した<sup>17</sup>。フロイトの推察によれば、ドストエフスキーは父親殺しの隠された欲望を抱いており、それが農奴による殺害事件という思いがけぬかたちで実現した。発作の前兆であるエクスタシー体験はその歓喜の瞬間の反復であり、激しい痙攣を伴う癲癇発作は罪深い感情の奔流に対する自己懲罰として説明される。フロイトに取り上げられたこともあって父親の死を病気の原因とする観点は広く普及し、例えばアンリ・トロワイヤの『ドストエフスキー伝』（1940年）や亀山郁夫『ドストエフスキー父殺しの文学』（2004年）もそれを踏襲している。

ドストエフスキーに初めて癲癇の発作が起きたのはシベリアの監獄に服役中の時だったという説も広く普及している。病気の始まりを幼少期に求めたスヴォーリンの追悼記事に対して、弟のアンドレイ・ドストエフスキーは同じ新聞に反論の手紙を投稿し、作家自身が癲癇発作はシベリアで起きたと語っていたと証言した<sup>18</sup>。さらに後の号はドストエフスキーの青年期からの知人で後にはシベリアに勤務して監獄のあるオムスクで作家と面会したことのある医師リーゼムキャンプからの手紙を紹介しており、そこでは人生で初めて体刑を受けたショックで癲癇の発作を起こしたという恐ろしい話が伝えられている<sup>19</sup>。アメリカの研究者ジョゼフ・フランクの浩瀚な伝記も癲癇の発病をシベリアでの過酷な体験の時期に帰している<sup>20</sup>。

父親の死が原因かどうかの議論は別として、逮捕前の青年期にドストエフスキーが癲癇を発病していたという証言として、当時親しく交流していた医師ステパン・ヤノフスキーの回想は重要である。弟アンドレイの証言への反論としてやはり『新時代』紙に掲載された文章によれば、1840年代後半にドストエフスキーは軽度の癲癇発作をしばしば起こしていたという。ヤノフスキーは「前兆を伴う卒中 *кондрашка с ветерком*」という表現をドストエフスキーが用いていたと述べる<sup>21</sup>。*кондрашка* は卒中や突然死を意味する俗語だが、初期作品の『プロハルチン氏』（1846年）でも用いられている（第5章参照）。「前兆 *ветерок*」は癲癇発作の前触れとなる自覚症状でとして当時知られていたアウラを指すものと考えられる。アウラも *вечерок* も「微風」がもとの意味であるのも示唆的である。ヤノフスキーの

---

<sup>17</sup> ヨラン・ノイフェルト「ドストエフスキーの精神分析」『ドストエフスキイ文献集成』11巻、大空社、1995年。

<sup>18</sup> *Достоевский А.М.* Письмо к издателю // Новое время, №1778, 8 февраля 1881. С.2.

<sup>19</sup> *Достоевский А.М.* Еще о болезни Ф. М. Достоевского. // Новое время, № 1798, 1 марта 1881. С.3-4. これに対する異論として作家ピョートル・マルチャノフはドストエフスキーがオムスク要塞司令官の恩情で危ういところで体刑を免れたという話を伝えている（1895年）。*Мартьянов П.К.* Из воспоминаний «В переломе века». //Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.343.

<sup>20</sup> Joseph Frank, *Dostoevsky: The Years of Ordeal, 1850-1859* (Princeton UP, 1983), p.80.

<sup>21</sup> [*Яновский С.Д.*] Болезнь Ф. М. Достоевского // Новое время, №1793, 24 февраля 1881. С.2.



見解が正しければドストエフスキーは当時から自らの病を癲癇であると認めていたことになる。ドストエフスキーがシベリアに送られる前にすでに何らかの病的発作に苦しんでいたことは他にも証言があるので疑いえないが、これが果たして癲癇であったかどうか、作家がこれをどう認識していたかについて答えるのは難しい。ドストエフスキーの病歴を丹念に追いながら発作の始まりを逮捕前の時期に置くジェイムス・ライスは当然ながらヤノフスキーの証言を重視する<sup>22</sup>。1845年にシベリアに異動するまでドストエフスキーと付き合いのあった医師リーゼンキャンプが癲癇を観察しておらず、作家の最初の発作は獄中で起きたと主張しているのに対して、ヤノフスキーがドストエフスキーと知り合ったのは1846年である。後者が記録した症状の進展はドストエフスキーがペトラシェフスキー会に出入りして政治的に過激化していった時期と一致している。後に『悪霊』で革命思想のメタファーとして描かれる病気の一部は作家自身の病歴とも結びつくことになる(第4章参照)。1856年に流刑地セミパラチンスクから恩赦を求めて軍高官エドゥアルド・トートレーベンに送った手紙には、政治犯として裁かれたことのひとつの弁解として当時の自分が心気症(ヒポコンデリー)であり、「きわめて普通的事实を歪めてそれらに別の外観とスケールを与える」ようなことができってしまう「奇妙な精神の病 *болезнью странною, нравственною*」にかかっていたことを挙げている(28-1:224)<sup>23</sup>

ドストエフスキーが出獄後に兄ミハイルに宛てた書簡では「癲癇に似ているけれど癲癇ではない奇妙な発作」(28-1:180)が起きると打ち明け、最初の妻 MARIA との結婚の祝宴(1857年)で起こした激しい発作によって初めて「本物の癲癇」(28-1:275)という診断を受けたという。オムスク監獄内で起きた発作は作家本人にはまだ明確に癲癇だとは認識されていなかったということになる。懲役期に発病したという説をとるフランクは1840年代後半にヤノフスキーが診断したような病的発作と監獄で起こした癲癇発作とはドストエフスキーの中で別種の病気として理解されていたのではないかと推察する<sup>24</sup>。1873年に初めてドストエフスキーと会ったフセヴォロド・ソロヴィヨフは、最初の病気は逮捕された途端に消えてしまったが、シベリアでは新しく癲癇にかかったのだという話を聞いている<sup>25</sup>。フロイトによれば癲癇発作は父親の死を願ったことに対する自己懲罰として起きたので、現実の刑罰を科された服役中には発作はむしろ減ったはずである。フロイト説には批判的なフランクではあるが、少なくとも逮捕前のドストエフスキーの病気に関しては意見が一致するのかもしれない。一方でドストエフスキーの詳細な病歴をまとめたライスはどこか一点に癲癇の発症を見るのではなく、初期の徴候からはじまって病気の段階的な発展を跡付

<sup>22</sup> Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, pp.3-41.

<sup>23</sup> ドストエフスキーの著作からの引用は30巻全集を用い()内に巻数と頁数を記す。

*Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-83.*

<sup>24</sup> Frank, *Dostoevsky: The Years of Ordeal...* p.80.

<sup>25</sup> *Соловьев Вс. С. Воспоминания о Ф. М. Достоевском. //Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990.С.204-205.*

けることを重視する<sup>26</sup>。

### 2.3. 病気と創作の関係

病気と創作がどのように関連し合っていたかについても様々な見解が述べられてきた。それらは主として病気こそが作家の創作を生み出す要因になった、あるいはそうではなくて過酷な病気にも関わらず作家は作品を創作することができたのだという二つの意見に集約される。傑出した能力を示す天才の資質を癲癇と結びつける前者の立場は世紀末ごろに盛んになる。ニーチェの『曙光』(1881年)は「知的な痙攣の人間」としてバイロン、ナポレオン、ムハンマド等を論じているが<sup>27</sup>、この時点で彼はまだドストエフスキーを知らなかったようだ。ロンブローゾの『天才論』(1888年)は癲癇型の天才の例としてムハンマドとドストエフスキーを並べて論じ、『悪霊』と『白痴』の描写を長々と引用している<sup>28</sup>。ロンブローゾは天才を遺伝的な退化・変質(degeneration)の一種とみなしたが、ロシアの精神科医ニコライ・バジェノフはドストエフスキーのような芸術的天才を未来の人類の先駆けであるとして progeneration という用語を提案した(1899年)<sup>29</sup>。作家で精神科医の加賀乙彦はフランソワーズ・ミンコフスカの研究に依拠して、圧縮と爆発の二極性という「癲癇型性格」がドストエフスキーに典型的に表れており、それが濃密なエネルギーとなって作品に注ぎ込まれていると論じている<sup>30</sup>。

癲癇と創作を正の因果関係でとらえる論者たちは発作の際の神秘的なエクスタシー体験を重視する傾向がある。詳しくは第3章で論じるが、ドストエフスキー自身も『白痴』のムイシキンや『悪霊』のキリーロフの発作をムハンマドの神秘体験に重ねて描写している。1860年代に作家と親しくしていた数学者ソーニャ・コヴァレフスカヤの回想(1887年)によれば、ドストエフスキーに発作が起きたのはシベリア(カザフスタン)で勤務していたときである。無神論者の友人と一晩中議論した挙句にドストエフスキーが「神は在る」と叫ぶと「空が大地に降りてきて」神の存在に身体が満たされるような神秘的体験と同時に癲癇の発作に襲われたという<sup>31</sup>。20世紀初頭の宗教思想家たちのドストエフスキー理解においても癲癇発作が重視されていることが多い。例えばニコライ・ベルジャーエフは『ドストエフスキーの世界観』(1921年)において「啓示」や「黙示録的な病気」という宗教的なメタファーを用いながら癲癇の中に作家の「精神における最奥の深淵があらわれる」と述べる<sup>32</sup>。

<sup>26</sup> Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, pp.43-108.

<sup>27</sup> 『ニーチェ全集』理想社、第7巻、1980年、茅野良男訳。第549節を参照。

<sup>28</sup> Cesare Lombroso, *Man of Genius* (New York, 1891), p.339-342.原著はイタリア語。

<sup>29</sup> Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius...*, p.71-73.

<sup>30</sup> 加賀乙彦『ドストエフスキー』中公新書、1973年、116-124頁。

<sup>31</sup> Ковалевская С. В. Из «Воспоминаний детства» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.26-28.

<sup>32</sup> ニコライ・ベルジャーエフ「ドストエフスキーの世界観」『ベルジャーエフ著作集』第2巻、白水社、1960年、35-36頁。

シベリア・カザフスタン時代の友人ヴランゲリはドストエフスキーが発作の前兆として「快樂の感覺 чувство сладострастия」にとらえられたというユニークな証言（1912年）を残している<sup>33</sup>。しかし癲癇を作家の天才性と結びつける立場の論者はヴランゲリの回想にあまり注意を払わない傾向がある。病気のエクスタシー体験はあくまで宗教的・思想的に解釈されるべきであり、性的欲望に還元するのは望ましくないのだろう。

他方で危険な発作を患いながらも才能を発揮することができたというように病気と創作を逆接的關係で結びつける立場は実証的なアプローチを重んじる研究者の多くに見られる。例えば文学研究者ジャック・カトーは発作に伴う苦痛や記憶障害は創作活動にとっては妨げでしかなく、ドストエフスキーがその天才の一部でも癲癇という病に負うようなことはありえないと断言する<sup>34</sup>。癲癇学者のガストーはカトーの著書に大きな影響を受けているが、ドストエフスキーの癲癇学の発展に対する「意図せざる貢献」として、癲癇発作が必ずしも知的能力を損なうものではないこと、そしてロンブローゾの議論を反駁する意味で「天才が癲癇に基づくものでは決してない」ことを示した点を強調している<sup>35</sup>。他方で懲役の過酷な環境を癲癇の原因とするフランクは病気と作家の思想的転換をユニークな観点で結びつけている。ドストエフスキーは服役中にロシアの民衆の素朴な信仰にふれて革命的急進思想からキリスト教信仰へと「回心」をとげたと言われており、また作家自身もそのようにとれる発言をしている。フランクによると、それまで抱いていた価値観を破壊して新たな思想を受け入れるという「洗脳」に適したような受動的な心理状態が生み出されたのは監獄と病気という二重の苦境のせいだったというのだ<sup>36</sup>。

#### 2.4. ライスの視点：弁証法と「反省」

大著『ドストエフスキーと治癒の術』でライスは作家の病気と創作の関係を双方向の運動としてとらえる興味深い議論を行っている。その点で示唆的なのは1849年にドストエフスキーがペテルブルグの監獄要塞に拘留されていたときに兄ミハイル宛に書いた手紙である。獄中にいながら「三つの中編小説と二つの長編」を構想するほどの旺盛な創作意欲を示す一方で、「このような仕事はいつも神経に作用してぼくを疲労させたものです」と書き、執筆作業が病気を悪化させると打ち明けている（7月18日付）。ところが翌月には「以前このような神経病にかかったときには書くためにそれを利用していました。このような状態だといつも上手にたくさん書けるのです」（8月27日付）というように病気と創作について真逆の関係を主張している。つまりドストエフスキーにとって作品を創り出す過程は病気を引

<sup>33</sup> Врангель А. Е. Из «Воспоминаний о Ф. М. Достоевском в Сибири» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С. 354.

<sup>34</sup> Jacques Catteau, *Dostoevsky and the process of literary creation* (Cambridge UP, 1989), p.116. 原著はフランス語。

<sup>35</sup> Gastaut, “Fyodor Mikhailovitch Dostoevsky...,” p.198.

<sup>36</sup> Frank, *Dostoevsky: The Years of Ordeal...* p.119.

き起こす要因となる一方で、その同じ病気が作家の創造的作業の動因ともなるのである。ライスはこれを「創作と自己破壊の弁証法」と呼んでいる<sup>37</sup>。

定期的に繰り返される発作は作家の生活に深刻な影響をもたらしたはずだが、ドストエフスキーには癲癇という持病を様々な目的で利用する局面も見受けられる。1858年3月初めに書かれたアレクサンドル2世宛の請願書は健康上の理由でシベリアでの勤務は続けられないことを訴え、エルマコフ医師による癲癇の診断書が添えられていた（それによれば1850年に獄中で最初の発作が起きた）。結果として翌年ドストエフスキーはモスクワに近いトヴェーリ市の居住を許されたが、首都ペテルブルグに立ち入ることは依然として禁じられていた。再び用意された皇帝宛の請願書（1859年10月）でドストエフスキーは癲癇発作の症状がいかに危険なものであるかを事細かに描き出し、専門的な医師のいるペテルブルグで治療を受けることが是非とも必要だと訴えている。首尾よくペテルブルグに戻ることができた後には、西欧を旅行するための理由として病気が持ち出される。1862年夏の最初の西欧旅行の際にはパスポート申請に必要な医師の診断書を得るために奔走していたことが知られている<sup>38</sup>。翌1863年にはベルリンとパリの専門医の具体的な名前をあげて二度目の旅行の目的としている。さらには文学基金から国外での医療を受けるために1500ルーブルの支援を受けている<sup>39</sup>。しかしこれらの旅行でドストエフスキーが実際に癲癇の専門医の診療を受けた形跡はない。むしろ西欧での見聞を広めたり、愛人スースロヴァと会ったり、ルーレット賭博で運試しすることが旅の主要な目的であり、医療はそのための口実のように見える。

監獄生活が癲癇発作の原因になったというストーリーは受難者としての作家というイメージに訴える力がある。ドストエフスキーが首都に帰還した直後に書かれた『死の家の記録』には癲癇発作の描写こそないが、政治犯としてシベリアで苦汁をなめた作家自身の体験を描いたものと解釈され、急進的な立場の若者をふくむ熱狂的な読者に迎えられることになった。ドストエフスキー自らも懲役と病気の間接関係をあえて否定しなかった様子が見える。しかし医師ヤノフスキーがペテルブルグに移る直前のトヴェーリにいた作家と再会した際には、癲癇の発作は監獄内ではめったに起きず、釈放されてからのほうが頻発したという話を聞いたという<sup>40</sup>。作家自身の自己イメージを操作しようとする願望、あるいは読者が作家の像に投影するステレオタイプが、創作と人生において病気が持つ意味を後付けで変えてしまう。その点で興味深いのはドストエフスキーがオムスク監獄の悪名高い参謀将校クリフツォフに嫌われ、鞭打ちの体罰を受けて発作を起こしたという恐らくは事実というよりは噂話に近いエピソードだ。前述のソフィア・コヴァレフスカヤも当時そのような話

<sup>37</sup> Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, pp.65.

<sup>38</sup> *Летопись жизни и творчества Ф. М. Достоевского в трех томах. Т.1. СПб., 1999. С. 349-350, 353; Гроссман Л. П. Жизнь и труды Ф.М. Достоевского: биография в датах и документах. Academia, 1935. стр. 112.*

<sup>39</sup> 7月23日付コヴァレフスキー宛手紙（28-2:37）

<sup>40</sup> [Яновский] *Болезнь Ф. М. Достоевского. С.2.*

を耳にしていたため、作家本人からエクスタシーを伴う最初の発作体験を聞いたときには驚いたという<sup>41</sup>。伝記作者ミルレルは当時この説が広く受け入れられていたことを認め、ペトラシェフスキー事件の取調で兄のミハイル・ドストエフスキーまでもが取り調べで鞭打たれたせいで何らかの病的発作を起こすようになったという噂があったことを紹介している<sup>42</sup>。過酷な懲役の体験全般が病気の原因になったと考えるフランクは、体刑が発病を引き起こしたという発想が事実ではないのはもちろんだが、人々がそれを信じたくなるような「詩的な現実 poetic truth」に基づくものだと論じる<sup>43</sup>。貴族身分の人間にとって体刑を受けることは大きな恥辱でもあり同時に受難者として作家の経歴に聖性を帯びさせる効用もある。第4章で触れることになる『悪霊』のステパン氏が官憲によって鞭打たれたという根拠のない噂話を考えるうえでも興味深い。

癲癇は重い刑罰や兵役などを回避するために演じられる詐病でもありえた。雑誌『市民』の校正係をしていた作家ヴァルヴァーラ・ティモフェエヴァは回想記（1904年）の中でドストエフスキーが狂気を装う方法に関心を持っていたことを伝えている。植字工の一人で以前に参謀本部で書記を務めていた男が上官の言いがかりで侮辱罪に問われ、窮地を脱するために衛兵に噛みついたりして狂気のふりをしたという話をしたところ、ドストエフスキーは「脳障害の第一の徴候」だという額をぬぐう身ぶりをするよう勧めたという<sup>44</sup>。詐病のテーマは真の癲癇患者であるがゆえに偽の発作を演じることもできた『カラマーゾフの兄弟』のスメルジャコフにも通じる<sup>45</sup>。無意識の身振りあるいは演技と解釈することもできるヒステリー発作はしばしば癲癇と見分けるのが難しい。第3章でクリクーシャ（ヒステリー）を考える際に問題となる論点でもある。

ドストエフスキーの病気と創作の弁証法的関係について論じたライスは、やはりドイツ観念論哲学と関りのある「反省 рефлексия/ reflexion」という概念にも着目している。1860年代にジャーナリストとして親交のあったストラホフによれば、ドストエフスキーには「人がある思想や感覚に強く傾倒しながらも、心の中に不屈で迷いのない視点を保ち、そこから自分自身を、自分の思想や感覚を見ているという意味での特別な種類の分裂」<sup>46</sup>が見受けられ、作家自身がそのような姿勢をしばしば「反省 рефлексия」と呼んでいたという。ドストエフスキーは『作家の日記』の「往年の人々」の章（1873年）でこの概念を「自分の最も

<sup>41</sup> Ковалевская. Из «Воспоминаний детства». С.26-28.

<sup>42</sup> Миллер. Материалы для жизнеописания... С.140.

<sup>43</sup> Frank, *Dostoevsky: The Years of Ordeal...* p.80.

<sup>44</sup> Тимофеева В.В. Год работы с знаменитым писателем. // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.187.

<sup>45</sup> John C. DeToledo, "The Epilepsy of Fyodor Dostoyevsky: Insights from Smerdyakov Karamazov's Use of a Malingered Seizure as an Alibi," *Archives of Neurology* 58-8 (2001), pp. 1305-6.

<sup>46</sup> Страхов Н. Н. Воспоминания о Федоре Михайловиче Достоевском // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.382.

深い感覚の中から対象を作り出し、自分の前に置き、それに敬意を表しながらもすぐさま笑いのめすという能力」(21:9)と定義している。よく当てはまる例として挙げられているのが多くの内面的矛盾を抱えていたゲルツェンであり、全く反省の要素がないのが盲目的に社会主義のユートピアを信じるベリンスキーだったとされる。ライスがドストエフスキーの病気に関する自己意識の特徴はユーモアであり、それは上述したような反省的な距離によってもたらされると考える<sup>47</sup>。その見解に従うならば、ドストエフスキーが癲癇の発作のエクスタシー体験をイスラムの教祖ムハンマドの昇天の奇跡と比較したり、あるいは癲癇を患っていたらしい英雄の一例としてムハンマドをあげたりするのも、真面目な意図とアイロニーのどちらとも取れる反省的なレトリックと考えられるだろう(第3章の議論を参照)。結核やメスメリズム(催眠術)に関するロマン主義的なイメージをパロディの手法で換骨奪胎した描写が見られることにも着目したい(第1章、第2章)

### 3. 病跡学から病気の文化史へー本論の構成

癲癇に罹病した時期をめぐる1881年の議論、ロンブローゾやバジェノフの天才論、フロイトの精神分析、ガストーのような医学者の言説はドストエフスキーの病気の実態が何であったかに関心の焦点を合わせ、隠された病気の本質や「現実」を探り出そうとする。これらは広い意味で病跡学的な態度と見なすことができる。それに対してライスの議論は病跡学的な志向性も持ってはいるが、ドストエフスキー自身の身振りやテキストが病気に関する現実を再構成する過程にも目を向けている。ドストエフスキー以外にはあまり事例の見られないエクスタシー発作が「ドストエフスキー型」として癲癇の症例を代理表象するに至ったことを思い出そう。

病気が創作に影響を与えるだけでなく、作家が病気のイメージを創り出す。このようにして凡庸な作家とは区別される特異性を踏まえるならドストエフスキーのテキストは文化史の貴重な資料となりうる。上述したようにライスの研究は作家の病気研究が文化史に向かうひとつの転換点を示したといえる。もちろんある種の天才の役割を客観的に位置づけるためにはそれと同時に当時の人々の多くが病気を通じて何を想像したのかを明らかにすることも重要である。大衆的傾向の作家を含めて同時代あるいは一世代前の文学作品を幅広く比較検討することにより、ドストエフスキー作品に描かれる病気のイメージのどこが同時代に広く共有されたものであり、どこが作家の独自の発想であるかを見分けることが可能になるだろう。したがって本論は単に病の文化史を論じるだけではなく、「ドストエフスキーと病」の相関関係がどのように文化的に構築されてきたかにも目を向けるものである。

ドストエフスキーによって描かれる病気は癲癇だけではない。狂気や様々な精神疾患については病跡学や精神分析の立場から多くの研究が積み重ねられてきた。しかし例えば『悪霊』におけるコレラ(第4章)や『白痴』における結核(第1章)といった身体の病につい

---

<sup>47</sup> Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, pp.105-106.

ては十分な注意が払われてきたとは言い難い。もちろん社会史・文化史的な疫病の研究には蓄積があるが<sup>48</sup>、それらをドストエフスキーの作品分析と結びつけて考察することはなされていない。それぞれの病気が担った固有の文化的意味を知ることも重要だが、ドストエフスキーにおいては時としてそれらの病気の境目が曖昧になることも留意する必要がある。とりわけ精神と身体がけいれんで震えるとき、ステパン氏の「疑似コレラ」の症状、ナスターシャ・フィリップヴナの結核患者のパロディのような興奮、悪魔憑きを模倣するかのようなアリョーシャ・カラマーゾフの発作は、火事を見た興奮で倒れるプロハルチンの病気は、どこかでドストエフスキーの宿痾たる癲癇と通底している。

癲癇とは幻覚・不安・夢遊状態・鬱などのような精神の変容、痙攣・悲鳴・失神などのような身体の症状という両面にまたがって影響をおよぼす病気である。ドストエフスキーの時代にはまだ有効な治療法が見つかっていなかったばかりかその定義もはっきりしておらず、フロイトの分析にもあるようにヒステリーとの境界は曖昧だった<sup>49</sup>。癲癇の原因も様々であり、症状が遺伝することもあればしないこともある。ドストエフスキーが「真の癲癇」の特徴と考えて恐れていたのは遺伝性であり、それゆえに幼い息子アレクセイを癲癇発作で亡くした衝撃は大きかった。一方で頭部の傷害、アルコール中毒、梅毒、結核などが脳に影響した場合にも癲癇発作は発生する。

また歴史的なパースペクティブを得るために本論では19世紀前半のロシア文化にも目を向けてドストエフスキー作品の病気イメージと比較する。主としてプーシキンやロマン主義期の作家のテキストが取り上げられることになる。結核の文化的イメージやメスメリズムなどの疑似的医学は18世紀後半からロマン主義期にかけて西欧から受容されたものである。また1812年のナポレオンのロシア遠征とモスクワの火事、1830-31年のコレラ流行と民衆の暴動といった歴史的記憶をドストエフスキーの作品に読み取ることができる。他方で本論では例えば身体障害・四肢欠損・歯痛といったやはり重要な意味を持つテーマは扱わない。これらは本論の関心とはまた別の位相でドストエフスキー作品の重要なテーマを構成していると考えられるがそれについては稿を改めたい。

ドストエフスキーは癲癇発作の記録を克明に記していたことも知られており、作家にとって自己の病はその意味が常に問われながらも確定した答えを与えられない永遠の謎であった<sup>50</sup>。したがって個々の病気の文化史的な固有の意味を分析した上で、それらを横断して繰り返される作家独自のイメージを重ね合わせることで、ドストエフスキーの癲癇研究においても新たな視点を提示することができるだろう。アーサー・クラインマンが指摘するよ

---

<sup>48</sup> 後藤正憲「革命と結核」『スラヴ研究』50号、2003年、269-283頁；Roderick E. McGrew, *Russia and the Cholera, 1823-1832* (Madison: Wisconsin UP, 1965)

<sup>49</sup> オウセイ・テムキン『てんかんの歴史』中央洋書出版部、1988年。とりわけ2巻の19世紀の項を参照。

<sup>50</sup> 望月哲男「謎への情熱—癲癇の記録から見たドストエフスキイ」『えうゐ』22号、1991年、44-55頁。

うに患者が語るそれぞれに差異のある病いの物語は文化・社会的な文脈と個人の来歴の双方から編まれるものなのだ<sup>51</sup>。

第1章では『白痴』を主に取り上げてそこに現れる結核のイメージについて考察する。「肺病 чахотка」という古い名称は「結核 туберкулез」に比べて文学的な含意が感じられる。早すぎる死を運命づけられた薄幸の美女や才能ある若者というロマン主義的なイメージはロシアにおいても広く受容された。とりわけアレクサンドル・デュマ・フィスの『椿姫』(1848年)およびジュゼッペ・ヴェルディによるオペラ版『椿姫 (トラヴィアータ)』(1853年)は肺病やみの娼婦というステレオタイプを流通させた。ドストエフスキーの『白痴』のナスターシャ・フィリッポヴナは身体的には健康でありながら椿姫のイメージが意図的に重ねられている。一方で肺病による死を宣告された若者イッポリトはそのロマン主義的な悲劇の身振りが期待された効果を得られず、常に滑稽な役割を演じる羽目に陥る。このように病気に関するステレオタイプがパロディ的に借用されるようなケースはライスのいう「反省」的なレトリックの一種として考えることができるだろう。

第2章では催眠術を取り上げる。例えば明確な目的地もなくペテルブルグを彷徨い歩くラスコーリニコフのように、ドストエフスキーの登場人物はしばしば覚醒と夢見の狭間にあるような不安定な意識をさらけ出す。これは作家自身が癲癇発作の後に体験したという記憶の混乱や朦朧感覚とも共通する。催眠術の原型となったのは18世紀末のフランスで流行したメスメリズムとされる。ドストエフスキーはバルザックやオドエフスキーといったロマン主義期の文学作品を通じてだけでなく、ドイツロマン派の影響の強い医学・哲学の文献からもメスメリズムの知識を得ていた。第1節ではそのロシア文化における受容を概観し、第2節では初期短編『主婦』と後期長編『白痴』を中心にドストエフスキー作品における催眠術のモチーフを分析する。心霊術やオカルティズムとの接点が多いメスメリズムは、第1章で論じた結核のイメージと同じように、ロマン主義のパロディとして皮肉な距離において描かれることが多い。一方で本人が自覚していない隠された欲望や潜在意識が催眠術的な語彙を用いて表現されており、不条理でありながらリアリティのあるドストエフスキー特有の迷宮のような人間の心理描写を可能にしている。

第3章では癲癇発作と類似した病理現象として悪魔憑きあるいはヒステリーを取り上げる。農村女性に多くみられた悪魔憑き(クリクーシャ)についてはウォロベツの社会史・文化史的な研究があり、本章の関心とも重なっている<sup>52</sup>。ここでは真にデモーニッシュな現象、何らかの利益を得るために演じられた詐病、過酷な環境におかれた女性の病理現象(癲癇あるいはヒステリー)というクリクーシャについての三つの解釈を区分し、17世紀から

<sup>51</sup> アーサー・クラインマン『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、1996年。

<sup>52</sup> Christine D. Worobec, *Possessed: Women, Witches, and Demons in Imperial Russia* (Northern Illinois UP, 2003)



19世紀までの通時的な時系列と農民・貴族・知識人という共時的な社会層の二つの断面に沿って異なる解釈が現れることを明らかにした。イスラムの預言者ムハンマドについても、キリスト教圏においてはその奇跡や神秘体験が詐欺師の芝居だとする意見が支配的だったが、19世紀に入ってからムハンマドが癲癇患者だという説明が説得力を帯びる。病跡学・医学的な解釈はイスラムやキリスト教という差異を超えて宗教指導者の比較を可能にした。真の宗教に対する偽の宗教（詐欺師）といった価値判断は後景に退くことになる。ドストエフスキーにとってこれらの問題は悪霊に憑かれた男がイエスによって癒されるという聖書に由来する信仰治療の物語と重なるがゆえに関心を抱かざるをえなかった。

第4章では19世紀になって初めて世界史に登場するコレラを扱う。死をもたらす伝染病としてのコレラはしばしば無神論や社会主義などの「伝染性」のある思想のメタファーとなった<sup>53</sup>。革命によってヨーロッパが震撼させられた1830-31年や1848年がコレラの流行と重なったこともイメージの重複をうながした。第1節と2節ではプーシキン時代を中心にして文学やフォークロアにおいてコレラと民衆の暴力のイメージの複雑な重なり解き明かす。第3節はドストエフスキーの『悪霊』論になっている。小説で描かれるコレラは言葉や思想が人間に影響を及ぼすことの意味を掘り下げる役割を果たしている。ステパン氏の「疑似コレラ холерина」がシュピングリン工場の「コレラ暴動」と対比されることによって、1840年代のペトラシエフスキーと1860年代のネチャーエフの世代の革命思想の連続性と断絶が俎上に載せられる。ドストエフスキー自身が40年代末に経験した政治的な病気をここで思い出すこともできるだろう。

第5章ではドストエフスキーの創作において謎めいたかたちで癲癇の描写に関与している火事のモチーフを取り上げる。『悪霊』のクライマックスで描かれるように火事もまた革命のメタファーではあるが、伝染病のように専ら否定的なイメージを担うだけではなく、ユートピアに向けて旧世界を浄化する炎として肯定的な意味合いでも用いられてきた。放火は弱者である民衆あるいは女性が反逆のために依拠する手段ともみなされる。急激な近代化と人口統計の進展によりドストエフスキーの時代にはロシア全土で火事が増えているというイメージが構築されていた。ドストエフスキーの作品ではこうした様々なイメージが人が火事を目の前にしたときに覚える病的興奮や癲癇発作後の朦朧状態（自動症）で行われる放火といった病理現象と重ね合わされている。

\*本論は以下の発表済みの論文に基いている。

Го Косино, Чахотка в творческом мире Достоевского (ドストエフスキーの作品世界における肺病)、『スラヴ学論叢』第5号(2)、2001年、324-328頁  
越野剛「ロシア文学とメスメリズム」『ロシア語ロシア文学研究』第31号、1999年、15-29頁

<sup>53</sup> Богданов К.А. Врачи, пациенты, читатели, пациенты, читатели. Патографические тексты русской литературы XVIII – XIX веков. М.: О.Г.И., 2005. С.345-406.

Го Косино, Достоевский и гипнотизм («Хозяйка» и другие произведения) («ドストエフスキーと催眠術：『主婦』その他の作品について」、ロシア語) // *Japanese Slavic and East European Studies*, Vol.21, 2000、pp.43-56.

越野剛「プーシキンとコレラ」『スラヴ学論叢』第4号、2000年、126-138頁

越野剛「病気・ナロード・ツァーリ ——19世紀コレラ暴動をめぐる言説の研究」『スラヴ学論叢』第5号(2)、2001年、186-197頁

越野剛「悪魔憑きとムハンマド：ドストエフスキーの癲癇研究の一環として」『ロシア語ロシア文学研究』第36号、2004年、17-24頁

越野剛「『悪霊』におけるコレラのイメージと権力の問題」『ドストエフスキー広場』第15号、2006年、4-19頁

## 第1章 身体の結核と精神の結核

結核はしばしばロマン主義的な想像力のなかで美化されてきた<sup>54</sup>。死病を患う主人公は若く見目麗しくなくてははいけない。女性の患者では『椿姫』のような美しい娼婦の人气が高い。男性であれば詩人、音楽家、革命家などが考えられるが、早すぎる死のために失われる才能を惜しまれる。その最期は悲劇的で美しい。青ざめた容貌は特別な魅力を添える。結核特有の消耗と悲嘆が思いがけない瞬間に烈しい熱情と入れ替わる。それは病気の天才の気まぐれともインスピレーションの契機ともつかない。また結核はセクシャルな病であるとも考えられ、過剰な性欲や欲求不満が病気の原因とされ、しばしば娼婦のイメージと結合した。スーザン・ソントグは純粹に肉体の病気である癌と比較して、結核は呼吸器官である肺を通じて霊的・精神的な病として想像されたと論じている<sup>55</sup>。19世紀には歴史的な呼称として「肺病 чахотка」が一般的であり<sup>56</sup>、厳密に言えば現代の「結核 туберкулез」の医学的理解とは異なる点もあるが、本論では特に区別をせずに用いることとする。

### 1-1. ロマン主義とプーシキンの結核

19世紀にはロマンチックな病気のイメージが広まった挙句に結核にかかることは一種のモードとなった。イギリスのダンディズムの典型たる詩人のバイロンはあるとき「肺病になりたいものだ」と言ったという。友人が「どうしてだい」と尋ねると、「私の青白い顔がご婦人方のお気に召すからさ」とバイロンは答えた<sup>57</sup>。二人の対話が実際に行われたかどうかの信憑性は心もとないが、この逸話自体が広く知られるようになったことが当時の上流階級における結核の流行ぶりをよく示している。

美化された結核のイメージはバイロンのようなロマン主義文学を通じてロシアでも受容された。アレクサンドル・プーシキンは祖国戦争の英雄ニコライ・ラエフスキー将軍の娘エレーナを肺病患いの美女になぞらえて詩（1820年）をささげている。

Увы! зачем она блистает

ああ！どうしてあの人は

Минутной, нежной красотою?

一瞬の可憐な美に燃ゆるのか？

<sup>54</sup> 結核の文化的イメージについては以下を参照。福田真人『結核の文化史：近代日本の病のイメージ』名古屋大学出版会、1995年；福田真人『結核という文化：病の比較文化史』中公新書、2001年。結核の社会史については以下を参照。ルネ・デュボス、ジーン・デュボス『白い疫病—結核と人間と社会』結核予防会、1982年

<sup>55</sup> スーザン・ソントグ『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』みすず書房、25-26頁。

<sup>56</sup> 英語であれば consumption に該当する。

<sup>57</sup> Leslie A. Marchand, *Byron: A Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1957), p.5.

Она приметно увядает	見るからに萎れゆく
Во цвете юности живой...	健やかなる花ざかりの歳に...
Увянет! Жизнью молодою	萎れてしまう！うら若い身を
Не долго наслаждаться ей;	生きる喜びも久しからず <sup>58</sup> 。

実人生のエレーナ・ラエフスカヤは決闘で死んだプーシキンより 20 年も長生きしており、病気のイメージは文学上の約束事でしかないことが分かる。病身の女性のはかない美しさはしばしば秋のイメージに重ねられる。もっと後に書かれた『秋』（1833 年）では枯葉散る季節への詩人の愛着が次のように描写される。

いかに解き明かせようか？私が秋を好むのは、  
 きっと君たちが肺病やみの乙女 чахоточная дева を  
 気に入ることがあるのと同じ。死を宣告されて  
 哀れな娘はうなだれる。うらみも怒りもみせず。(Пушкин 3-1, 319)

多くの文学作品において結核はロマン主義の潮流を示す標識となっているが、プーシキンはあまりに紋切型になった病気のイメージには皮肉な距離をおいている。『エヴゲニイ・オネーギン』の 8 章（1831 年）にはタチアーナに再会したオネーギンが恋しさのあまり結核を患うという描写がある（31 連）。冷静で皮肉屋のオネーギンが柄にもなくロマンチックな恋に夢中になる様子を描くために結核のモチーフをロマン主義のパロディとして用いている。

Она его не замечает,	あの人は気がついてくれない
Как он ни бейся, хоть умри.	必死になってあがいてみても。
Свободно дома принимает,	気兼ねなく家に迎え入れても、
В гостях с ним молвит слова три,	客として僅かな言葉をかけるくらい、
Порой одним поклоном встретит,	ときには会釈で済ませ、
Порою вовсе не заметит:	目にもとめぬことすらある。
Кокетства в ней ни капли нет -	気を引く様子はかけらもなし、
Его не терпит высший свет.	彼は社交界の嫌われ者なのだ。
Бледнеть Онегин начинает:	オネーギンは血の気が薄れだす。
Ей иль не видно, иль не жаль;	あの人には見えぬか、心痛まぬか。
Онегин сохнет - и едва ль	オネーギンはやつれ衰え、

<sup>58</sup> Пушкин А. С. Полн. собр. соч. М.;Л.: Изд-во АН СССР, 1937-1959. Т. 2-1, С.143. 以下のプーシキンからの引用は巻数とページ数を（）内で示す。

Уж не чахоткою страдает.  
Все шлют Онегина к врачам,  
Те хором шлют его к водам.

いまにも肺病を患わんばかり。  
一同はオネーギンを医者にやり、  
医者どもは声をそろえて鉱泉を勧める。

プーシキンの初期と 1830 年代の作品を比較してみると、肺病患者の描写が美的なイメージからロマン主義の約束事のパロディへと変化していることが分かる。それはプーシキンがバイロンへの熱心な傾倒から年齢とともに距離を置くようになるプロセスと並行するものだといえよう。

## 1-2. ドストエフスキーと結核—『椿姫』とのテキスト上の対話

1848 年にアレクサンドル・デュマ・フィスの『椿姫』が出版されるとたちまちベストセラーになった。マルガリータ・ゴーチエの悲劇的な人物像は読者の琴線に触れ、「結核病みの娼婦」というロマン主義的なステレオタイプを育てることになった<sup>59</sup>。ジュゼッペ・ヴェルディによるオペラへの翻案『トラヴィアータ (椿姫)』(1853 年) も成功をおさめ、ロシアをふくむヨーロッパ中の劇場に観客を呼び寄せた。『椿姫』が及ぼした反響の大きさはリアリズム期のロシア文学の作品の多くに痕跡を残している。ドストエフスキーもその例外ではない。

後期のプーシキンが結核の美的なイメージをパロディーの対象にしたように、ドストエフスキーもロマン主義の紋切型のモチーフをアイロニカルにも解釈できるような両義的な距離をおいて用いる場合が多い。序章で論じた「反省的」な手法の一種といえる。美しい病気が描かれるのもまた幾多の複雑な屈折を通じてである。以下ではドストエフスキー作品における結核の描写を三つの手法に分けて分析する。

### 1-2-1. リアリズム的用法

ドストエフスキーが作家としてデビューする 1840 年代には病気のモチーフはロマン主義の陰りのある美学よりも、「生理学もの」に代表されるような現代社会の病巣のリアルな描写と結びつくようになった。例えば『貧しい人々』(1846 年) のヴァルヴァーラの淡い初恋の相手だった貧乏学生のパクロフスキーは肺病にかかって早死にしてしまう。実は富裕な地主ブイコフの隠し子だという設定は、後の『虐げられた人々』のネルリとヴァルコフスキー公爵や『未成年』のアルカージイとヴェルシーロフの親子関係につながる。一方で名義上の父であるアルコール中毒の老パクロフスキーが早すぎる子の死を悲しむ場面は初期ドス

---

<sup>59</sup> 『椿姫』における結核のイメージについては以下の論考を参照。寺田光徳「19 世紀のフランス文学と結核 (前編)」『熊本大学文学部論叢』100 号、2009 年、81-104 頁。

トエフスキーらしい人道主義を強く感じさせる。ここでは結核で早死にする若者が美化されているわけではないが、社会の病巣や不公正を批判するための感傷的な物語の中で役割を果たしている。

『椿姫』で描かれる肺病患いの娼婦も社会批判や人道主義を目的とするリアリズム文学で好んで取り上げられる。その典型はチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』(1863年)に登場するナスターシャ・クリュコヴァである。彼女は娼婦として暮らしていたところをキルサーノフによって救われ、ユートピア的な女性の共同体である裁縫工場で働くことによって更生するが、長年の患いである結核によって命を落とす。墮落した女性(娼婦)の救済というモチーフは1860年代の文学作品で流行し、例えばドストエフスキーの『罪と罰』『白痴』はその系譜に位置づけられるし、『地下室の手記』はそのパロディと見なすこともできる<sup>60</sup>。

『罪と罰』(1866年)の娼婦ソーニャ・マルメラードヴァの母カチェリーナは不公正な社会を恨みながら結核に犯されて死んでいく。ここでは『椿姫』の肺病やみの娼婦という典型的な役柄が「肺病やみの母」と「娼婦の娘」に分割されたと考えられる。悲劇のヒロインの属性の一部が母親に移されることによって結核の美的なイメージが弱まる。

現実の病気の症状はもちろんロマンチックな印象からは程遠い。次のようなカチェリーナの吐血の場面を思い起こそう。「そのとき笑いは抑えがたい咳き込みに変わって五分あまり続いた。ハンカチにはいくつかの血痕が残り、額には玉の汗が浮き出た。彼女は黙って血をラスコーリニコフに見せた。そして辛うじて息を継ぐと、すぐさま両頬に赤いしみを浮かばせ異様なほど興奮しながらラスコーリニコフにささやきかけるのだった」(6, 294)。吐血と並んで頬に浮かぶ赤い斑点は結核患者の典型的な症状として描かれるものだ。父マルメラードフのアルコール中毒と合わせてドストエフスキーは貧困の連鎖を社会問題として提示しているように見える。しかしマルメラードフがせっかく手に入れた仕事を台無しにしてしまうように、カチェリーナの病気もどうせ思うようにならない境遇ならばあえて最悪の選択に身をまかせるという自尊心とマゾヒズムが混じり合った非合理的な実践と結びついている。犯罪や貧困を社会的な要因ではなく、あくまで人間の内面のメカニズムで説明するのがドストエフスキーのリアリズムであろう。しかしそこで描かれる人間のふるまいは複数の情動や動機とそれらに対する反発とが複雑に作用しており、明確なひとつの主体の意志に還元できるものではない。その点でドストエフスキーがしばしば批判する環境決定論が個人の責任をあいまいにするのと奇妙に一致するように思われる。

結核病みの母と娼婦の娘という組み合わせは『虐げられた人々』(1861年)にも見ることができる。貧しい少女ネルリは母親が肺病で亡くなるとあやうく売春宿に売り払われそうになる。結果的には語り手のイヴァンの努力によって救われるという違いはあるが、『罪と罰』のソーニャの境遇と重なる。少女の身边を探っていた探偵マスロボエフの観察によれば

---

<sup>60</sup> Irina Paperno, *Chernyshevsky and the Age of Realism: a Study in the Semiotics of Behavior* (Stanford UP, 1988), pp.102-103.

結核病みの母親の性格は次のように説明される。「あれはとんでもない女でしたよ。諸々の事情を考えてみてください。ロマンチズムなんです。これはみんな発狂するほどの度を越したお花畑の愚かさです。たとえば、そもそもの始めから地上の天国とか天使とかいうようなものを夢見ていました」。ヴァルコフスキー公爵に裏切られ、財産を奪われた挙句に捨てられると「彼女のロマンチックでおかしくなった心はそのような変化に耐えられなかった」ので、自分が騙されたという現実そのものを否定するかのよう公爵から手切れ金を受け取ることを拒み、あえて赤貧の境遇に身を投じる。「もちろん、あの子の母は肺病にかかっていた。この病気はとりわけ憤懣とあらゆる種類のいら立ちを助長しますよね」(3,437-438) というマスロボエフの指摘は、あたかもこのような性格の女性が結核を病むことは必然であるかのように響く。ちなみに娘ネルリには癩癩（倒れ病 *подучая болезнь*）の発作を起こす描写がある。母親の病的なまでの自尊心の強さや空想癖はネルリにも受け継がれており、それが癩癩のイメージとも結びつくと考えられるだろう。

ドストエフスキーと結核との関りを考える上で重要なのは最初の妻マリアも同じ病気を患っていたことである。流刑先のシベリアからヨーロッパ・ロシアへの帰還を許されて間もなく 1860 年代の始めにマリアが肺病であることが明らかになった。ペテルブルグの寒冷な気候が病気を悪化させる恐れがあるという理由から、マリアは夫から離れてヴラジーミルやモスクワで療養することになった。彼女の激しやすい性格が肺病とも結びつき、夫婦の生活が不幸せなものとなる要因のひとつとなった。この時期のドストエフスキーは妻をひとり残して、癩癩治療という名目で西欧を旅行し、愛人スースロワと会ったりしている。とはいえ 1864 年の春にマリアが結核の末期症状に苦しみながら死を迎えた際にドストエフスキーが献身的に妻の世話をしたことも知られている。

ドストエフスキーはシベリア時代の友人でマリアをよく知っていたヴランゲリへの手紙で次のように書いている。「友よ、彼女は止めどなく私を愛したし、私も彼女を無性に愛したけれど、私たちの暮らしは幸せではなかった…。私たちは一緒にいるとまったく不幸だったのに（彼女の風変りな、猜疑心の強い、病的なまでに空想的な性格のせいで）、互いを愛することを止められなかった」(28-2, 116)。二番目の妻アンナは回想記でヴランゲリ宛の手紙から「風変りな、猜疑心の深い、病的なまでに空想的な性格 *больно фантастический характер*」という言葉を用いて、夫の最初の結婚生活が不幸せだった原因だとみなしている<sup>61</sup>。このような性格付けはドストエフスキーが小説で描く結核による死を前にした登場人物を思い起こさせる。マリアの人物像は『罪と罰』のカチェリーナ、『白痴』のナスターシャ、『カラマーゾフの兄弟』のカチェリーナなどに反映されていることがすでに指摘されている<sup>62</sup>。

<sup>61</sup> *Достоевская А. Г. Воспоминания. М.: Правда, 1987. С.201.*

<sup>62</sup> *Белов С.В. Ф.М. Достоевский и его окружение. Энциклопедический словарь. СПб.: Алетей: Российская национальная библиотека, 2001. Т.1. С.255.*

## 1-2-2. パロディ的用法

『白痴』(1868年)の重要な登場人物である結核病みの青年イッポリートの人物像は、美化されたステレオタイプな病気のイメージに対するパロディとして読み解くことができる。孤独な病床で死をめぐる独自の思想を構築する若者という設定は、ロマン主義的悲劇の主人公となる条件を満たすように見える。しかし結核患者として然るべき機会に死ぬことができず、その最期が常に先延ばしされるという小説のプロットのせいで、イッポリートの物語は喜劇になってしまう<sup>63</sup>。イッポリート自身もその滑稽さを意識しており、ムイシキン公爵に向かって次のように問いかける。「連中はぼくをできるだけ早く死ぬという条件で受け入れたなんて信じられますか。ぼくが死なないでむしろ逆によくなっているというのでみんな怒り狂っているわけです。喜劇ですよ！誓ってもいいですが、あなたはぼくを信じていませんね」(8, 431)

イッポリートは人々の前で自らの信念を打ち明けた後に拳銃で自殺を試みるが、雷管を入れ忘れてしまい不発に終わる。惨めな自殺未遂は即座に笑いの対象となってしまう。ゲーテのウェルテルにならったロマン主義的な自殺のパロディともいえるだろう<sup>64</sup>。

イッポリートの結核はツルゲーネフの『その前夜』の主人公インサーロフと比較することができる。インサーロフも物語の終盤で結核を患うが、その描写にはもちろん滑稽な要素はなく、悲劇の主人公にふさわしい死を迎える。しかしツルゲーネフもロマン主義のステレオタイプを単純に踏襲しているわけではない。『その前夜』にはヴェルディのオペラ『椿姫(トラヴィアータ)』を観劇する場面がある。「まるでわざとのように、女優による演じられた咳に呼応して栈敷席から虚ろな本物の咳が響いた。(…) ヴィオレッタの演技はますます良くなり、自由になった。(…) 突如として彼女は定義することはできないが、その向こうに美が息づいている境界線を越えた」<sup>65</sup>。小説の語り手はヴェルディのオペラを通俗的なものだとあまり評価していない。しかしインサーロフが実際に患う結核が舞台上の虚構の病気に作用して、凡庸な女優の演技が高められて美的な迫真性を獲得している。

ブルガリア人革命家のインサーロフは優柔不断で行動性に欠けるロシアの知識人との対比として提示される極めて理想的なキャラクターであり、あまりの超人ぶりのせいで生身のリアルな人間を感じさせないとしばしば批評される。しかしツルゲーネフはむしろ現実のロシア社会には存在しない理想像を描くため、あえて過剰なほどのロマン主義的な属性をインサーロフに与えたのではないだろうか。ロシアの知識人の現実を変える力のない余計者の理想主義がここでは舞台上の虚構の病気に喩えられ、インサーロフの本物の結核

<sup>63</sup> 結核患者がつかの間の活力を取り戻すというモチーフ自体は珍しいものではないが、あくまでそれは不吉な死の前兆として描かれる。ソントグ『隠喩としての病い』、18-19頁。

<sup>64</sup> 18世紀末から19世紀初めにかけてのロシアにおける「哲学的自殺」の流行については以下を参照。ユーリイ・ロートマン『ロシア貴族』筑摩書房、1997年、301-312頁。

<sup>65</sup> *Тургенев И.С. Накануне // Полное собрание сочинений в 30 томах. М.: Наука, Т.6, 1981. С. 288.*



は舞台の外部からロシア社会に変化をもたらす超越的な契機として描かれていると考えることもできる。そのためにツルゲーネフはロマン主義の紋切り型を故意に過剰なかたちで用いたのである。

ドストエフスキーも結核で早すぎる死を迎える若者という設定がそのままでは通俗的な物語の焼き直しであることを理解していたはずである。『白痴』のイッポリートは美しい病気のイメージをひっくり返されることで過剰な喜劇性を与えられている。イッポリートが自殺を決意して聴衆の前で「必要不可欠な弁明」という大げさな題の論文を朗読するという場面はそれだけですでに滑稽な雰囲気醸し出すが、そこで論じられるのは結核による死を前にした人間の意識という『白痴』の重要な死刑囚の主題のひとつの変奏であり、それがドストエフスキーの時代の読者にロマン主義の色彩を抜きにして伝わるために何重ものアイロニカルで喜劇的な枠組みが必要とされたのである。後の場面でムイシキンが彼の論文の「もっとも滑稽な部分ですら (...) 苦しみであがなわれたもの」であり、それを人々の前で告白する行為そのものが苦しみであり勇敢さを示すという感想を述べている (8, 433)。イッポリートの人物像を構成する要素 (若さ、貧困、病気、自殺、哲学) はみなロマン主義のステレオタイプであり、ソクタグのいう病のメタファーそのものである。しかし紋切り型のイメージをそれと分かったうえでパロディとして過剰に流用する方法は、病のメタファーからの出口を指し示すともいえる。

### 1-2-3. 精神の結核

『白痴』のナスターシャ・フィリップヴナは結核を病んでいるわけではないが、多くの点で『椿姫』のヒロインと共通する特徴を与えられている。例えば椿の花はしばしばナスターシャを高級娼婦に見立てる小道具の役割を果たしている。例えば、ムイシキン公爵がナスターシャの名の日の祝いの夜会に何とかして顔を出そうと努めている際にイヴォルギン将軍は彼女を「恥知らずの椿の花 бесстыдная камелия」と呼ぶ (8, 107)。ムイシキンを敬愛するユーリヤ少年も「椿の花と将軍と高利貸しの会」を訪れないよう説得する (8, 112)。小説の終盤では酔っぱらったレーベジェフがムイシキンの愛する二人の女性、アグラヤーとナスターシャを比較して、「無垢で誇り高い将軍家の乙女と...椿の花とでは大きな違いがあるというものでございますよ」と語る (8, 439)。

夜会の出席者がそれぞれ人生でしでかした最も恥ずべき行為を告白しなくてはならないという「ミニゲーム пути-жэ」の場面で、トーツキイの語る椿の花のエピソードも興味深い。トーツキイはまずデュマの小説が出版された当時の人気ぶりを思い出しながら話を始める。「その頃に恐ろしいほど人気があったのは、上流社会でその名をとどろかせたばかりのデュマ・フィスの素敵な小説『椿姫』でした。私が思うに、あれは決して死ぬこともない、古びることもない詩ですな。田舎の貴婦人たちは我を忘れるほど惚れこんでましたよ。少なくとも読んだことのある人はですが」 (8, 128)。それはある貴族夫人に恋焦がれた男が彼女の

好意を得るために苦勞して見出した貴重な紅い椿の花をふとした気まぐれからトーツキイが横取りするという物語である。

幼い孤児ナスターシャを引き取って自分の愛人に育て上げ、彼女が墮落した女と見なされるような状況を作ったのがトーツキイだという二人の関係性を知る聴衆たちは、どんな恥ずべき行為が打ち明けられるのかという期待をこめて話に聴き入る。トーツキイの話は社交界の場で許される規範をわきまえたものとはいえ、好色家の悪事の告白としてはいささか物足りず、ナスターシャとの因縁にも無関係なように見える。そもそもスキャンダルなしでナスターシャと手を切ることを狙うトーツキイが彼女を挑発するような発言をするとは考えにくい。ここでの椿はロシアの社交界の婦人たちが憧れるロマンチックなイメージに留まっており、『椿姫』のヒロインとナスターシャの共通点である「墮落した女」という問題には言及されない。しかしムイシキンが問題の夜会の場にたどりくまでの道のりでイヴォルギン将軍やコーリヤがナスターシャを「椿＝高級娼婦」と形容してきたことを覚えている読者は、トーツキイが盗み取った椿の花束にも夜会の女主人のイメージを重ねざるを得ない。とりわけ皆が手に入れることを熱狂的に欲する椿の花に対して示される軽薄な態度は、椿に喩えられるナスターシャとの関係を反復しているともいえる。ナスターシャはその打ち明け話に異様な関心を示しながら、それが終わるやいなやトーツキイに対して「あなたのいう通り、ミニゲームは退屈ですわね」と素気ない感想を述べる。

トーツキイの愛人だったナスターシャがガブリーラとの婚約を披露する場として設定されていたはずの夜会は、彼女のトーツキイへの意趣返しを主たる動機付けとすることが次第に明らかになる。ロゴージンが彼女を手に入れるために用意した10万ルーブルの現金が場面に登場すると、ナスターシャはトーツキイを「椿紳士 *monsieur aux camélias*」と呼んで挑発する。彼女と手を切るために提示された7万5000ルーブルを念頭において、ナスターシャはお高くとまった社交の場で女性の身体が売り買いされている二重性を暴露し、トーツキイを自分と同じ墮落した椿の花のイメージに格下げしようと試みるのだ。ガブリーラとの結婚というお膳立てされたシナリオもムイシキンの恐ろしいほど純真なプロポーズのどちらも拒絶し、一見すると最悪の選択であるロゴージンとの駆け落ちを決めるナスターシャのふるまいは、トーツキイにあてつけた愛憎が複雑に屈折する自己破壊的な復讐の心理として理解できる。「トーツキイの妾 *наложница*」「街の女 *уличная*」「あばずれ *распутная*」などナスターシャを貶める表現の多くが彼女自身の口から発せられることも注意に値する。そのクライマックスといえる10万ルーブルの札束をナスターシャが火にくべる場面については第5章で改めて論じる。

結核は「白い疫病」と称されることもあったように肌色が青ざめるという視覚的に顕著な特徴がある。先述したバイロンのように「青白い容貌」は結核患者を美化する極めてロマン主義的なモチーフだった。ナスターシャとトーツキイの過去の因縁について語り手が読者のために概説する箇所では、彼女の精神面だけではなく身体上の変貌が強調される。田舎の領地に囲っていたナスターシャが不意にペテルブルグにいるトーツキイの前に以前とは全

く異なる冷笑的で危険をはらんだ存在として姿を現し、二人の間に新たな関係を構築する。トーツキイは彼女の性格だけではなく、外見までも以前と見違えるほど美しくなったことを知り、もっと早くにその変化を見抜けなかったことを後悔すらしているが、その恐ろしいまでの美とはまさに肺病患者の青白い容貌であった。「トーツキイはここ最近の二年間、ナスターシャ・フィリップヴナの顔色の変化に幾度も驚かされた。彼女は恐ろしいほど青ざめてきたが、奇妙なことにそのせいでまた美しくもなったのだ」(8, 38)。ステレオタイプな肺病やみの美人のイメージがあからさまに用いられているが、ナスターシャの身体が実際に病気を患っているわけではないため、ロマン主義の美化された登場人物とは異なっている。むしろ精神的な結核とでも呼べるような内面の劇的な変貌が身体に投影され、人々を魅了する奇妙な美を産み出したといえよう。

「燃えるような目 *огненные глаза*」、とりわけ「両頬の赤い斑点 *красные пятна в щеках*」は結核患者を描写する典型的な形容辞であり、本物の肺病患者であるイッポリートを描写する際にしばしば用いられる。例えば自殺によって人生に別れを告げることを決意して自作の論文「必要不可欠な弁明」を聴衆の前で朗読する場面では、フェルディシエンコに半畳を入れられたイッポリートが興奮のあまり「目をぎらぎら輝かせ、頬に二つの赤い斑点を浮かばせ」ながら抗議する(8, 325)。興味深いことに身体的には健康であるはずのナスターシャも同じような病気の徴候を示す。夜会の出席者がそれぞれ恥ずべき行為を打ち明けるというミニゲームが提案された際のナスターシャの身振りは以下のように描かれている。

今や彼女はヒステリーを起こしたかのように落ち着きをなくし、とりわけ心配したトーツキイが反対するのに向かって震えるように発作的に笑うのだった。黒い眼はぎらぎら輝き、青ざめた頬には二つの赤い斑点が浮かんだ」(8, 121)。

ここでもナスターシャの病的な興奮は主としてトーツキイに向けられていることが明らかである。言い換えるなら、ナスターシャの転落の主因である「椿紳士」のトーツキイに對峙した時にこそ、結核持ちの娼婦という椿姫のイメージが彼女の身体上に描き出されるのだ。「ヒステリー」に言及されていることから、ここでの肺病を示す典型的な徴候は単なる感染症を示すのではなく、肉体と精神にまたがる心身症として描かれていることが分かる。例えば極度に虐げられた自尊心が不合理に映るほどの自虐的な攻撃性を誘発していると解釈することができるだろう。「震えるように発作的に *судорожно, припадочно*」という形容はヒステリーや癲癇を表現する病的な身振りでもある。躁鬱的な気分の入れ替わりも肺病患者の特徴的な身振りとして描かれるものである。「ワインを手にとって今夜なら三杯は飲んでやるわと告げるナスターシャ・フィリップヴナの奇妙な、時として非常に激しく目まぐるしい奇行やヒステリックでの的外れた笑いが不意にだんまりとして陰鬱ですらあるもの思いに入れ替わる。そこから何か意味を見出すのも難しかった」(8, 119)。

同様のことはイッポリートの病的な心身の描写についても指摘することができる。もち

ろん両者には明確な違いもあり、血を吐いたり咳き込んだりといった極めて肉体的な徴候はイッポリートにしか見られないことは指摘しておくべきだろう。ひとつの図式にまとめれば、本物の結核患者でありながらロマン主義的な病気の精神性を与えられないイッポリートと身体的には健康なのに精神的な肺病の症例を示すナスターシャの双方を描くことで、ドストエフスキーは病気のイメージのステレオタイプな枠組みを打ちこわし、癲癇やヒステリーとも重なり合うような幅のある人間の病的な心理と実践を示すものとして結核を用いたといえるだろう。

### 1-3. 病のイメージの過剰とパロディ

ドストエフスキーの作品では身体の病気は複雑な屈折をはらみながら人間の内面の心理と結びついている。『罪と罰』のカチェリーナも『白痴』のナスターシャとイッポリートも結核患者のイメージを追わされた登場人物は異様なほど高い自尊心が辱められることで精神的危機に追いやられるという共通点がある。赤貧の中でも誇らしくふるまうことに執着するカチェリーナのふるまいは「プライドと虚栄心の発作 пароксизмами гордости и тщеславия」と病理的な用語で説明されている(6, 290)。他方で『白痴』のもう一人のヒロインであるアグラヤも自尊心の高さが強調されているが、社会的・経済的に守られた立場にある彼女は決してナスターシャのような辱めを受けることはなく、したがって肺病患者のイメージは与えられない。アグラヤにはむしろヒステリーの徴候の方が身分的にも似合っている。それに対してナスターシャとイッポリートは社会的・経済的に独立しておらず、強者に依存する立場にあるため、むやみに高いプライドは常に侮辱を受けやすい無防備な状態にある。もちろんカチェリーナの事例で見たようにドストエフスキーは貧困が病気や犯罪を生み出すというような環境決定論には組さない。内的情動のしばしば不合理な表出こそが人間のふるまいを決定するのであり、社会環境はあくまでも副次的要因にすぎない。

結核型の登場人物は精神面ではいら立ちやすく、過剰な興奮はヒステリーのような神経性発作をもたらすだけでなく、狂気に行きつくことさえある。亡くなったマルメラードフの追善の会で起きたスキャンダルはカチェリーナのただでさえ歪められた精神の限界を越えて狂わせる。その場面に先立って、語り手は読者に向けて結核と狂気の関係について解説する。「肺病の強度の進行は、医師たちの言うところによれば、知的能力の錯乱を促すそうだ」

(6, 291)。追善の会の混乱の挙句に実際に発狂したカチェリーナについて合理主義者のレベジャトニコフは「肺病にかかると、その結節が脳にまで昇ってくることもあるそうですね。残念ながら私は医学には疎いんですが」と述べる(6, 325)。どちらも自分(語り手、レベジャトニコフ)ではない医者と言説として引用されていることに注意したい。レベジャトニコフはむしろ理性的対話によって狂人の誤謬を正すという一種の説得療法を信奉しており、カチェリーナにも応用しようとして失敗する。一方で小説の語り手は狂気に結核という物理的な病因を見出すことにも、レベジャトニコフのように論理的に解決可能な問題と見な

すことにも距離をおいている。あくまでも前述した「プライドと虚栄心の発作」という制御しえない内的情動の暴発が、カチェリーナを決して自らの利益にはなりえないような不合理な行為に導くのである。

結核という病気がカチェリーナの精神や身振りを決定するわけではない。むしろ辱められた自尊心や現実離れした空想という彼女の性格が身体上に表現されたのがドストエフスキーの描く結核だといった方がよいだろう。それは『辱められた人々』のネルリの母親や『白痴』のイッポリトはもとより、実際には結核患者ではないナスターシャにまで当てはまる。現実の病気を仮構のステレオタイプやメタファーによって表象するというだけではなく、ある意味でメタファーの方が先にあって病気の身振りや徴候を呼び出す構図になっている。病のメタファーの過剰な使用、あるいはイッポリトの例でも検討したようなパロディ的用法がドストエフスキー、あるいはプーシキンやツルゲーネフを含めたロシア文学における結核の描写の特徴となっている。もちろん初期のプーシキンやドストエフスキー、あるいはチェルヌイシェフスキー『何をなすべきか』が描いた肺病患者はむしろロマン主義の文脈で容易に理解できる人物像である。しかし美しい病気という結核のイメージはバイロンからデュマ・フィスにいたる西欧文学の受容の過程でロシア文化に移植されたものである。ドストエフスキーの文学を西欧との対話という枠組みで読み解くならば、結核のイメージにはその反発やパロディを含んだ複合的な受容の痕跡を見ることができるだろう。

## 第2章 人間の無意識の探求—メスメリズムから心理小説へ

ドストエフスキーのリアルで迫力ある心理描写については、すでに多くのことが語られている。とりわけ、精神分析の手法を用いた研究は、フロイト自身のものをはじめとして数えあげればきりが無い。しかしドストエフスキーの作品と同時代の精神医学の関連に目を向けた研究はライス<sup>66</sup>の画期的な研究を除けばそれほど多くない。当然のことながらフロイト以前の医学も人間の心理について多くの考察を行っており、ドストエフスキーはそれをよく知っていた。例えば無意識の概念はドイツの自然哲学を通じてロマン主義の時代にはすでに広く知られていた。それは多様なもので、オカルト的なものから、フロイトやユングの概念の萌芽までをも含んでいた<sup>67</sup>。もちろん不合理な人間の心理に対するドストエフスキーの異様な洞察力は作家の天才的な直観によるところもあるだろうが、一方でそれまでの医学や文学が編み上げてきた人間の内面に関する言説を承知したうえで作品を書いたことも確かなのである。

人間の精神構造に関する理解の歴史を考える際にフランツ・アントン・メスメル（1734-1815年）に始まる催眠術の流れは重要である。初期の催眠術は「メスメリズム」や「動物磁気」あるいは単に「マグネチズム」と呼ばれた。それはメスメルが催眠作用の原因を磁力に似た見えない流体に帰したからである。スコットランドの医師ジェームス・ブレイドはメスメルの流体説を否定したうえで心理的な暗示を重視して、1840年代に「催眠術 hypnotism」という術語を提唱した。ただし、すぐには広まらなかったためドストエフスキーにこの語の使用は見られない。マグネチズムは海外文学の翻訳では「磁力」とされることが多いが、それでは催眠術のニュアンスがうまく伝わらないきらいがある。

ドストエフスキーが催眠術（メスメリズム）を知るに至った源泉はいくつか考えられる。同時代の医学文献、それに影響を受けた諸外国およびロシアの文学作品である。メスメリズムはロマン主義の運動と結びつくことが多く、ドイツ経由でロシアのロマン主義文学にも影響を与えた。本章では第1節で催眠術の原型であるメスメリズムのロシアにおける受容の過程を概観し、主にロマン主義期の文化史においてメスメリズムが人間心理のメカニズムの理解に果たした役割を明らかにする。第2節ではドストエフスキーの作品において催眠術が果たしている役割をロマン主義文化との連続と断絶の両方の観点から分析する。

### 2-1. ロシアのロマン主義文学とメスメリズム

#### 2-1-1. メスメリズムの概略<sup>68</sup>

<sup>66</sup> James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art* (Ann Arbor: Ardis, 1985)

<sup>67</sup> アンリ・エレンベルガー『無意識の発見—力動精神医学発展史』弘文堂、1980年

<sup>68</sup> メスメリズムの精神医学史における位置づけはエレンベルガー『無意識の発見』上巻、61-217頁、社会史的な視点の分析は、ロバート・ダーントン『パリのメスマー—

メスメリズムは18世紀のオーストリア出身の医者メスメルの名前に由来する。彼の治療法は風変わりなもので、病人に手をかざしたり、触ったり、力強い視線でじっと見つめたりすると、個人差はあるものの、病人の多くは発作を起こし、激しく痙攣し、その後に眠り込んでしまい、それで本当に多くの患者が健康を回復したという。現代の医学で説明するなら心理的な暗示による治療法で、様々な宗教団体の心霊治療がある程度の治療効果を上げるのと同じ原理に基づいている。

メスメリズムが近代の催眠術や精神分析と異なっているのは、発案者のメスメルが催眠現象の原因を人間の内的心理にではなく、エーテルとして宇宙空間に充ちている生命エネルギーに求めた点にある。彼はこの生命エネルギーが磁石と似たような作用をすると考えた。離れた場所から自に見えない力を働かせる磁石は、古来より神秘的な存在と考えられてきた。メスメルは一種の生気論で、宇宙は生命力に充ち溢れており、人間と宇宙の間には磁石のような相互作用が働くと考えた。彼はこの生命エネルギーを動物磁気と名づけた。メスメルの手や眼差しを通じて生命力が患者の体内に流れ込み、病気を治療するという仕組みである。

メスメルは治療法は革命前のフランスで熱狂的に受け入れられ、宇宙調和協会というメスメリズムを信奉する団体が各地に作られた。ただしアカデミズムの学者たちは、こぞってメスメルに反対し、中傷や批判に耐えかねた彼はパリを去ってしまう。しかし彼の弟子や後継者たちは、動物磁気説を様々な方向に発展させていく。彼らはメスメル自身はあまり関心を持たなかった発作の後に来る催眠状態を研究した。例えば、催眠状態の患者は、暗示を与えることによって操ることができる。催眠状態になった患者が普段と違う人格を見せたり、幻覚を見たり、意味不明の言葉を語ったりすることも起こる。こうした現象はしばしば予言や千里眼、神の直接の啓示としてオカルト的に解釈された。

19世紀にはいると、メスメリズムはドイツのロマン派によって再評価される。ホフマン、クライスト、ノヴァーリスといった作家たちは、動物磁気をモチーフに取り入れた作品を書いている。ドイツ以外の作家でも、ポー、ホーソン、パルザックらの文学を理解する上でメスメリズムは重要な要素である。動物磁気という概念は19世紀半ばには否定され、メスメリズムはヒプノチズム (hypnotism) という言葉に取って代わられる。さらに催眠術の研究は後のフロイトの精神分析に大きな影響を与えることになる。

## 2-1-2. ロシアにおけるメスメリズムの受容<sup>69</sup>

---

大革命と動物磁気催眠術』平凡社、1987年、メスメリズムと西欧文学との関りについては、マリア・タタール『魔の眼に魅されて—メスメリズムと文学の研究』鈴木品訳、国書刊行会、1994年を参照した。

<sup>69</sup> ロシアにおける受容については以下の文献を参考にした。Громбах С.М. Пушкин и

部屋の四隅には、瀬戸物の牧童やら、名匠ルロワの手による置時計、小物入れ、ルーレット、扇などなど、前世紀の終わりにモンゴルフィエの熱気球やメスメル磁気といっしょに発明された貴婦人方の遊び道具がひしめいていた<sup>70</sup>

プーシキン『スペードの女王』の主人公ゲルマンが老伯爵夫人の寝室に忍び込んで眼にしたのは、18世紀には社交界の花と呼ばれた彼女の、記憶の残骸とでもいうべき装飾品の数々だった。この記述で分かる通り、18世紀末のエカチェリーナ女帝の時代、すでにメスメルの理論はペテルブルクの貴族達の間で知られていた。

動物磁気の理論がいつ、いかなる経路でロシアに伝わったのか全体像を明らかにすることは難しい。一方ではジャーナリズムや幾多の論文を通じて、他方では医師や怪しげな催眠術師などとの人的交流を通じて、西欧（メスメルがいたフランス）からロシアへ最新の情報が流れていたことは確かだ。デルジャーヴィンの風刺めかした頌詩『幸福に』（1789年）には、次のような一節がある。

キキーモラにも出る幕のない  
人類の啓蒙の時代、  
おまえも皆に奇跡を起こす程度、  
奥様お嬢様に磁気をかけたり、  
石から黄金を煮出したり<sup>71</sup>

この詩行へのデルジャーヴィンの自注によると、1780年代のペテルブルクでは動物磁気が流行し、コヴァリンスカヤという将軍夫人は磁気夢によって予言をしていたという<sup>72</sup>。80年代といえばパリでメスメルがまだ活躍中の頃で、この時のロシアにおけるメスメリズムの流行は同時代的なものといえる。後で紹介するグレチの小説『黒衣の女』もこの時代を舞台としている。フランス革命後にメスメルがパリを去ると、ロシアでも動物磁気説の人気は下り坂となる。フランスにおける調和協会のような組織が存在しなかったロシアでは、メスメリズムは流行のあぶくとしてすみやかに忘れられる運命にあった。『スペードの女王』の描写にはそういう背景があったのである。しかしメスメルがフランスで普及させた動物磁気説は、次の世代ではドイツ人によって高く評価され、彼らを通して再びロシアで受け入れられた。最初の流行がいささか表面的で消え去るのも早かったのに対し、19世紀10-40年代

---

медицина его времени. М., 1994.

<sup>70</sup> Пушкин А. С. Полн. собр. соч. М.;Л.: Изд-во АН СССР, 1937-1959. Т. 8-1, С.240. 以下のプーシキンからの引用は巻数とページ数を（）内で示す。

<sup>71</sup> Державин Г. Р. Стихотворения. Библиотека поэта. Л., 1957. С.125.

<sup>72</sup> Державин Стихотворения. С.385.



にかけての2度目のそれは、ドイツ・ロマン主義の受容という幅広い文脈と結びついており、ロシアの文化に深い跡を残した。メスメリズムのロシアにおける再評価に大きな役割を果たした人として、グレチとヴェルランスキーを紹介したい。

### 2-1-3. 理論としてのメスメリズム受容

ニコライ・グレチ（1787-1867）は、センコーフスキーやプルガーリンと合わせて「ペテルブルクの三悪人」と呼ばれ、文学史の上では否定的評価をされることが多いが、作家・ジャーナリストとして19世紀前半のロシア文壇を代表する人物の一人である。彼が編集した雑誌『祖国の子』は、1825年頃を境にデカプリスト寄りから体制擁護に論調を移したが、ロシアの言論界で常に大きな位置を占めていた。この雑誌は何度かメスメリズムに関わる記事を掲載している。例えば1816年にはメスメル生涯と思想を紹介する記事が載り<sup>73</sup>、動物磁気説は「ここ25年の間、耳にすることもほとんどなかった」が、「いま自然のこの驚異的な力を新たに実験・観察し直しているのは、かつて同じことをやったペテン師たちではなく、学識も経験もある医師たちなのだ」と前置きの形で出版者（恐らくはグレチ）の注釈が添えられている。

1825年の『祖国の子』第19-20号にはスイスの作家ハインリッヒ・チョッケの『千里眼の女』が連載された。あちこちに注釈を装った訳者の感想が挟み込まれた不思議な翻訳だが、動物磁気を扱った小説として紹介されており、千里眼、つまり磁気夢による予知の科学的妥当性よりも、動物磁気説が文学に与えてくれる面白さに注目するよう呼びかけられている。こうした『祖国の子』誌でのメスメリズム紹介の仕事が、後年の大作『黒衣の女』に結実することとなる。

ダニロ・ヴェルランスキー(1774-1847年)は自然哲学者で、シェリングの紹介者として知られている。ドイツのイェナに留学して哲学や生理学を学ぶうちに、メスメル学説の熱烈な信奉者となる。1808年からはペテルブルグの軍医学アカデミーで生理学・病理学の講義を担当した。内容はむしろ抽象的な自然哲学に偏りがちで、一般聴衆には人気が高かったが、学者たちからは批判されることが多かったという。1818年にヴェルランスキーはカール・アレクサンダー・クルーゲのメスメリズムに関する著作をドイツ語から翻訳し、自分の論文も加えて出版した<sup>74</sup>。この『歴史・実践・理論的テーマにおける動物磁気説』は恐らくロシア語で書かれたものとしては初めての動物磁気に関する概説書だった。

「愛智会」を中心とするロマン派の若者たちは、シェリングなどのドイツ自然哲学の研究

<sup>73</sup> О магнетизме // Сын отечества. 1816. Ч.28. №7. С.15-23.

<sup>74</sup> Клуге К. А. Животный магнетизм, представленный в историческом практическом и феоетическом содержании. Пер. Велланского Д. СПб., 1818. ドイツ語の原著の書誌情報は以下の通り。Carl A. F. Kluge, Versuch einer Darstellung des animalischen Magnetismus als Heilmittel (Berlin, 1811)

に努めたが、動物磁気説もそこに含まれていたと思われる。ヴラジーミル・オドーエブスキーやニコライ・メリグノーフが、自作の小説でこのテーマを扱っているし、ドミトリイ・ヴェネヴィーチノフはホフマンの『磁気催眠術師』を翻訳（1827年）している。

#### 2-1-4. 実践としてのメスメリズム受容

奇跡的な力を持つ動物磁気という考えが、ロシア社会で受容されていった過程を客観的に示すことは難しい。全体像を映し出すような一般的結論はなかなか導げないが、それでも当時の生活の中で動物磁気実践されていた事例をいくつか挙げて考察してみよう。

デカプリストの一人だったマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストル（1793-1886年）はメスメリズムに言及する文献を読み込むうちに神秘的な治療法にのめり込み、本物の病人で試したくなる。「最初の実験」では彼の小姓が犠牲になった。これは磁気催眠をかけた患者に必要な薬を自分でいわせるといふ他愛もないものだった。マトヴェイは実験に参加した弟のセルゲイ（デカプリストの指導者で1826年処刑）について「体格では私より頑健だけど、うまく小姓に磁気をかけられなかった」と得意そうに回想している。シベリアに流刑後も、民間の伝承医学の本（лечебник）を使って治療を行い、当地の長官にいらまれている<sup>75</sup>。迷信深い平民ではなく、教養ある貴族階級の若者が素人医学に夢中になっていたという事例は興味深い。しかも外来思想であるメスメリズムと土着の伝承医学が彼の中では何の疑問もなく連続している。19世紀前半の新しい世代の青年たちが何に関心を抱いていたのか、マトヴェイはその類型のひとつの代表かもしれない。

もちろん、真面目な善意の人ばかりが動物磁気に関わっていたわけではない。磁気による催眠は容易に通俗的な見せ物やイカサマの種になり変わる。ポーランド人ジャーナリストのオーシプ・プシェツワフスキ（1799-1879年）の回想を見よう。ペテルブルクの英国河岸通りの家にシヤボという男爵が住んでおり、エゲリヤという千里眼を持つ女を使って怪しげな異言を語らせていた。1830年から翌年にかけて首府でコレラが猛威を振るったとき、この男爵は高名な医者ニコライ・アレントに、疫病の正体を突き止めてみせようと請け合った。磁気催眠に入ったエゲリヤが質問に答えていうには、むかしインドの部族戦争で死んだ戦士たちが土になり、生えたキノコを食べた者が、最初にコレラという病気にかかったという。プシェツワフスキが皮肉まじりにいうように、これは「千一夜物語まがいの」おとぎ話ではない。しかし真に受けたアレントは、エゲリヤの幻視に従ってウサギの消化物をコレラ患者に処方した。凶悪な伝染病に襲われたペテルブルクでは死が日常となり、医者たちも為すべがなかった。こうしたパニックが磁気治療に過大な効果を期待させたとしても不思議ではない。プシェツワフスキによれば流言卑語が飛びかい、「ポーランド人が毒をばらまい

<sup>75</sup> Воспоминания Матвея Ивановича Муравьева-Апостола // Русская старина, 1886, №9, С.550-551.

ている」という噂さえ信じられたという<sup>76</sup>。

ペテルブルグのサロンを騒がせた最大の磁気催眠術師は、1830年代前半に活躍したトゥルチャニノヴァであろう。幼なじみのフィリップ・ヴィーゲリの手記によると、若い頃から俗世間を嫌った彼女は修道僧と好んで交流し、学問にばかりふけて哲学娘（философка）とあだ名されたという<sup>77</sup>。文学への憧れも強く創作にも手を出したが、詩人の才には恵まれなかったようである。長ずるにつれ磁気治療の能力を自覚したトゥルチャニノヴァは、不具者とりわけ障害児を治療するようになる。不思議な術を使う女性の噂はめずらしもの好きの社交界人の中でたちまち評判となり、多くの文学者の興味を引くことになった。

オカルトを論じたオドーエフスキーのエッセー『ロストプチナー伯爵夫人への手紙』（1839年）に登場する、器具体操と磁気療法で子供を治療する謎の女性のモデルは明らかにトゥルチャニノワである<sup>78</sup>。メリグノーフの小説『あいつは何者』（1831年）の末尾の読者と作者の架空の対話では、「視線の磁氣的な力を信じるかい。（…）信じないなら、治癒力をもつ視線で病気を治し、せむしを矯正するというペテルブルクの魔女のところへ行ってみるがよい」と語られている<sup>79</sup>。プーシキンも知人宅で「当時その視線の磁力で人々を驚かせていたトゥルチャニノヴァのことを長々と論じていた」という<sup>80</sup>。ペテルブルグの名士たちの間で名声を勝ち得たトゥルチャニノヴァだが、怪しげな治療に批判の声も上がっていた。前述のヴェルランスキーが『文学新聞』の1830年16号に彼女を擁護する論文を載せている<sup>81</sup>。

## 2-1-5. ロマン主義文学とメスメリズム (1) 幻覚と無意識

1830年代は後期ロマン派の時代で、怪奇幻想ものを中心に散文小説が数多く書かれ始める。こうした傾向の中で、メスメリズムも文学の主題として取り上げられるようになった。ここではロシア文学にメスメリズムが与えた影響を心理小説の成立と結びつけて論じる。最初に、人間の無意識を描く上でメスメリズムが果たした役割に注目したい。催眠術はしばしば術をかけられた者に幻覚をもたらす。その幻覚は予言・予知・千里眼として解釈されることが多かったが、その内容はやがて人間の無意識に近いものとなっていく。

グレチの長編『黒衣の女』（1834年）は今でこそ忘れられた作品だが、19世紀前半には

<sup>76</sup> Воспоминания О. А. Пржцлавского // Русская старина, 1874, №12, С.693-698.

<sup>77</sup> Вигель Ф. Ф. Записки. М., 1891-1893. Ч.1. С.113-115.

<sup>78</sup> Одоевский В. Ф. Письма к Графине Е. П. Р.й, о привидениях, суеверных страхах, обманах чувств, магии, каббалистике, алхимии и других таинственных науках. // Сочинения князя В. Ф. Одоевского. Ч.3. СПб., 1844. С.307-359.

<sup>79</sup> Мельгунов Н. А. Кто же он. // Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С.254-255.

<sup>80</sup> Цявловский М. А. Книга воспоминаний о Пушкине. М., 1931. С.295.

<sup>81</sup> Велланский Д. М. Замечание на статью литературного Французского журнала: Le Furet. // Литературная газета, Т.1, №16, 1830. С.126-128.

非常によく読まれた小説の一つである。舞台は18世紀末のペテルブルク、メスメリズムの最初の流行が廃れかけた頃にあたる。理想家肌で空想に耽りがちの主人公ケムスキー公爵と彼を導く不思議なオカルティスト、アリマーリの交流を軸に18世紀後半のロシア社会を幅広く書き込んだ大河風俗小説である一方で、夢と現実の間をさまようロマン派的気分の濃厚な幻想小説でもある。

ケムスキーは幼年期をモスクワで過ごす、ペスト流行の時期（1770-72年）に死体の積み重なる街路に身を投げる女性を見て強い衝撃を受ける。それ以来、この黒い服を着た女性の幻覚が彼につきまとうようになる。この幻覚は予知を含んでいて、未来の不幸を暗示したり、助言や忠告を与えたりする。物語の節目節目でこの幻覚が現れ、いわばプロットをつなぐ役割を果たしている。

現実と幻覚の境で迷うケムスキーを導くのが、メスメリズムに否定的なフランス科学アカデミー会員に決闘を申し込もうとするほどの動物磁気の信奉者アリマーリである。炉端を囲んだロマン派風の夜話の集まりで彼は語る。

思い出してください。まじない師とかコーヒー占いのような魔法使いというのはたいがい女性で、それも粗野で無教養な平民の女性ではないですか。〈...〉同意してくださるとは思いますが、女性の想像力というのは男性よりも生き生きと燃えさかっているものですね。そして教養や社会生活というものは、知識と経験で我々の知性を豊かにしてくれますが、それは我々が持つ自然の力を犠牲にしていることなのです。例えば我々ヨーロッパ人が未開のアメリカ人と同じように速く走れますか。その代わりに我々はバレエを踊るのです。デルジャーヴィンが靈感に充ちた詩を書いているその家の向かいで、汚い屋根裏で醜いフィン人やユダヤ人の女が人々の運命を占っています。これは二つのポエジー、人間の二つの本性なのです<sup>82</sup>。

神秘的な直感によって未来を見抜く力は、理想的な原初の世界ではすべての人間が備えていたが、文明が発達するにつれ失われてしまった。占いの力を持つのが女性、それもユダヤ人やフィン人であるのは、彼女たちがそれだけ文明の害毒を免れていて自然に近いからだという。理想化された原始社会のイメージがメスメリズムと結びついて論じられている。

この夜話の中では、フランス革命の血の結末を占ったカゾットや、スウェーデンのグスタフ3世の暗殺を巡る予言の逸話が次々と語られる<sup>83</sup>。この類いの予言への興味はロマン主義の時代に広く見られるもので、ノストラダムスの流行や、コーヒー占いの女がプーシキンの死を予言した話が思い起こされる。アリマーリは予言者の能力を動物磁気への感応力の問題として捉えている。

オドーエフスキーはメスメリズムを無意識の描写とはっきり関係づけている。未来小説

<sup>82</sup> Греч Н. И. Черная женщина. СПб., 1838. Т.1. С.83.

<sup>83</sup> この話はプロスペル・メリメの短編小説『カール 11 世の幻想』（1829年）の引き写しである。

『4338年。ペテルブルク書簡』（1835年）<sup>84</sup>には、琴星の接近に脅かされる人々が動物磁気的作用で催眠術にかかったとたん「琴星なぞ恐くはないふりをしてるけど、実をいうと、あれが近づいてくるのが無性に恐ろしい」<sup>85</sup>と心の底に隠している考えを打ち明ける場面がある。オドーエフスキーは1830年代の終わり頃から、メスメリズムにも関わりの深い神秘的傾向の小説をいくつか書いているが、その中から『コスモラマ』（1840年）を取り上げてみたい。

この小説でも動物磁気は幻覚を説明するものとして取り上げられている。主人公のヴラジーミルは、ケムスキー公爵と同じように幻覚に悩まされる。少年時代にプレゼントされたコスモラマ（中に絵のはいつている一種ののぞき眼鏡）を通して、ヴラジーミルは幻覚を見るようになる。しかしここで描写される幻覚は『黒衣の女』よりもずっと複雑な構造を持っている。『コスモラマ』の幻覚は現実世界ともうひとつの世界をつなぐ役割を果たしているのだ。

そいつを信じるな、（…）あるいはおまえの世界にいる私を信じるなど言った方がいいか。あそこでの私は自分が何をしているのか知らないが、ここでの私は、おまえ達の世界では思わぬ衝動 *невольное побуждение* という形をとる自分の行為を理解している<sup>86</sup>。

重なり合って存在するらしい二つの世界では同じはずのものが全く違う様相を見せる。「そいつ」と呼ばれているのは主人公の友人でお人好しな医者 of ベンだが、のぞき眼鏡を通した世界では主人公を導く神秘的な援助者になる。「おまえの世界にいる私」と「ここでの私」という二つの人格はベンという一人の人物のものでありながら、それぞれ別の世界に属するものとされる。二つの世界の間は「星の幕 *звездная пелена*」と呼ばれる壁で遮られていて、こちらから向こうを見ることはできない。第二のベンが言う「ここ」とはプラトンのなアイデア界とも人間の無意識の領域とも考えられる。別世界にいるもう一つの人格の声は、現実世界では、シンボル、隠れた衝動、あいまいな暗示といった形でのみ表され、普通は理解されないまま見過ごされてしまう。

不思議な魅力をたたえた少女ソフィアも第二の人格を隠している。彼女は無口で素朴な性格だが、自分でも説明のつかない考えが不意に口をついて出てしまうことがある。「時おり私の内側で何かがこうした言葉を語ります。私はそれに耳を傾け、口に出すのです。考えることはしません」（320）。ここでは第二の人格は別世界というよりは、人間の内面に隠れて存在するものとされている。

<sup>84</sup> 完全版は1926年に初めて刊行されている。 *Одоевский В. Ф. 4338-год. Петербургские письма. М.: Огонек, 1926.*

<sup>85</sup> *Одоевский В. Ф. 4338-год. Петербургские письма. // Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С. 382.*

<sup>86</sup> *Одоевский В. Ф. Косморам // Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С.312-313.* 以下の引用は（）内に頁数を記す。

自分では意識せずに口から出した言葉やふるまいが、眼に見えないところで繋がりがあって、思いがけない事件を引き起こすというのが、この小説の大きなモチーフの一つである。

「言葉に気をつけなさい。私たちの言葉はひとつとして失われることはありません」(320)とソフィアは言う。

自分では何の意図もなしにしたことも、内面に深く隠された悪意から生じたものかもしれない。ヴラジーミルは美しい伯爵夫人エリザと不義の恋に落ちる。夫の伯爵の危篤の知らせが二人の元に届いたとき、ヴラジーミルは「ぼんやりとした考え」を抱く。これが何であるかという説明はない。医者ベンが何げなく「死人は蘇らぬもの」とつぶやくと、ヴラジーミルは自分でもなぜか分からず、この医者に抱きついてしまう。邪魔者である伯爵の死を望む主人公の悪意が、意識されないかたちで表現されている。ヴラジーミルもエリザもソフィアもさまざまな衝動を内に秘めているが、神秘的な因果応報の巡り合わせによってその報いを受け、物語は悲劇的な結末を迎える。

オドーエフスキーは催眠術の不思議な現象に強い興味を持っていたが、メスメリズムは真実の一部を説明しているに過ぎないと考えていた。ヴラジーミルが見る幻覚はメスメリズムによるという説明も出てくるが、それよりも幻覚を通じて明らかになる複雑で神秘的な世界観の方に小説の重点が置かれている。それが最も良く表されている箇所を挙げておこう。

それぞれがここでは独自の生きた存在である衝動、人間の心に生じるあらゆる内面の衝動の重なりを描くことなどできようか。普通の眼では見えない存在によって引き起こされる隠れた事件を全て描くことなどできようか。く...) 私は知った。これら人間の行為がどれほど恐ろしい論理的な相互関係を有しているかを。ほんの些細な行為、言葉、考えが何世紀も経るに従って巨大な罪に育っていき、もともとの原因はその時代の人々には見失われてしまうことを。その罪が新しい枝葉を伸ばし、新しい罪の中心を生んでいくことを。人間の罪の暗い原動力の周りには、ひかり輝く姿が、清純で汚れのない魂の産物が広がっていた。それらも同じように互いに生きた輪の連なりを形作り、その存在によって闇の子らを滅ぼしていた(334)。

人間の隠れた衝動や自に見えない動機が重なり合って思いがけない事件を引き起こし、人類の歴史の隠れた動因となっているという考え方は、ジョン・ポーディジやサン・マルタンなどの神秘主義に基づいているとされる。これは単なる個人の深層心理を越えて東洋のカルマ思想を思わせるような人と人の見えない関係の連鎖を示しており、ある意味では20世紀のユングの集合的無意識につながるような発想といえよう。

オドーエフスキーがこの小説で関心を寄せたのは人間の内面の複雑さだったといってよい。ヴラジーミルは「人間は宇宙である」(335)ことを思い知る。後にプロイトが考えたような意味での無意識という概念はこの時代にはまだなかっただろうが、『コスモラマ』の世界は違ったやり方で人間の心理の奥深いところに謎の領域があることを示して見せた。無意識の描写は、文学の歴史においては夢や幻覚の描写に始まる。ロマン主義の時代にはそ

のようなモチーフが流行した。その全てをメスメリズムに結びつけるわけにはいかないが、多くの作家にとってメスメリズムは夢や幻覚の理論的な基礎になっていたといえる。それは一方で予言や千里眼といったオカルティズムへの興味をそそり、他方では人間の内面を描く手法を発達させた。自分では意識していない隠れた衝動や悪意というテーマは、レールモントブからドストエフスキーに続く心理小説の流れの中に位置づけることができるだろう。

#### 2-1-6. ロマン主義文学とメスメリズム (2) 人間関係の力学

催眠術をかける側とかけられる側の支配関係というモチーフは、メスメリズムを扱った作品によく見受けられる。メリグノーフの『あいつは何者』という作品はその典型といってよい。舞台はペテルブルクの社交界、ヒロインのグラフィーラは恋人に死なれて失意に沈んでいる。そこに現れた異国人のヴァシアダンの顔は死んだ恋人に生き写しだった。彼は持ち前の才気で人々に取り入り、家庭演劇で『智恵の悲しみ』を演じて喝采を浴びるが、不意に悪魔的な本性を露わにして、グラフィーラをさらって消えてしまう。

ヴァシアダンの姿には催眠術師のイメージが強く取り込まれている。特に印象的なのはその強烈な眼差しの描写である。普段はすみれ色の眼鏡をかけて視線を隠しているが、それがはずされたとたん衝撃に耐えかねたグラフィーラは卒倒してしまう。グラフィーラの母はヴァシアダンに民間伝承でいう邪眼(сглаз)の疑いをかけるが、語り手の「私」は動物磁気の影響力ではないかと考える。メスメルも視線を通じて離れたところから動物磁気を人に伝えることができると考えていた。

クライマックスではヴァシアダンの炎のような視線に貫かれて、人々はその場に釘付けになり、舌も手足も動かさなくなってしまう。この現象は催眠術によるものである一方で、眠っている人間を金縛りにするという家霊(домовой)のイメージも重ねられている。グラフィーラも視線の力に呪縛され、ヴァシアダンの言うがまま操られ、さらわれてしまう。

それから恐ろしい形相のヴァシアダンが(この時の彼は本当に恐ろしかった)病気のグラフィーラの横たわっている寝台に近づいた。その自が異常な光に輝き始めた。病人は体を起こしたが、黙ったままで、死んでいるようだった。それから寝台から降りて、床に立ち、よろめいた…、けれどヴァシアダンの新たな眼差しがまるで彼女を生气づけたかのように、彼女は踏みとどまり、姿勢を正して静かな足どりで導き手の方へ歩み寄った<sup>87</sup>。

邪悪な催眠術師とそれに操られる若い女性という組み合わせは、ロマン派の怪奇小説に典型的なモチーフの一つである。同じパターンはホフマンの小説『磁気催眠術師』にも見ら

<sup>87</sup>Мельгунов Кто же он.С. 247-248.

れるが、この作品は1827年にヴェネヴィーチノフによってロシア語に翻訳されている。愛智会のメンバーと親交がありドイツ・ロマン派に親しんでいたメリグノーフも当然知っているはずである。アントニイ・ポゴレリスキーも1830年の『文学新聞』創刊号から二回にわたって『磁気催眠術師Магнетизер』という小説を連載している。これは未完に終わったが、同様のモチーフが使われている。

一般に男性よりも女性の方が催眠術にかかりやすいという俗説がこの頃からあった。カザンに住んでいた詩人のフクス夫人がプーシキンと会ったときの回想によると、二人はメスメリズムについて議論している。プーシキンの考えでは、自分に背中を向けている他人に向かつて、こっちを振り返るようと念じ続けければ、その人は必ず無意識に後ろを振り返ってみるだろう、とくに女性はこうした動物磁気の影響を受けやすいという。愛してもいない男の命令に、自分でも分からないうちに従ってしまう女がときどきいるけれど、それはメスメリズムの力によるのだろうとさえ語られている<sup>88</sup>。グレチの『黒衣の女性』の神秘主義者アリマーリも「ただ意志の力によって、あなたを見ていない人を振り返らせることができる(…)。そのためには背後から何秒間かその人を凝視して、ただその人のことだけを考えなくてはならない」と似た考えを述べている<sup>89</sup>。ケムスキー公爵はアリマーリの教えを実践して劇場で恋するナターシャを振り返らせることに成功する。

男と女の関係はメリグノーフなどに比べて複雑になってはいるが、レールモントフの『現代の英雄』にも同じモチーフが見られる。小説の第2部で主人公のペチョーリンと公爵令嬢のメリーは互いに相手を屈服させようとして心理的な闘いを繰り広げる。この章ではメスメリズムの用語である「磁力的なмагнетический」という言葉が二回現れる。最初はペチョーリンがわざとメリーへの無関心を装っているときで、メリーの「磁力的な眼の力におれのシャンパンが打ち勝っている」<sup>90</sup>と書かれている。二回目はモノログの中で、ペチョーリンは自分がいつも女性に対する支配力を勝ち得てきたのはなぜだろうと自問し、「強い肉体の持つ磁気的な影響力」(78)のせいではないかと考える。おもしろいのはメリグノーフの場合のような一方的な支配関係とは違って、男も女も磁力的な力を持っていることで、ペチョーリンとメリーは相手を支配するために催眠術をかけ合っていると見ることもできる。

ドストエフスキーの諸作品でも動物磁気用語が直接使われる事例こそ少ないが支配するものとされるものの心理的な関係はよく見られるモチーフである。ドストエフスキーについては次節でくわしく分析するが、とりわけ『白痴』でロゴージンと、ムイシキン、それにナスターシャ・ブリッポヴナを加えた三者の複雑な人間関係の描写には、しばしばロマン主義文学の磁力的な眼差しや意識されない心理的葛藤といったモチーフが見受けられる。メリグノーフ、レールモントフ、ドストエフスキー、三人の作品を並べてみると、人間関係の力学の描写が次第に複雑でリアルなものになっているのが分かる。人々の間に働く磁気

<sup>88</sup> А. С. Пушкин в воспоминаниях современников. М., 1985. Т.2. С.257-258.

<sup>89</sup> Греч Черная женщина. Т.1. С.108.

<sup>90</sup> Лермонтов М. Ю. Собрание сочинений в 4 т. М., 1992. С. 75.



的な力というアイデアが、こうした心理小説が成り立つ上で大きな助けとなったとも考えられるだろう。

#### 2-1-7. センコーフスキーのメスメリズム批判

最後にメスメリズムに批判的な潮流も紹介しておこう。ロマン派の一部にはインスピレーションによる詩的創作のプロセスをメスメリズムによって説明しようとする者もいた。プーシキンの『エヴゲーニー・オネーギン』では、もともと「ヤンプとホレイの区別もできない」ほどのオネーギンが「磁気力であやうくロシア詩のメカニズムを会得しそうになった」（8章38連）とあるが、これはそうした一派へのプーシキン流の皮肉であろう。

『読書文庫』誌を編集していたオシプ・センコーフスキーは、『黒衣の女と動物磁気』（1834年）という論文で、先にも挙げたグレチの小説を批判している。もっとも、ここで問題になっているのは、作品の価値というよりも動物磁気説の是非である。センコーフスキーはドイツ・ロマン派の論客の一人だったゴットフリート・ハインリヒ・シューベルトの著作『夢の象徴学』（1814年）を引用して、動物磁気を次のように説明している。心臓の裏側には太陽神経節と呼ばれる器官があって、宇宙空間に充ちている動物磁気を感じとる力を持ち、脳とは別個の精神活動を行っている。何かの理由で脳の働きが弱まると、太陽神経節がつかさどる直感、千里眼、予知などの能力が表面化するのだ。これはドイツの自然哲学者の間で広く信じられていた説だが、センコーフスキーはもし神経節が脳よりも高度な知性を持つなら、いっそのこと脳など無い方がよいのではないかと逆説的な結論を提示する<sup>91</sup>。

センコーフスキーはそれでもまだ言い足りなかったようだ。『頭が本になり本が頭になる』（1839年）はロシアの言論界を右から左まで見境なく噛みついた風刺小説で、メスメリズムの話題も取り上げられている。自分のコックにまずい料理を出されたアフリカのスルタンが、怒りあまって全国民の首をはねてしまう。そこに偉大な魔術師ジロラモ・ブランチェスコ・ボナベントウラ・ピオネッティが登場する（この名前からして、同時代の小説に出てくる催眠術師が外国人、特にイタリア人であることが多いことを当てこすっている）

我が国で近年証明されたところでは、頭というのは全く必要のないものでして、腹さえあれば聴くことも見ることも嗅ぐこともできるのでございます。そればかりか腹というものは、壁の向こうの人間を見分けたり、ポケットに入った手紙を読んだり、1000マイル先で起こっていることを記録したりできますし、未来を正確に予言することもできるのであります。それに比べて頭はどんな良い気圧計を使って天気の変化を予報しようとしても、満足いくようにできたためしがないのです<sup>92</sup>。

<sup>91</sup> *Сенковский О. И. Черная женщина и животный магнетизм. // Собрание сочинений Сенковского. СПб., 1859. Т.8. С.83-108.*

<sup>92</sup> *Сенковский О. И. Превращение голов в книги и книг в головы // Русская романтическая повесть. М., 1992. С.199.*

首なし人間の国が動物磁気のユートピアとして誉め称えられている。理性に対する直感の復権というロマン派の決まり文句が、頭と腹の対立に置き換えられ、グロテスクな雰囲気をかもし出している。相手に賛成すると見せかけて、その理論を極端なまでに延長して奇怪な結論を導くという皮肉な背理法は、センコーフスキーの得意とするところだ。彼のこうした批評活動は、しばしばオカルトに傾きがちだった催眠術の理解を相対化する働きがあった。

メスメリズムは19世紀の欧米文化に広く跡を残しているため、ロシアのケースだけを取り上げてその特徴を述べるのは難しい。一般的にいえるのは次のようなことだろう。18世紀の機械的で単純な人間観は、ロマン主義の時代に、広大な精神世界を内に含んだ複雑な有機体というイメージに取って代わられた。メスメリズムはこの新しい人間像を作り上げるのに大きな役割を果たした。当然ながら文学にもそれは反映している。

ロシアにおいても、動物磁気が明らかにした人間存在の不思議さは、文学者たちの創作心を刺激した。メスメリズム自体はリアリズム文学の時代に廃れていったが、人間のタイプや心理の描写に多くの手段や材料を提供した。次の節ではドストエフスキーの作品においてロマン主義の遺産であるメスメリズムがどのような役割を果たしているかを分析しよう。

## 2-2. ドストエフスキーの心理描写とメスメリズム

### 2-2-1. ドストエフスキーとロマン主義

ドストエフスキーは第 1 節で取り上げたロマン主義期の幻想的な作品の多くを知っており、以下でくわしく分析するように眼差しの放つ磁気的な力や催眠下で関われる無意識の内面世界というモチーフを受け継いでいる。例えばドストエフスキーはデビュー作の『貧しき人々』のエピグラフでオドーエフスキーの小説『生ける死者』の一節を引用しており、二人の影響関係はしばしば指摘されている<sup>93</sup>。ドストエフスキーの初期作品の中で最もロマン主義風の幻想性の濃い『主婦』のオールドウイノフは、現実と幻想の境を行き来する様子が『コスモラマ』の主人公ヴラジーミルを彷彿させる。また『白痴』の創作ノートには「ケムスキー」と書かれたページがあり(9, 466)、ムイシキンの人物像を構想する際にグレチの『黒衣の女』の夢想的な主人公を参考にしたことがうかがわれる。

ロシア以外でも、ディケンズ、パルザック、ホフマン、ポーなど、ドストエフスキーに影響を与えた作家達は、いずれもメスメリズムに深い関心を抱いていたことが知られている。特にパルザックは自分が磁気催眠力を持っていると信じていたほどで、彼の小説の登場人物はしばしば磁力を帯びた眼差しを持つ<sup>94</sup>。若いドストエフスキーが翻訳(1844年)した『ウジェニー・グランデ』でも「磁力 магнетизм」の語が使われている。

若い娘の優しい心遣いの中には共感の磁力とでも言うべきものがある。シャルルは嫌でも気づかざるをえなかったし、従姉妹の愛情ある可愛げな気配りには抵抗できず、言葉にならぬ優しい感情に輝いた視線を彼女に投げかけるのであった。そんなとき彼は彼女の顔の魅力と調和の全てに、ふるまいの無邪気さに、そして若々しい恋心と知られざる願望がきらめいている磁力を帯びた眼差しの光に気づくのだった<sup>95</sup>。

序章で述べたように流刑前のドストエフスキーにはすでに精神の病、おそらくは癲癇の兆候があり、彼自身はこれを卒中とみなして、ヒポコンデリーになるほど恐れていた。1846年のひどい発作の後で彼はコーヒーや肉は健康に良くないから食べないようにと繰り返し書簡に書いている。当時彼を治療していたヤノフスキーの回想によると、自分の病気への関心からドストエフスキーが当時の医学書をよく読んでいたことが分かる。

文学作品のほかに、ドストエフスキーは私のところからよく医学書を持っていったが、それは主として頭

<sup>93</sup> Назиров Р. Г. Владимир Одоевский и Достоевский // Русская литература. 1974. № 3. С. 203-206.

<sup>94</sup> マリア・タートル『魔の眼に魅されて：メスメリズムと文学の研究』国書刊行会、1994年、第5章を参照。

<sup>95</sup> Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений. Канонические тексты. Петрозаводск, 1995. Т.1. С.474.

脳や神経系統の病気だとか、精神病だとか、古くなったとはいえ当時はまだ通用していたガル式の頭蓋骨の発達に関する解説書だった<sup>96</sup>。

ドイツ・ロマン派の医学者の間では夢や無意識に関する論考が多く現れたが、ドストエフスキーとの関連で名前がよく挙げられるのは医師・自然哲学者のカール・グスタフ・カルスである。彼の著作はロシアでは先に取り上げたオドーフスキーが早くから注目していた。流刑地セミパラチンスクでドストエフスキーと友人のヴランゲリはカルスの代表作『プシケ』(1846年)をロシア語に翻訳する計画を立てている<sup>97</sup>。カルスは人と人の間に磁力による影響関係が存在すると考えた。ジョージ・ギビアンによればドストエフスキーの作品の登場人物の間には、しばしば同様の磁力が働いている。

特に密接な「磁力的な」関係が存在するのは、分身や「もう一人の自己 alter ego」による様々なペア、ラスコニコフとスヴィドリガイロフ、ムイシキンとロゴジンなど、その親和カを通じて特別に容易なコミュニケーションを持つ者同士の間である。ムイシキンやアリョーシャ(そして全ての子供と多くの女性)は、その生活の大部分を無意識に依存しているせいで、あらゆる類の予兆や磁力に対して非常に敏感な人々である<sup>98</sup>。

磁気催眠にかかりやすいタイプとしてムイシキンとアリョーシャ・カラマーゾフが挙げられているが、そこには『主婦』のオールドウイノフや『虐げられた人々』のアリョーシャ・ワルコフスキーも付け加えることができるだろう。

## 2-2-2. 『主婦』における眼差しの闘争

ドストエフスキーの初期作品の中でも『主婦』(1847年)はロマン主義的な怪奇幻想小説の色合いが特に濃い作品である。主要なプロットは3人の登場人物、オールドウイノフ、カチエリーナ、ムーリンの間の心理的な闘争である。その複雑な人間関係の描写で重要な役割を果たしているのが眼のイメージである。視覚に関わる言葉「眼 глаза, очи」「眼差し взгляд」「見る смотреть, глядеть」の使用頻度も高い<sup>99</sup>。『主婦』では「磁力」の語は使用されていないが、眼のイメージが果たす機能はメスメリズムにおける「磁力を持った眼差」と似てい

<sup>96</sup> Яновский С. Д. Воспоминания о Достоевском // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. С.239.

<sup>97</sup> Врангель А. Е. Из «Воспоминаний о Ф. М. Достоевском в Сибири» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.352.

<sup>98</sup> George Gibian, “G. C. Carus’ ‘Psyche’ and Dostoevsky,” *The American Slavonic and East European Review* 15 (1995), p.382.

<sup>99</sup> これらの単語の用例はペトロザヴォツク大学のヴラジーミル・ザハロフ教授のグループがインターネット上に公開した Конкордансы всех произведений Ф. М. Достоевского (<http://www.karelia.ru/~Dostoevsky/dostcon>)を利用して集めた。

る。カチェリーナはムーリンに支配されているが、この心理的従属は催眠的なものと考えられる。オールドウイノフは彼女に一自惚れし、邪悪な主人から彼女を解放しようと試みる。眼の描写が特に目立つのはムーリンの場合である。オールドウイノフが教会で初めてムーリンとカチェリーナに出会う場面を見よう。

老人は背が高く、しゃんとしており、頑丈そうだったが、痩せて病的に青ざめていた。一見したところ、どこか遠方から来た商人のようだった。毛皮の裏地がついた丈の長い黒くて見るからに晴着のカフタンを羽織っている。カフタンの内側には、上から下まできっちりとボタンを留めた裾長の何やら別種のロシア服が見えていた。むき出しの首には赤色が鮮やかなハンカチを無造作に巻いていた。手には毛皮の帽子を持っている。長くて細い、白くなりかけたあご髭が胸に届いていた。しかめた垂れ眉の下で、炎のような（огневой）、熱で充血した（лихорадочно воспаленный）、傲慢で（надменный）、執拗な（долгий）眼差しが光っていた(1, 267-268)。

老人の商人風のいでたちが詳細に描かれてはいるが、この外見描写で強い印象を残すのは四つもの形容詞を重ねられる「眼差し」であろう。この先もムーリンの表情や身ぶりは、眼の動きに言及しながら描写されることが多い。同じ場面にはカチェリーナも登場するが、プラトークをかぶり「限を伏せて」いるため、彼女と対照的なムーリンの眼のイメージが一層強まっている。老人の眼や視線には「胆汁質 желчный」の「あざけるような насмешливый」「悪意のある злобный」「さげすむような презрительный」などの邪悪な性質を示す形容詞、「光る сверкать」「燃える гореть」のような何らかの力を放つ意味の動詞がしばしば組み合わせられる。

ムーリンの限の支配力は物理的な形で現れることがある。教会からの帰り道にオールドウイノフは二人の後をつけるが、不意に老人が振り返り、苛立たし気にオールドウイノフを見た。若者は地面に打ちつけられたかのように（вкопанный）立ち止まった」（1, 268）。オールドウイノフと二人きりでいるところを見つけたカチェリーナも、ムーリンの視線の前で「魅入られたかのように очарованная」身動きできなくなる（1, 301）。これらの例はメリグノーフの小説で邪悪な催眠術師ヴァシアダンが炎のような視線によって引き起こす「金縛り」の場面によく似ている。

オノレドウイノフの友人ヤロスラフ・イリッチや門番のタタール人の話によれば、ムーリンには未来を予言する力があるらしい。占いの際にも眼が重要な役割を果たす。ムーリンは訪れてきた客に対して、「役に立とうという気になったら、顔を見つめる（вглядываться）のが常だった」（1, 287）という。占い師を訪問した有名人が死を予言され、それが実現するという、この手の話に典型的なモチーフも瘦われている。メスメリズムが予知・予言や千里眼、降霊術などのオカルトとしばしば結びつくことを考えると、この挿話は興味深い。

ムーリンの人物像に催眠術師のイメージが隠されているのに対し、カチェリーナとオールドウイノフの人物像は催眠術にかけられるタイプ（被術者、患者）の特徴を多く備えている。

それは感受性の強さと意識の不安定である。

第一に、オールドウイノフの感受性の強さは、次のような心理描写によく現れている。「この極端な感受性 *впечатлительность*、感覚の無防備 *незащищенность* と露出 *обнаженность* は孤独によって度を増したのだろうか」(1, 270)。暗示にかかりやすい彼の性格は、久しぶりの外出でつまらない街の光景が不意に「何やら静かで喜ばしげな明るい感触」(1, 264) に変わったという冒頭の一節ですでに描かれている。オールドウイノフの感受性の強さは長期の孤独の後で、カチェリーナと出会ったことで激しく呼び覚まされる。そもそも恋愛と催眠は心理的に類似した現象だが、ここでの見知らぬ女への一自惚れは催眠術にかかる過程そのものである。それは第1部の終わりで頂点に達する。「興奮しやすさ *раздражимость*」も擢綏捕にかかりやすい性格の特徴である。

彼は自分が興奮し *раздражен* 度を失っているのを感じた。空想力と感受性が極端なまでに張りつめたのが分かるので、自分を信用しないことに決めた。次第に彼は一種の麻痺状態 *оцепенение* に落ち込んでいった (1, 288)

第二に、不安定な意識の状態であるが、オールドウイノフはしばしば無自覚に夢うつつの状態で行動する。例えばカチェリーナ達との出会いの後、「彼は長いことあちこちの通りや人が多かたり少なかりする色々な横町を無意識にさまよった (1, 270)。『白夜』の夢想家やラスコーニコフのように、オールドウイノフもペテルブルクの街をあてもなく歩くのを好む。彼の突飛な行為やちぐはぐな台詞には「無意識に *бессознательно*」「夢遊病者のように *как лунатик*」「自分の言葉も分からずに *не зная слов своих*」「自分の動機を理解せずに *не понимая своего побуждения*」といった眼定が加えられることが多い。

登場人物の意識されない衝動は、悪魔の形象 (*демон, бес, нечистый, окаянный*) によっても表現される。オールドウイノフは、まるで「悪魔が耳にささやいたかのように」(1, 310) ムーリンへの殺意を抱く。次の節でムーリンは彼のふるまいを「悪魔がそそのかしたのだ」(1, 314-315) と繰り返して説明している。カチェリーナも「悪魔にそそのかされ」たせいで (1, 296)、意志に反して母親を傷つける言葉を吐いてしまう。

度重なるオールドウイノフの失神・昏睡も彼の意識の不安定さを示している。彼は眠つては悪夢を見、起きては幻覚に襲われ、完全な睡眠も完全な覚醒も与えられない。ビョームは『主婦』のプロットの半分はオールドウイノフの見た幻覚であって現実ではないとさえ断定している<sup>100</sup>。「失神する *впасть в беспамятство*」「麻痺状態に陥る *впасть в оцепенение*」「気を失う *лишиться чувств*」といった言葉は、意識の深層、より幻想的・催眠的な世界への下降を示し、「目を覚ます *проснуться*」「正気づく *очнуться*」「我に返る *опомниться*」等は意識の表層、より現実的・覚醒的世界への上昇を示す。小説全体がオールドウイノフの魂が彷徨う意識

<sup>100</sup> *Бем А. Л. Достоевский: психоаналитические этюды. Берлин, 1938. С.83-99; Бем А. Л. Драматизация бреда («Хозяйка» Достоевского) // О Достоевском. Т.1. Прага, 1929. С.81-93.*

の迷宮のような様相を呈している。

以上、ムーリンとオルドゥイノフを催眠術における対照的なタイプとして分析してきたが、実探には彼らの支配従属関係は一方的なものではなく、しばしば逆転する。カチェリーナも含めて3人は心理的関争の中にいるのであり、互いに催眠術をかけ合っているように見える。第2章2節にその最も緊迫した例を見ることができる。

ムーリンは癲癇の発作で衰弱し、視線の魔力を失っている。一方でオルドゥイノフが増悪の視線を老人に向ける。ムーリンを憎むと同時に愛してもいるカチェリーナは、老人を守るために彼の視線を遮ってしまう。

「見ないで！」彼の背後で声が響いた。オルドゥイノフは振り返って見た。

「見ないでったら、見ないでって言うてるでしょう。悪魔がそそのかしたんなら、愛しい女を憐れんぢようだい」。笑いながらそう言うと、カチェリーナは不意に背後から手で彼の眼をおおった(1, 305)。

乾杯によるしばしの休戦の後で、視線による闘いが再開される。今度もムーリンは意識を失っているが、眼差しの呪力はカチェリーナに乗り移り、先ほどとは違ってオルドゥイノフにムーリン殺害をそそのかす。

痛みの感覚が彼女の顔を駆け抜けた。彼女は再び頭を上げると、嘲りを浮かべ、厚かましく、さげすむようにオルドゥイノフを見るので、彼は立っているのがやっとなった。それから彼女は眠っている老人を指し示し、まるで老人の嘲笑が彼女の眼に乗り移ったかのように、裂くような凍るような眼差しで再びオルドゥイノフを見やった。

「何だ。殺されるとでもいうのか」。狂乱のあまり我を忘れてオルドゥイノフは口走った。

まるで悪魔が耳にささやいたかのように、自分は彼女の心を察したのだと…。カチェリーナの確固たる思念に向かってオルドゥイノフの心臓が笑い声を上げた…。

「美しい女よ、おまえを商人から買い戻してやろう、俺の魂が必要だというならな。

まさかこの男に殺せるもんか…」

オルドゥイノフの全生命を破滅させた動かぬ笑いは、カチェリーナの顔から消えなかった。無限の嘲笑が彼の心臓をばらばらに引き裂いた。われ知らず、ほとんど自覚もなしに、片手が壁に触れて、彼は老人の高価な古い刀を釘からはずした。カチェリーナの顔に驚きの表情が浮かんだ。同時に、憎悪と侮蔑の色が、始めて異常な力を得て彼女の目に浮かんだようだった。オルドゥイノフは彼女を見るうちに気分が悪くなってきた…。誰かが混乱した彼の手を取って、狂気の沙汰へと駆り立てるような気がした(1, 310)。

このシーンは小説中で催眠術のイメージが最も色濃く出ている個所だが、そのせいか幻想的で謎めいた雰囲気も強い。これに続く第2章3節での、ヤロスラフ・イリッチという素朴な人物を交えた談話は、事件に対するある種の謎解きになっている。ここでオルドゥイノフは「ひどくびっくりした眼でヤロスラフ・イリッチを頭から足の先まで眺めまわし」たので

(1, 315)、頭がおかしくなったのかと疑われる。これは前の節における視線による闘争のパロディであろう。この滑稽さとアイロニーによって、小説の中の幻想性と現実性のバランスが回復されている。

### 2-2-3. 『白痴』 その他の作品における催眠術モチーフ

『主婦』では「磁力 магнетизм」という語は一度も用いられていないが、作品によっては、視線のイメージが動物磁気説と直接に結びついている場合もある。例えば『分身』(1846年)のゴリャートキンが役所の「上司から向けられる視線の磁力 магнетизм начальнических взоров」(1, 113)に動揺して口も利けなくなってしまう。『ポルズンコフ』(1848年)の自意識過剰気味の主人公は「彼に向けられるどんな視線の磁力にも反応して、観察されているのを本能的に察しては即座に観察者のほうを振り向き、不安げにその視線の意味を分析する」(2, 5)。地者の視線を感じて接り返るというモチーフはグレチの『黒衣の女』と重なるが、ここではロマンチックな、あるいはオカルト的な要素が欠如している。『分身』と『ポルズンコフ』の例では、人々の俗っぽい好奇の眼差しや他者の視線を異常に気にする人間の心理を描く際に、「マグネチズム」という語の使用が滑稽で風刺的な色彩を帯びていることが目を引く。

ドストエフスキーの作品ではロマン主義的文体とリアリズム的文体の混交がしばしば見受けられるが、『虐げられた人々』では冒頭の章が特にホフマン風の幻想小説のパロディになっている。「ぜんまい仕掛けのような」(3, 170)奇妙な歩き方をする老人と、メフィストフェレスのように「何か神秘的な目に見えない絆で主人の運命と結ばれた」(3, 171)犬が登場する。彼らはまるで「ガヴァルニの挿絵の入ったホフマンの小説の1ページから抜け出たかのよう」で「本の出版を宣伝する生きたチラシとなって世間を放浪している」(3, 171)のではないかとさえ語り手は想像する。物語の山場となる喫茶店がまたベテルブルクのドイツ人のたまり場であることも示唆的である。この店で老人と客の間に磁力を帯びた視線の応酬が行われる。「両者ともに、ドイツ人もその相手も、自分の視線の磁力で互いを打ち負かすことを欲し、どちらかが先に気詰まりになって眼を伏せるのを待ち受けているようだった」(3, 173)。勝負は無表情な老人の勝ちに終わるが、犬の死がきっかけとなって老人も正体を明かさぬまま息絶えてしまう。

第2部1章で主人公の一人アリョーシャが話の中で動物磁気に触れる場面がある。

僕には何らかのマグネチズムが備わってるのかな、それとも僕がどんな動物でも大好きだからってだけのことかな、分からないけど、犬には好かれるんだよ、どうでもいいことだけどさ。マグネチズムといえば、君にはまだ言ってなかったかな。ナターシャ、このあいだ僕たちは霊を呼び出したよ。ある霊媒の家に行ったんだ。これが面白くてさ、イヴァン・ペトローヴィチ、びっくりしたよ。僕はカエサルを呼び出したんだぜ (3, 239)。



しかし彼の磁力は人ではなく犬を引きつけるものであり、降霊術への言及に至つてはナターシャによって一笑に付されてしまう。意志が弱く、一貫した話ができないアリョーシャの軽薄な性格がうまく描かれている。催眠術と降霊術は歴史的に近い関係にあるが、暗示にかかりやすいタイプと霊に取りつかれやすいタイプも一致する。

『白痴』のムイシキン、ナスターシャ、ロゴージンの不吉な三角関係は、『主婦』の場合とよく似ている。特にロゴージンはムーリンと同様に燃えるような目を持ち、商人という身分を含めて共通点が多い。小説冒頭の列車内の会話のシーンで彼の外見が描写されている。「2人のうちの一方は背が低く、年齢は27ほどで、髪は黒色に近い巻き毛で、眼は灰色で小さかったが、炎のように燃えていた」(8, 5)

第2部2章の冒頭で久しぶりにペテルブルグに帰ってきたムイシキンは何者かの視線を背後に感じて振り返る。その視線がロゴージンのものであることをムイシキンは直感して恐怖するが、まるで呪縛されたように逃げることができない。第5章では逆にもう一度あの目を見たいという欲望に駆られ、ずるずるとロゴージンの待ち伏せする場所へと引き寄せられていく。アグラヤーのいるパヴロフスクの別荘地に移動する予定だったのに、今日は会わないとロゴージンに約束までしたナスターシャのいる隠れ家に足が向いてしまうのだが、ここでは語り手がムイシキンの意識に寄りそのような描写をしているため、読者はあたかも夢遊病者の眼を通して場面の移り変わりを追うような不明瞭な感覚を抱くことになる。ムイシキンの意識には突発的な衝動、漠然とした予感、恐怖などがたえず浮かび上がっては消えていく。それらは「新たな衝動 *новый порыв*」「それまで全く無意識だった動作 *до сих пор совершенно бессознательное движение*」「不意の思いつき *внезапная идея*」などの言葉で示されるが、具体的に何を指しているのかは必ずしも明確にはならない。「出まかせの方向へ機械的に歩き出した *направился машинально куда глаза глядят*」「ほとんど自分の向かう道を分からずに歩いた *шел, почти не замечая своей дороги*」といった特徴的な表現で示されるように、何者かの催眠にかかったようにムイシキンは街を彷徨する。燃えるようなロゴージンの眼差し、店先で売られていたナイフ、昨今の殺人事件をめぐる噂話、癲癇発作の予感など脈絡なく移り変わる連想がひとつに収れんするかのようになり、最後に行きついたホテルで事件が起きる。ムイシキンは凶器を手にしたロゴージンに襲われ、さらに癲癇の発作に倒れることになる。

これらの場面を通じてムイシキンが癲癇発作の予兆(アウラ)を感じ続けていることも重要である<sup>101</sup>。有名なエクスタシー発作に関するムイシキンの考察も同じ第2部5章の中に含まれている。ペテルブルグの夏の宮殿で一休みしながら過去に起きた癲癇発作の体験を思い出すムイシキンの意識は「瞑想のような状態 *в созерцательном состоянии*」と説明されている。これは発作に伴う意識の変容を示すのにドストエフスキーがしばしば用いた表現

---

<sup>101</sup> Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*. pp.252-259.

である。これは催眠（メスメリズムでいうならば磁力）にかけられた状態に近い。意識がもうろうとした状態では様々な暗示や脈絡のない連想に影響を受けやすく、どうしてもナスターシャを見たいという欲望やロゴージンに殺されることを望むようなマゾヒスティックな友愛といったムイシキンの隠された情動が意識の表面に浮かび上がってくる。『主婦』のムーリンも癲癇発作を起こして意識が弱まったところで、オールドウイノフやカチェリーナの視線の呪力によって反撃されたことが思い起こされる。

面白いことに、ムイシキンの無意識の衝動を表すものとして、ここでも悪魔（демон）が登場する。「奇妙でぞっとするような悪魔が遂に彼にとり憑いてしまい、それ以降はもう離れようとしなかった。この悪魔が彼にささやいたのだ」（8, 193）。『主婦』の場合は悪魔のイメージといっても、日本語でいう「魔が差した」のような慣用表現に近いが『白痴』の悪魔はもっと自由に、登場人物の一人であるようにふるまっている。人間の潜在意識と悪魔のメタファーの系譜は、さらに『カラマーゾフの兄弟』におけるイヴァンの悪魔にまでたどることができるだろう。悪魔憑きと癲癇の関係については第3章でくわしく検討する。

### 2-3. メスメリズムの受容とドストエフスキー

メスメリズムは18世紀末から19世紀初頭にかけて西欧からロシアに移入された外来の文化である。それはとりわけロマン主義の自然哲学の文脈で人間の精神と身体に新しい理解をもたらすものと考えられ、多くの知識人が動物磁気の実験に熱中した。文学作品においては幻想小説・怪奇小説の重要な小道具として用いられた。しかしその流行は1830年代が頂点であり、ロマン主義の衰退とともにメスメリズムは次第に時代遅れになっていった。国内外のロマン派の文学作品や同時代の医学文献をよく読んでいたドストエフスキーは当然ながらメスメリズムについて知っていたはずだが、自身の作品ではそのモチーフをきわめて慎重に扱っている。『主婦』や『白痴』等での登場人物同士の緊迫したやりとりでは、呪縛する視線という文学的伝統を踏襲しつつ、「磁力」という音葉を巧みに避けている。一方、メスメリズムの術語が実際に使われる場面は必ず滑稽な雰囲気を持ち、ロマン主義文学のパロディを狙っていると考えられる。オドーエフスキーなどがメスメリズムによって説明した人間の意識されない隠された情動というモチーフは、ドストエフスキーによって人間の不合理な心の動きにメスを入れる心理小説として発達していった。その際には作家の持病である癲癇発作への自己観察もまたひとつの役割を担っていたと考えられる。

ドストエフスキーが人間の催眠的な現象に関心を抱いたのは、それが実証主義的・唯物論的な視点では見落とされがちな人関心理の深層に触れる重要な手段であったからだともいえる。もちろんメスメリズム自体は西欧で発明されたものだが、ロマン主義の文脈で読み解くならばそれは西欧近代の合理主義を批判する意味を持っていた。ロマン主義はフランスやイギリスに比べて後進地域であったドイツで誕生し、ロシアや東欧の多くの諸民族の文化にとってロマン主義運動はそのまま国民文化の創設と関わる重要な契機であった。その

意味で『白痴』のムイシキンが催眠下にあるような半ば無意識の状態、しばしばロシアの民族性について語っているのは興味深い。アグラヤとの婚約発表の席でのムイシキンのスラヴ派的な熱弁とそのあとの癲癇発作の場面は有名だが、上述した第2部5章でロゴージンの眼差しに誘われるように街を彷徨する主人公の脈絡のない連想の中にも不意に「ロシア人の心は謎 *русская душа потемки*」という話題が浮かぶ。スイスからやってきたばかりでロシアにとっては外部の観察者であるムイシキンは、それがゆえにロシア人に深い興味と共感を抱く。しかしロゴージンのように率直な愛情と殺人者の憎悪を併せ持つロシア人の性格の矛盾と不合理に気がつかざるをえない。ここでは人間心理の不可解さや分裂がロシアの特殊性という考えに結びついている。この問題には終章でまた立ち戻ることになるが、翻訳されたドストエフスキーの小説が描く人間像がきわめて「ロシア的」なものとして世紀末の西欧文学に衝撃を与えることになるのはその点で非常に示唆的である。

### 第3章：悪魔憑きとムハンマド

本章の目的は、癲癇の歴史的形態のひとつであった悪魔憑き現象と、癲癇者とされたイスラム教の開祖ムハンマドの表象の歴史を検討し、さらにドストエフスキーの諸作品中でのそれらの扱いを分析することにより、ロシア文化史における癲癇の位置付けの変遷を明らかにすることである。

癲癇について我々が考える現代的なイメージや医学的な定義が昔からあったわけではない。悪魔憑きのように発作の原因が超自然的な力に帰されている場合もあった。「癲癇 эпилепсия, epilepsy」は一般には「倒れ病 падучая болезнь, falling sickness」と呼ばれることが多かったが、ヒステリー、卒中、薬物中毒など、痙攣発作と精神変容を伴う病気はすべてそこに含まれる可能性があった<sup>102</sup>。ロシア語には「黒い病 черная немочь」という表現もあったが、これも常に癲癇だけを意味したわけではなく、広く精神疾患を表したようである。例えばポゴージンの小説『黒い病』(1829)の主人公の病気は、癲癇というよりはメランコリーを思わせる<sup>103</sup>。

序論で述べたことの繰り返しになるが、心因的なヒステリーと器質的な癲癇とを見分けることは難しく、19世紀の後半には両者の区別の問題が盛んに議論された。ヒステリーにはまた、仮病と見分けがたいという問題があった。本論で取り上げる悪魔憑きの多くは今日から見ればヒステリーの発作とも考えうるものである。本論で考察の対象とする癲癇とは、ヒステリーや悪魔憑きを含む歴史的な意味での「倒れ病」であり、今日の医学が定義する病気のカテゴリーとは必ずしも一致しない。

#### 3-1. 悪魔憑きと癲癇

##### 3-1-1. フォークロア・超自然的解釈

癲癇の発作を超自然的な力が身体に影響を及ぼしたものとする考え方は古代ギリシアにすでに見ることができる。福音書の中にイエスが悪魔憑きを癒す場面があることもあって、キリスト教世界では癲癇の原因を悪霊による憑依と見なす傾向が強まった<sup>104</sup>。中世から近世にかけてのヨーロッパでは悪魔に憑かれた人々は魔女狩りの対象となったが、その中には多くの癲癇患者やヒステリー患者が含まれていたと考えられる。

ロシアでの悪魔憑きは「クリクシェストヴォ кликушество」あるいは「イコータ икота」と呼ばれる現象にあたる。悪霊に憑かれた人間は「クリクーシャ кликуша」や「イコータ女 икотница」「イコータ男 икотник」と呼ばれた。ただし「イコータ男」「イコータ女」については悪霊を送り込む妖術師のことを指す場合もありうる。ほとんどのケースで患者は女性

<sup>102</sup> テムキン『てんかんの歴史』和田豊治訳、中央洋書出版部、1989、上 94-100。

<sup>103</sup> Погудин М.П. Черная немочь //Русская романтическая повесть, М., 1992. С.97-126.

<sup>104</sup> テムキン『てんかんの歴史』、上 84-90。

であり、クリクーシャという言葉には男性形が存在しないほどである。

悪霊に取り憑かれた人間は、激しい痙攣の発作を起こして暴れ出し、動物のようなうなり声を上げて暴れたり、トランス状態になって意味不明の言葉をつぶやいたりする。発作は教会の儀礼の場で起こることが多く、特に聖餐式でケルビムの聖歌 *херувимская* が唱和される際に必ず悪魔憑きの発作を示すといわれる。悪霊は勝手に人間に取り憑くこともあるが、妖術師が狙った人間の体内に悪霊を送り込むケースの方が多い。呪いをかけられた飲食物や布切れに触れることで発作が始まることもあれば、悪霊が虫やネズミ等の小動物の姿を取って人間の体内に入ることもあった。悪魔憑きを治療するには、僧侶に祈祷 *отчитывание* をしてもらうか、悪霊を放った当の妖術師に魔術の取り消しを頼むしかないと考えられていた。クリクーシャがうわ言の中で誰かの名前を挙げたとすると、それが妖術師の名前だと解釈されることもあった<sup>105</sup>。

悪霊に憑かれた女は予言能力を持つとも信じられていた。クリクーシャやイコータ女に宿る力が単なる邪悪な存在としてのみ見られていたわけではなく、彼女たちが村の共同体の中で霊能力者として一定の役割を果たす場合もあったことが分かる<sup>106</sup>。

アルハンゲリスク県ではイコータ女から予言を聞きたい人は、家に招待して彼女が好むごちそうでもてなす。それから質問を始める。するとクリクーシャは苦しみ出す。目を見開いて、足を痙攣しながらつっぱらせる。病気の女は髪の毛を引きむしり、服を破り、床に倒れる。腹部が不自然なくらい膨れて、病的なうめき声の合間から予言をするイコータ女の声が聞こえる。その後、彼女は歩く力もなくなっているの、家まで送っていく<sup>107</sup>。

悪魔憑きの事例が出てくる最初の文献は1606年にペルミで書かれた訴状であり、そこではイコータに憑かれた被害者が妖術師を告訴している<sup>108</sup>。17世紀で最も有名なのはシュエヤ *Шуя* 市で悪魔憑きが大量発生した事件である。1666年に市の教会にあるイコン「スモレンスクの生神女」が治癒の奇跡を起こしたことがきっかけで、多くの病人が町を訪れるようになった。しかし病人には悪魔憑きが多かったため、市の住民の中にも悪霊に乗り移られる者が続出した。ある少年は道で拾ったパンを食べたせいでイコータに取り憑かれ、礼拝のたびに発作を起こした。ある女性は水汲みの途中で「巻かれた布 *плат завязан*」を蹴飛ばした

---

<sup>105</sup> クリクーシャおよびイコータの一般的特徴については以下の文献を参照。*Новичкова Т. А. Русский демонологический словарь*. СПб., 1995. С.208-209, 238-242; Власова М. *Русские суеверия: энциклопедический словарь*. СПб., 1998. С.167, 179-180; 白石治朗『ロシアの神々と民間信仰：ロシア宗教社会史序説』彩流社，1997，144-149。

<sup>106</sup> *Панченко А. А. Чужой голос: кликота и пророчество. // Христовщина и скопчество: фольклор и традиционная культура русских мистических сект*. М.: О.Г.И, 2004. С.321-340.

<sup>107</sup> *Прыжов И.Г. История нищенства, кабачества и кликушества на руси*. М., 1997 С.96.

<sup>108</sup> *Афанасьев А. Н. Поэтические воззрения славян на природу*. М., 1995. Т. 3. С.311.

ところ、帰宅してから「不浄な悪霊が体内から獣や鳥の声で叫び始めた」。1669年にシュエヤ市長 *земский староста* は窮状を訴える請願書をつァーリに送っている。また悪霊に憑かれた町人女オリンカが、町人ヤキモフを元凶の妖術師であると名指しした。ヤキモフは逮捕され、拷問を受けて死亡した。しかし翌年になっても災いは続いたという<sup>109</sup>。

17世紀末に成立した文学作品『ソロモニアの物語』も興味深い。ウスチュグに近いある村の司祭の娘ソロモニアは農夫マトヴェイに嫁ぐが、やがて悪魔が毎日のようにやって来ては彼女を辱しめる。水中の悪魔の住処にさらわれたり、悪魔の子を出産したりソロモニアの受難は続く。夢のお告げにしたがいウスチュグの教会を詣でると、聖人プロコピイとヨアンが現れて。ソロモニアの腹を割いて悪魔を追い出してくれる。最初に悪魔が取り憑いてから11年後のことだった。『ソロモニアの物語』は聖者伝などの教会文学と悪魔や妖怪をめぐるフォークロアの複数のジャンルが混交して成立したと考えられるが、悪魔憑きの女性を描いた最初の文学作品のひとつとして重要である<sup>110</sup>。

### 3-1-2. 合理的解釈

18世紀になるとクリクーシャは発作を起こしたふりをして虚言を言いふらす詐欺師であるという見方が現われる。1715年にピョートル大帝はクリクーシャを捕まえて本物かどうか尋問にかけるといふ布告を出した。布告の中には1714年にペテルブルグで義弟を殴った男に復讐しようとしてクリクーシャを装った(男を妖術師として名指しするため)大工の妻ヴァルヴァラが、尋問を受けて自白した事例が挙げられている<sup>111</sup>。

同時代の歴史アネクトートとして次のような話も伝えられている。モスクワに住む貴族の婦人クトゥゾヴァは自身が所有するイコンの靈験を宣伝するため、クリクーシャを呼び集めてイコンの前で祈りと呪いによって悪霊を追い出す演技に協力させた。ピョートル大帝はこれを聞いて、嘘つきのクリクーシャを集めて公衆の面前で鞭打つように命じたという。この話について民俗学者プレイジョフは、芝居を企んだクトゥゾヴァではなくて病気の女性たちがペテン師呼ばわりされた点に、「クリクーシャに対する18世紀の視点」の反映があると述べている<sup>112</sup>。「18世紀の視点」に表される古典主義時代の合理的精神は、出来事を一面的にしか理解できていないことが暗に批判されている。つまりピョートル大帝の「啓蒙的」な裁きは悪魔憑きの迷信的な側面を暴くことはできたが、それが精神的な病気である可能性には気づかなかつたのである。

そうした18世紀的な事例としては1770年にヴォログダ県でクリクーシャが騒ぎを起こ

<sup>109</sup> *Прыжов И.Г. История нищенства. С.76-77.*

<sup>110</sup> 物語のテキストおよび解釈は以下を参照。*Пигин А.В. Из истории русской демонологии XVII века. СПб.: Институт русской литературы, 1998.*

<sup>111</sup> *Прыжов И.Г. История нищенства. С.80; Афанасьев А.Н. Поэтические воззрения. С.312.*

<sup>112</sup> *Прыжов И.Г. История нищенства. С.79.*

した事件が興味深い。悪霊に取り憑かれた様子の数人の女性が、その元凶であるとして8人の男女を名指した（彼らに対して「おやじ *батьюшко*」や「おふくろ *матушко*」と呼びかけた）。住民が集まって騒ぎ出し、妖術の罪を着せられた人々は逮捕された。地方長官付書記局 *воеводская канцелярия* と主教管区監督局 *консистерия* は、被告が魔術によって呪いをかけたとして有罪の判決を出した。しかし首都の元老院は以下の理由によってその判決を無効とした。(1)拷問によって自白を強要、(2)悪魔の放った虫が人間の身体に入って病気を起こすという話は民間の迷信、(3)公用便で送られてきた「悪魔の虫」はただのハエに過ぎない。容疑者は釈放され、迷信深い地方役人は解任され、クリクーシャは鞭打ちの刑に処された<sup>113</sup>。

中央の元老院はクリクーシャを単なる迷信と見ているのに対して、地方では住民ばかりか行政機関の役人ですら悪魔憑きの実在を信じている。クリクーシャを詐欺師と同一視する「18世紀の視点」は首都のエリート層の間に留まり、地方までは浸透していなかったことが分かる。この状況は19世紀になっても基本的には変化せず、民衆は相変わらずクリクーシャの予言に耳を傾け、妖術師に私的制裁を加え続ける。アルハンゲリスク州での調査報告によれば、イコータに関する迷信の一部は現在でも保たれている<sup>114</sup>。

### 3-1-3. 医学的解釈

痙攣して口から泡を吹くまでうなったり泣いたりするだけの馬鹿なクリクーシャもいる。もっと賢いのは神の怒りとかこの世の終りの到来を予言する手合いである。(…)村に一人のクリクーシャしかいないのなら口をはさむことはない。なぜなら倒れ病にかかった女ということもありうるからだ。しかし、二人目、三人目が現われるようなら、祭日前の土曜日に彼女らを集めて鞭を喰らわしてやるべきだ。二度ほどの経験で、私は脅しつけるという手段が優れた効果を発揮することを確信した。これは全く悪くない手段であり、倒れ病であっても他人にすぐ伝染する類のものであればかまわない。前世紀の著名な医者の一ひりが、その方法で女子寄宿学校での倒れ病の流行を止めたことがある<sup>115</sup>。

ヴラジミル・ダーリ『ロシア人の縁起・迷信・偏見について』(1843-1846)より

19世紀になると精神の病気としてクリクーシャをとらえる視点も次第に力を持つようになる。しかしロシア語辞書編纂で有名なダーリ医師(1801-1872)は、悪魔憑きの症状に癲癇の可能性を認めつつ、上の引用にあるようにクリクーシャを仮病と見る視点を残していた。「脅しつける」という暴力による治療(もしくは仮病の暴露)は、19世紀のクリクーシ

<sup>113</sup> *Прыжов И.Г.* История нищенства. С.84; *Афанасьев А.Н.* Поэтические воззрения. С.312.

<sup>114</sup> *Никитина С.Н.* Устная народная культура и языковое сознание. М., 1993. С.14-17; 渡辺節子「人が人を害する話——今も生きているポルチャ、ズグラーズ、キラ、イコータ」北海道大学スラブ研究センター研究会での口頭発表(2001年3月11日)

<sup>115</sup> *Даль В.И.* О поверьях, суевериях и предрассудках русского народа. М., 1997. С.21.

ゃに関する言説にしばしば見られるものである。ここでの伝染する病気は確かに癲癩ではありえない。もう少し後の時代であれば集団ヒステリーとして説明される事例だろう。悪魔憑きが人から人へ伝染するというのは珍しい現象ではなく、『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャがクリクーシャである母親の発作を反復するのも実際の症例に基づいた描写である。

神話学者アフナーシェフ（1826-1871）も、大著『スラブ人の詩的自然観』（1865-1869）の中でイコータについて「同じような見解は倒れ病とか舞踏病といった痙攣を伴う病気にも適用される」と述べながらも、「クリクーシャのふりをするだけで、自分の敵を酷い拷問にかけたり死刑にすらすることができる」<sup>116</sup>として、仮病の可能性を重視している。ただしピョートル大帝時代の「18世紀の視点」は悪魔が憑いたふりをする詐欺師としてクリクーシャを否定したのに対し、ダーリヤアフナーシェフは病気のふりをする詐病者としてクリクーシャを否定する点に違いがある。否定される対象としてもクリクーシャは超自然的現象から医学的カテゴリーに変化している。

一方、聖痴愚（ユロージヴィ）、乞食、居酒屋など民衆文化の研究者として名高いイヴァン・プイジョフ（1827-85年）は、精神的な病人としてクリクーシャに同情的な態度を示した<sup>117</sup>。プイジョフはラジカルな民主派陣営に属しており、後にはネチャエフに接近し、学生イヴァノフ殺しに参加（1869年）したことでシベリア流刑を宣告される。ドストエフスキーは『悪霊』（1871-72年）の中で奇妙な民衆研究家トルカチェンコの姿にプイジョフを戯画化している。プイジョフはクリクーシャの病気は、遅れた農村の社会的な抑圧が弱い女性に押し掛かることが原因だと考えた。論文『ロシアのクリクーシャ』（1868年）で彼は次のように書いている。

クリクーシャは農民階層から出るものであり、まれに町人のこともあるが、他の階層からはありえない。農村の女は他よりも粗野であろうか。商人階級（特に分離派）の女と比べて狂信的であろうか。我々の考えでは、彼女たちは粗野ではないし、狂信には縁がない（特に若い時期には）。クリクーシャになるのは心や魂が「健全」だからであり、そのため精神的な苦痛を深く感じる能力があるからである。精神的屈辱に耐えることができず、彼女は野蛮な迷信に取り囲まれて、衰弱し、クリクーシャになる。（...）農村女性の夫は、その暮らしが破綻した場合、獣であり暴君である。妻は彼に酷い目にあわされる。夫が死んでも、呪いをかけられることがある。墓場に釘付けにしないと、夜毎に這い寄ってくる。（...）<sup>118</sup>

プイジョフと同時代の民俗学者セルゲイ・マクシモフ（1831-1901年）もクリクーシャ

<sup>116</sup> *Афанасьев А.Н. Поэтические воззрения. С.311.*

<sup>117</sup> プイジョフの伝記については以下を参照：鈴木淳一「永遠の失敗者—イワン・ガヴリロヴィチ・プイジョフ略伝」、『札幌大学外国語学部紀要：文化と言語』19-1号、1996年、37-61頁。

<sup>118</sup> *Прыжов И.Г. История нищенства. С.92.*



を病人として記述している。アルハンゲリリスク県メゼニ川流域の調査旅行（1856年）の途上、猛吹雪を逃れてたどり着いた村でマクシモフはイコータ女の陰惨な叫び声を耳にする。理由を問うと、百姓娘のアニュトカが二人の若者をたぶらかした罪を問われ、村の長老たちの決定で鞭打ちの刑に処せられたという。刑罰の後で家に戻ってから、娘はイコータの病状を示すようになった。このエピソードは彼の著書『北方の一年』（1859年）に見ることができる<sup>119</sup>。

マクシモフは晩年の著作『不浄な力・未知の力・聖なる力』（1903年）でもクリクーシャについて1章を割いている。彼は本物と仮病のクリクーシャを見分けることは困難と考えるが、どちらの場合にしても封建的な家族制度の中で他家から嫁に来た女性が抑圧に耐え切れずに「明らかにヒステリーを基盤にした神経障害を起こしたのである」と認めている。社会的な抑圧に病因を見る点はプレイジョフと共通しているが、彼よりも長生きしたマクシモフは農奴解放後の土地改革や農村女性の地位向上、ゼムストヴォ医療の発達などのおかげで、クリクーシャは減少しつつあると楽観的な見通しを立てている<sup>120</sup>。

#### 3-1-4. 文学におけるクリクーシャ：歴史小説から農村小説へ

民衆の素朴な信仰に由来する悪魔憑きの概念が、18世紀には悪魔憑きを騙る詐欺師として合理的な解釈をほどこされ、19世紀になると精神病者として医学の対象に変化する。クリクーシャに関する表象は神秘・虚偽・病気という三つのカテゴリーの間を移り変わってきたように見える。しかし19世紀のエリート・知識階級の間では精神医学的知識が広まっていたとしても、農村や下層社会では民間信仰が相変わらず強い影響力を残していた。そしてまた悪魔憑きに対しても、精神病患者に対しても、それが偽者ではないかという疑いが同時に存在した。ドストエフスキーおよびその他の19世紀の文学作品には、これまで17世紀から通時的に検討してきたクリクーシャの様々な表象が、社会構造の中に積み重なるようにして共時的に現れるのを見ることができる。

1830年代にはウォルター・スコット流の歴史小説がロシアでもブームとなり、とりわけ17世紀の動乱時代（スムータ）が舞台設定として好まれた<sup>121</sup>。前述の通り、悪魔憑きという超自然現象が文字通りに信じられていた時代でもある。しばしばロシアで最初の長編歴史小説とされるミハイル・ザゴスキンの『ユーリイ・ミロ斯拉フスキー、あるいは1612年のロシア人』（1829年）とファデイ・ブルガーリンの『偽ドミトリー』（1830年）を比較し

<sup>119</sup> Максимов С.В. Год на севере // Избранные произведения в 2-х томах. М., 1987. Т.2. С.101-111.

<sup>120</sup> Максимов С.В. Нечистая, неведомая и крестная сила. СПб., 1994. С.131-133.

<sup>121</sup> Альтишулер М.Г. Эпоха Вальтера Скотта в России: Исторический роман 1830-х годов. СПб.: Академический проект, 1996. ドストエフスキーが幼少期にスコットの歴史小説に親しんだことについては以下を参照。金沢美知子「ウォルター・スコットとロシア・ロマン主義文学」『スラヴ研究』36号、1989年、1-19頁。

てみよう。

まずブルガーリンの『偽ドミトリー』の第1部5章では、ボリス・ゴドゥノフ帝の時代、モスクワの赤の広場に集まる民衆を描く場面がある。イヴァン雷帝の息子で死んだはずのドミトリー皇子が実は生きているという噂が広まる。そこで重要な役割を果たすのがクリクーシャである。

「あれはクラスノエ村のマトリョーナといって織工のニキータの寡婦だよ」と老人が隣の男に言った。「3年ほど前だったか魔法使いが呪いをかけた。そしたら家も子供も捨ててしまい、夏は森や沼地をさまよひ歩き、冬は村々を回って時には町にもやって来る。彼女の身体には悪魔がとりついていて、こいつが性悪な奴でどうやったって追い出すことができない。悪魔のせいではひきつけを起こして苦しむし、鶏やら犬やら豚やらの真似をする。身体の中から叫び声をあげて、昼も夜も吠えたりブーブーうなる始末。時にはマトリョーナめ可哀そうにすっかりイカれてしまって、火の中、水の中に飛びこんでしまうこともある。予言することもあって、帽子横丁の商人だったセニカ・ロパタが死ぬのを言い当てた。書記のシュムスキーには監獄に入ってしこたま殴られることを、スコロドムの界限では火事が起きるのを予言した。そばには行かないほうがいいぞ、どんな災いにあうともかぎらんからな」<sup>122</sup>

不意に登場したクリクーシャはイヴァンの雷帝の息子ドミトリー皇子がボリス・ゴドゥノフによって殺されたことをほのめかし、そのような男をツァーリに選んだことで大きな災いが起きることを予言する<sup>123</sup>。この場面におけるクリクーシャの不吉な言葉は死んだはずのドミトリー皇子が実は生きているという噂が広まっていく重要な契機になる。ブルガーリンはクリクーシャの身体には悪魔が憑いているという民衆の信仰をそのまま描く一方で、その予知能力などの神秘性について懐疑的な視点も導入している。例えば同じ赤い広場の場面に登場する若い役人(писец)の意見によれば、クリクーシャは「たわごとを言っている」だけで、捕まえて鞭打ってやれば「カラスが古巣から飛び出すように悪魔がはい出してくるだろう」という。また物語の終盤(第4部8章)ではやはり赤の広場に集まった民衆が帝位についた偽ドミトリーについて噂し合う場面がある。ここではクリクーシャのマトリョーナが後に褒美をもらって贅沢な暮らしをしているという話がささやかれ、偽ドミトリーの一味の陰謀を助けるために予言者の役割を演じていた可能性が示唆されている<sup>124</sup>。超自然的な解釈と18世紀的な合理的解釈が対置される構図だが、どちらが正しいかという

<sup>122</sup> *Булгарин Ф.В. Дмитрий Самозванец. // Полное собрание сочинений Фадея Булгарина. СПб., 1839-1844. Т.3. С.51.* ブルガーリンは注釈でクリクーシャの描写がミハイル・チュルコフの著作『ロシアの迷信のいろは Абувега русских суеверий』(1786年)に依拠していると記している。

<sup>123</sup> しばしばブルガーリンによる盗作を疑われるプーシキンの史劇『ボリス・ゴドゥノフ』(1831年刊行、執筆は1825年)では、ゴドゥノフによる皇子殺害を示唆するというクリクーシャと類似した役割を聖痴愚(ユロージヴィ)が果たしていることも興味深い。

<sup>124</sup> *Булгарин, Дмитрий Самозванец. С.321.*

一義的な解決は示されておらず、ロマン主義期の幻想小説の詩学に沿った「ベールをかぶった幻想 *завуалированная фантастика*」となっている<sup>125</sup>。

ザゴスキンの『ユーレイ・ミロスラフスキー』はポーランド軍にモスクワを占領され、それに対抗するミーニンとポジャルスキーが「国民軍」を組織して活躍する動乱時代の末期を舞台にしている。主人公の貴族ミロスラフスキーは1610年にモスクワでツァーリとして戴冠したポーランド王の息子ヴラディスラフ（ヴラディスワフ）への臣従を誓ってしまったことでジレンマに追い込まれる。主人公をめぐる悲劇的な物語が正統な君主のいない動乱時代における愛国と忠誠という大きな問題をめぐって展開される一方で、ミロスラフスキーの従者となるコサックのキルシャは身動きの取れない主人公に代わって自由に活躍し、主として喜劇的な基調のプロットを生み出す機能を果たす。

キルシャはポーランド側に与するロシア貴族シャロンスキーの領地の村で、魔術師として恐れられている農民アルヒープが怠け者の老婆ペラゲーヤにクリクーシャを演じさせようと算段しているのを偶然のきっかけで聞いてしまう。

「今日、わしらの村で結婚式がある。郷書記の娘が領地管理人の息子に嫁ぐことになっている。連中が婚礼に出かけたら、その間に花婿の小屋の寝板に這い込んで隅っこで小さくなって。顔を伏せてぶつぶつ独り言を言うんだ。(…) 婚礼の行列が教会から戻ってきたら、わしが小屋に入ってくるが、敷居をまたいだらすぐその瞬間にだぞ、自分の身を案じたりしないで一息に寝板から床に転がり落ちるんだ！」

「床にぶつかるというのかい？いやはや、おまえさん！そんなことしたら無事で済むもんかい！」

「いいところのご婦人でもあるまいし！寝そべったまま楽をして魔女になりたいんじゃないのかい。うまく行ったら藁でも撒いておくんだな。ただし目立たないように(…) わしが何を言っても、「罪深きかな」とそれだけを叫ぶんだぞ、そこから先はおまえには関係ないことだ。三日前に御領主の布が紛失した。もしもそのことを尋ねられたら、ひしゃくに水を汲んで囁きかける。こっちを見てわしが首を振ったら、布はフェジカ・ホミャクの穀物小屋の乾燥場の中に隠してあると答えるんだ」<sup>126</sup>

ここでザゴスキンの描いているのは神秘的な解釈の余地のない偽物のクリクーシャであり、この後にはコサックのキルシャによって悪だくみが暴かれるコミカルな場面が続く。時間軸を同じくして隣の貴族の館では主人公ミロスラフスキーと領主シャロンスキーの娘アナスタシアの悲劇的な恋愛のプロットが進行している。さらには恋の悩みで病気になってしまったアナスタシアを魔術師の役柄をアルヒープから奪ったキルシャが治療することになる。興味深いことに農民の間の病気であるクリクーシャと貴族のアナスタシアの恋わずら

<sup>125</sup> ユーレイ・マン『ファンタジーの方法：ゴゴリのポエチカ』群像社、1992年。第3章の議論を参照。

<sup>126</sup> Загоскин М.Н. Юрий Милославский, или русские в 1612 году // Сочинения в двух томах. Т.1. М., 1987. С.74-75. (第1部6章)

いがキルシャの介在によって重なり合う。どちらもある種の呪い（порча）が原因とされるところは共通しているが、社会層の差異にともなう意味の断絶はむしろ滑稽な効果を生み出す。アナスタシアの治療を終えたキルシャに村人たちは「お嬢様はニワトリのように鳴いたんですか」とか「犬のように吠えたのか」と口々に尋ねる。キルシャは「貴族の令嬢が犬やニワトリのように吠えたり鳴いたりするわけがないだろう。お前たちのような下僕身分の仲間とはちがうんだからな。彼女の場合はやつれはて悲嘆するということところだ」と反論する<sup>127</sup>。貴族の主人公の悲劇というメインプロットとコサックの従者の喜劇のサブプロットを組み合わせたザゴスキンの小説では、クリクーシャのモチーフが両者の交差する接点として機能している。農民や召使たちだけでなく地主貴族のシャロンスキーやその娘アナスタシアまでが悪魔憑きを信じているのに対して、コサックのキルシャだけがそのような「迷信」から自由なふるまっているのが特徴的である。

1840年代に入るとロマン主義的色彩の強い歴史小説のブームは下火になり、現代社会の問題を扱った作品が優勢となる。クリクーシャも同時代の農村で観察される現象として作家の関心を集めた。この時期の作品では虐げられた女性の病理としてクリクーシャに医学的な眼差しが向けられることが多い。ロシアにおける悪魔憑きをめぐる様々な言説を分析したウォロベツは、クリクーシャを描いたリアリズム期の文学作品として『カラマーゾフの兄弟』と並んで、アレクセイ・ピーセムスキーの『森の精：警察署長の話』とニコライ・レスコフの『ある女の生涯』を挙げている。農奴制下の農村の過酷な状況を示すための題材として悪魔憑きの女性を主人公に選んだ点で両者は共通している<sup>128</sup>。

ピーセムスキーの『森の精』（1853年）では若い村娘マルファが一時的に失踪する事件が起きる。森の精（レーシイ）にさらわれたといわれるが、実際には好色な領地管理人に誘惑された挙句に捨てられたことが明らかになる。辱められたマルファは悪魔憑きの発作を起こすようになった。その様子は地元の警察署長（исправник）である語り手によって次のように描写される。

彼らの迷信によると、誰かに発作が起きたら手を触れてはいけない、身体を覆ってやればよいというわけです。けれど私はそんなこと気にしませんから、彼女を教会の玄関口に出すように指示して、自分も外に出ました。見ると、まだうら若い娘で、あおむけに横たわり、大粒の涙をこぼし、むせび泣いているのではないですか。私は旅行用にホフマン液を持っていましたから、それを与えましたが、無理やり口を開いて流し込んだと言ったほうがいいですね。そうしたら意識を取り戻しました。（…）まずお話ししておかないといけません、平民の間にクリクーシャはたくさんいるものなのです。彼らは自分たちの間ではこれを呪いにかけてられたせいだと考えています。それとは別に旦那方は仮病や悪戯にすぎないと理解しています。実際にはどっちでもなくっ

<sup>127</sup> Загоскин, Юрий Милославский... С.131. (第2部1章)

<sup>128</sup> Chritine D. Worobec, *Possessed: Women, Witches, and Demons in Imperial Russia* (Northern Illinois UP, 2003), pp.119-128.

て、われわれの社会の令嬢たちに見られるのと同じヒステリーの発作なんです。農婦にだって魂はありますからね。(…) 舅に虐められたり、姑にがみがみ叱られたり、もしかすると夫に殴られるかもしれない。一週間まるまる嘆き暮した後で、教会に行き祈り、強い印象を受ける。そもそも教会の中は香が焚かれていて息苦しいでしょう。そして倒れてしまうわけです<sup>129</sup>。

これまで通時的に概観してきたクリクーシャの超自然的解釈と合理的解釈が、それぞれ農民と貴族の社会層の認識の差異として表れていることが分かる。語り手はそれらに対して農村の過酷な社会環境のせいで起きる病理現象だという説を主張する。ザゴスキンの歴史小説では異なるカテゴリーとされていた農民と貴族の病気が、「われわれの社会の令嬢たちにみられるのと同じ」だというヒステリー概念によって同一視されているのも興味深い。

レスコフの『ある女の生涯』(1863年)では望まぬ結婚を強いられた農民の娘ナースチャが悪魔憑きの発作を起こすようになる。「激しいヒステリーが始まった。ナースチャはげげら笑い転げ、泣いて、また笑い、髪の毛をかきむしり、ベンチから落ちてのたうちまわった」。小説中では「クリクーシャ」の語は用いられないが、村人たちはナースチャが「呪われており、悪魔が身体の中にいる」と信じている<sup>130</sup>。一方でピーセムスキーの小説と同様に語り手は彼女の発作を「激しいヒステリー」だと解釈している。ナースチャは村の男ステパンを愛するようになり、駆け落ちするが、捕まって厳しい処分を受ける。『ある女の生涯』では伝統的な民間療法の医師クリルイシュキンがナースチャを癒すことができるのに対して、西欧風の近代的な医学には批判的な眼差しが投げかけられている。クリルイシュキンのもとで療養していた女性患者たちは衛生局 *врачебная управа* に連行され、男性の医師や兵士のもとで暴力的な検査を受ける。抵抗したナースチャは精神病院に入れられてしまう。ウォロベツは女性の生殖器がヒステリーの病巣になっているという同時代の医学言説が背景にあると推察している<sup>131</sup>。ピーセムスキーとレスコフの小説は大改革前の農村の歪んだ社会構造を批判し、立場の弱い女性が虐げられる典型的な構図としてクリクーシャを取り上げた。とりわけ女性の性的な抑圧を描き出したことは注目に値する。『森の精』で領地管理人に誘拐されるマルファや『ある女の生涯』で屈辱的な衛生検査を受けるナースチャの姿は17世紀の『ソロモニアの物語』をリアリズムの文体で語り直したもとして読むこともできるだろう。

### 3-1-5. ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』

ドストエフスキーの最後の長編『カラマーゾフの兄弟』(1879-80)に登場するクリクーシ

---

<sup>129</sup> Писемский А.Ф. Леший: рассказ исправника // Собрание сочинений в девяти томах. Т.2. 1959. С.255.

<sup>130</sup> Лесков Н.С. Житие одной бабы // Полное собрание сочинений. Т.2. 1998. С.152.

<sup>131</sup> Worobec, *Possessed...* p.128.

ヤもこれまで見てきた複数の視点を念頭においたうえで描き出されている。第1部の「信心深い女たち」と題された章では、ゾシマ長老のもとを多くの女性信者が訪れる様子が描かれており、その中に悪魔憑きの発作を起こした女性が混じっている。

(...) 彼 (=ゾシマ長老、注：越野) の方にひとりのクリクーシャが両手を取って突き出された。その女は長老を見たたん、わけの分からないことを喚きたて、しゃっくりし、子癇にかかったみたいに全身を震わせた。長老は女の頭に僧衣の前垂れをかぶせて、短い祈祷をあげてやった。すると女はすぐに静かになって落ち着いた。今はどうだか分からないが、私も子供時代に村や修道院でクリクーシャをよく見かけたり、声を聴いたりしたものだ。彼女たちを礼拝に連れて行くと、堂内に響くくらいキイキイ声を立てたり犬のように吠えたりした。しかし聖体が運ばれてきて、彼女たちをそばに導くと、すぐさま「悪魔憑き」は止んでしまい、しばらくの間はおとなしくなった。幼かった私はひどく驚いたものだ。しかし何人かの地主やとりわけ町の学校教師から私がせがんで教えてもらった話では、それは働きたくないがための仮病であって、相応の厳罰で臨めば一掃できるものだという。ちなみにその裏づけにいろいろな逸話も話してもらった。けれども後になって私は専門家の医者から聞いてびっくりしたのだが、この場合には仮病なんてありえないのであり、どうやら主にロシアにはこびる恐ろしい女性の病気であって、農村の女性の過酷な運命を証言するものだという。医学の助けを何も借りずに行なわれた不適切な苦しい出産の後であまり早く重労働に就くことが原因で生じる病気であり、他にも救いのない悲しみや旦那に殴られること、その他に女としての心性が一般的に耐えられないであろうことは何でも原因になるという話である (14, 44) <sup>132</sup>。

ドストエフスキーはここでクリクーシャは「働きたくないがための仮病であって、相応の厳罰で臨めば一掃できるもの」というダーリのような仮病説、「ロシアにはこびる恐ろしい女性の病気であって、農村の女性の過酷な運命を証言するもの」というプレイジョフ的な社会的抑圧による精神病説を並べて紹介している。前節で見たようにピーセムスキーの『森の精』は同じようにクリクーシャについての複数の説明を並べながら、農村の抑圧的な環境を発作の真の原因とみなす立場を取っていた。一方で『カラマーゾフの兄弟』の語り手はクリクーシャが「農村の女性の過酷な運命を証言するものだ」という医学的な解釈に対しても距離を置き、その他の諸説と同等に扱っているように見える。医学的解釈は社会環境決定論の立場でもあり、そこから距離を取ろうとする語り手の態度は第1章で論じた『罪と罰』のカチェリーナの発狂をめぐる解釈を思い起こさせる。他の部分ではあまり前面に出てこない小説の語り手が、自らの幼年期の体験としてクリクーシャを目撃したことを詳細に描写していることも興味深い <sup>133</sup>。

---

<sup>132</sup> ドストエフスキーの引用は Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-83. により ( ) 内に巻数と頁数を記す。

<sup>133</sup> モチャーリスキーは、このエピソードを作家自身が幼年期に体験したものと見なして

小説の語り手はクリクーシャが僧侶の祈祷によって癒される理由を論じて、「クリクーシャを聖餐のもとへ連れて行く女たちも、それから大事なことに病人自身も」、祈祷の力を「まるで証明済みの真理のように信じていた」ことを重視する。そして「それゆえに神経質でももちろん精神病でもある女性の内、聖餐の前にひざまずく瞬間、必然的な治癒の奇跡を待つ気持と、それが必ず起きると信じきった心によって、彼女の全身に衝撃が引き起こされるのである」(14, 44)と説明する。聖書に書かれたイエスによる癒しは「信じる者は救われる」というように信仰が救済の直接の原因となる。語り手はそれを医学的な用語によって説明している。第2章で論じた催眠術(メスメリズム)による暗示の力もこのような信仰治療を説明する有力な言説であった。しかし奇跡が言葉によって合理的に解釈されることはひとつの矛盾を生み出す。説明される客体であるクリクーシャ(農民女性)は第1-1節で論じたような17世紀の超自然的解釈の位相にあるのに対して、説明する主体である語り手(知識人)は近代の医学的解釈に立っており、両者には大きな断絶がある。語り手の論理に従うならば奇跡を獲得するためには奇跡を予め信じていなくてはならないが、それは合理主義に立つ同時代の知識人には不可能な話である。

クリクーシャの癒しと対照的に描かれているのが、同じ時にゾシマ長老を訪れるホフラコヴァ夫人と娘のリーザである。リーザは神経性の麻痺と思しき理由で足が動かなくなっており、信仰治療によって車いすから奇跡的に立ち上がることが期待される。しかし夫人の偽善的な告白とリーザのふざけた態度は、クリクーシャを代表とする民衆の女性たちの深刻な苦悩と対照的である。信仰心の薄いホフラコヴァ母子は身体も精神の安定も得ることができない。二つの章が「信心深い女たち Верующие бабы」「信仰心の薄い貴婦人 Маловерная дама」とそれぞれ題されているのも目を引く。

ドストエフスキーがゾシマ長老と民衆の女たちの関係に信仰の理想の在り方を見ていたのは確かだろうが、それは知恵の果実を味わってしまったドストエフスキー自身を含む近代人には手の届かない理想でもあった。しかしカラマーゾフの兄弟たちは近代的合理主義を認めていながら、明らかにそれと矛盾するような別の次元で信仰を弁護する傾向が見られる。ある意味で『罪と罰』のカチエリーナやマルメラードフが環境決定論に逆らうかのように、あえて不合理な実践を選択するのと似たような心理のメカニズムを見ることができるといえる。長男ミーチャは監獄での弟アリョーシャとの会話で、フランスの生理学者クロード・ベルナールに依拠して人間の意識を神経の作用として説明する合理主義者のラキーチンの議論を思い出している。脳内の「神経にある小さな尻尾」が振動すると、「イメージ、つまり対象や出来事」が出現し、その結果として人がものを見たり考えたりするという議論は、先述のクリクーシャの信仰治療についての語り手自身の生理学的な説明と奇妙にも一致している。ミーチャはラキーチンの議論の合理性を否定しないが、それでは「神が憐れで

---

いる。コンスタンチン・モチューリスキー『評伝ドストエフスキー』松下裕・松下恭子訳、筑摩書店、12-13頁。

はないか」と訴える (15, 28)。人間の魂や神が存在するか否かは問題ではない。ミーチャを苦悩させるのは神が憐れでないかどうかという問いなのだ。無神論者のイヴァンにとっても実は問題は同じだ。もしかすると神は存在するかもしれないが、神によって約束される「永遠の調和」を受け入れたくないからこそイヴァンは神を否定する。

このような信仰のありようは物語の冒頭で「リアリスト」として紹介されるアリョーシャの人柄と共に説明がなされている。語り手は、使徒トマスがキリストの復活を信じたのは復活という奇跡を目にしたからではなく、ただ信じたいと願ったからだと主張する (14, 25)。アリョーシャの信仰もあくまで自分の願望によって選ばれたものであり、悪魔憑きとそれを癒す聖人が最初から存在する世界観の中に生きるクリクーシャとは異なっている。アリョーシャも民衆の女性たちと同じようにゾシマ長老の奇跡の力を信じているが、それは正確には信じたいと強く願っているものであり、そうであるからこそ長老の遺体の腐臭はアリョーシャの信仰を危機に導くことになる。フォンヴィージナ宛の手紙でドストエフスキーが述べた有名な信仰告白「たとえキリストが真理の外にあったとしても、私はキリストと共にありたい」も同じ論理に基づくものだといえよう<sup>134</sup>。

『カラマーゾフの兄弟』に登場するもう一人のクリクーシャはアリョーシャとイヴァンの母ソフィアである。ソフィアは輔祭の娘で幼いころに親を失い、養家での辛い暮らしの中でフォードルに目をつけられる不幸な女性である。ピーセムスキーやレスコフが描いた悪魔憑きの女と同じように、不品行な夫との呪わしい結婚生活の中でソフィアは「農村の平民の女によく見られる女性の神経病でクリクーシャと呼ばれる病」にかかる。「酷くヒステリックな発作を伴うこの病気のせいで、病人はときおり理性すら失うことがあった」(14, 13)。ソフィアが初めて発作を起こす印象的な場面をフォードル自身が以下のように語っている。

結婚した最初の年のこと、あれはまたお祈りばかりしておってな、生神女の祭日は特にしっかり守って、傍らからわしを書斎に追い払う始末。この神秘趣味を打ち破ってやろうと思ったわけさ。わしは言っちゃった。「ほら見ろ、おまえの聖像だぞ。そら、こいつを今はずすからな。おまえはこれを霊驗あるものと思ってるようだけど、おまえの見てる前でつばを吐きかけてやる。それでもわしには何も起こりはしないだろうて」。あれがこっちを見たときは、殺されると思ったがな、ただ飛び上がって両手を打つだけなのさ。それから急に顔を隠して全身をぶるぶる震わせると、床に倒れてしまった...。(14, 126)

ドストエフスキーはここで「純粋な信仰」を民衆（ナロード）と結びつける概念の鍵としてクリクーシャを利用していると考えられる。『罪と罰』のソーニャ・マルメラドヴァ、『悪霊』の聖書売りの女ソフィア、『未成年』のアルカーギーの母で農奴だったソフィア達の系譜において、もともと「叡知」を意味するソフィアという名は素朴な信仰を持つ民衆像と結

---

134 第4章で議論するプーシキンの「私にとって貴きは低俗な真実の闇よりも／僕らを高める偽りなのだ」という詩句も「英雄」に対する同様の信仰告白とみなすことができる。



びついており、その最後の形象が『カラマゾフの兄弟』におけるクリクーシャのソフィアなのである。ナロードの素朴な信仰を象徴する母親から、神の存在の是非を意識的に選ぶとするアリョーシャとイヴァンが生まれたことは興味深い。

悪魔憑きは集団ヒステリーのように伝染する場合があるが、アリョーシャも母親の病気についてのフォードルの話に影響され、クリクーシャに似た発作を起こす。「アリョーシャはテーブルから飛ぶとすると、話にあった母親と全く同じように、両手を打った。(…)そして声にならない身を切るような急激な涙のヒステリックな発作で不意にがたがたと全身を震わせ始めた」(14, 126)。これは母親の体験した信仰の危機が息子に移ったとも解釈できるが、後にゾシマ長老の死をきっかけに訪れるアリョーシャ自身の信仰の危機を先取りする場面とも考えられる。第4章ではコレラのように人から人へと伝染する言葉や理念の問題を論じるが、クリクーシャにおいては非言語的な身振りが模倣されるのが興味深い。

19世紀ロシア社会において悪魔憑きには神秘的・懐疑的・医学的な理解という三層の構造が共時的に存在していた。文学のテキストにはしばしば複数の解釈が重層的に組み込まれており、とりわけドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』においてはそれらの解釈が対話的・論争的な緊張関係に置かれている。クリクーシャをめぐる言説は信仰をめぐる小説の大きなテーマの中に位置づけられ、近代の合理性を受け入れながら神の有無という問題に対峙するという矛盾が一人の人間の意識に映される在りようが示されたのである。

### 3-2. ムハンマドと癲癇

#### 3-2-1. イメージの変容

ヨーロッパにおけるイスラム教の預言者ムハンマド(ムハンマド)像の変遷の歴史には癲癇のイメージが大きく関わっており、クリクーシャの場合と符合する点が多い。ムハンマドが癲癇患者であったという説はビザンツ帝国から西欧に導入されたものであるが、イスラム世界では一般的ではなかった<sup>135</sup>。中世ヨーロッパのキリスト教護教論者たちは、ムハンマドが山中で初めて啓示を受けた時の様子が癲癇の発作に似ていることを指摘する一方で、これを悪魔に憑かれたせいにしたたり、病気を隠すために「天使との出会い」を持ち出したと非難したりした。「癲癇」「悪魔憑き」「詐欺師」のイメージは個別に論じられるというよりも、区別されずに渾然となってイスラム教攻撃の言説に用いられていたようである<sup>136</sup>。

本論ではロシアにおけるムハンマドの表象の歴史について詳述することはできないが、上述した「詐欺師」のイメージがロシアにも広まっていたことは確かである。例えば1792年に出たアレクセイ・コルマコフによるロシア語訳コーラン(英語からの重訳)には『偽預言者 лжепророк ムハンマドの生涯の詳細にわたる描写』という解説が付されている<sup>137</sup>。ド

<sup>135</sup> O.テムキン『てんかんの歴史』、上 143-147。

<sup>136</sup> Norman Daniel, *Islam and The West: The Making of An Image* (Oxford: Oneworld, 2000) 47-53.

<sup>137</sup> Кум Г.Ф. Шастико П.М. История отечественного востоковедения до середины века. М.,

ブローリユーボフは、後述するムハンマドの伝記に関する書評（1858）でロシアの歴史学者を批判して、「例えばムハンマドだが、彼は我が国の歴史学でどのように描かれているだろう。まず第一には、何の基盤もなしに新しい信仰をでっち上げ、人々を偽の奇跡でまごつかせた詐欺師 *обманщик* としてである」<sup>138</sup>と述べている。

しかしそうしたムハンマド像も 19 世紀には変化し始める。ギボンやカーライルはイスラム教の開祖が詐欺師だったという伝説を否定し、ムハンマドを卓越した宗教政治家として描き出そうと努めた。1843 年にドイツの東洋学者グスタフ・ワイルは『預言者ムハンマド』という本を著したが、そこでワイルは癲癇性の幻覚がムハンマドに預言のヴィジョンを与えたと考え、ムハンマドが詐欺師ではなく本物の宗教家であった証拠と見なした。ワシントン・アーヴィングの通俗的な伝記『ムハンマドとその弟子たち』（1849 年）に引用されたことにより、癲癇者すなわち宗教家というワイルの説は欧米に広く普及することになる<sup>139</sup>。以下はムハンマドが初めて天使から啓示を受ける場面に付せられた注釈で、アーヴィングはワイルに依拠してムハンマドの神秘体験を癲癇発作として解釈している。

グスタフ・ワイルは著書『預言者ムハンマド』の注釈の中でムハンマドが癲癇の発作をよく起こしたという問題を論じている。これは彼の敵やキリスト教作家による中傷として一般的に示されてきた問題である。しかしながら何人かの昔のイスラム伝記作家によっても確認されているし、信頼できる人々の発言も典拠になっている。彼らによれば、ムハンマドの発作は強い震えの後に来る一種の卒倒、あるいはむしろ痙攣であり、その間に寒い時には額から汗を流した。口から泡を吹き、若いラクダのようにうめきながら、横たわることもあった。（…）

「しばしば」と彼（＝ムハンマド、注：越野）は答えて言った。「天使が人間の姿で現れて、私に話しかける。時として私は鐘が鳴るのに似た音を聴く（耳鳴りは癲癇の兆候である）。目に見えない天使が去って行く時、私は天使が啓示したことを自分のものとしている」<sup>140</sup>

アーヴィングの著作は 1857 年にピョートル・キレエフスキーによってロシア語に翻訳された<sup>141</sup>。ドストエフスキーがこの翻訳を読んで、癲癇者としてのムハンマドのイメージを得たのではないかと、多くの研究者が推測している<sup>142</sup>。ドブローリユーボフは先述の通り書

---

1990. C.73.

<sup>138</sup> *Добролюбов Н.А. Жизнь Магомета // О религии и церкви. М., 1960. С.329.*

<sup>139</sup> テムキン『てんかんの歴史』上巻、412-414。

<sup>140</sup> Washington Irving, *Mahomet and His Successors* (N.Y.; London, 1849), p.51. 関連するライスの議論は以下を参照。James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art* (Ann Arbor: Ardis, 1988), pp.266-267.

<sup>141</sup> 上述のワイルに依拠した癲癇説についての注釈も翻訳されている。*Ирвинг, В. Жизнь Магомета. М., 1857. С.39-40.*

<sup>142</sup> Rice, *Dostoevsky and the Healing art*, p. 259-279、他にドストエフスキー 30 巻本の注釈者の

評でこの本を取り上げて、以下のように解説している。

彼（＝ムハンマド、注：越野）はあるとき信奉者たちの前で話したことがある。自分の耳の中に聴こえる特別な鐘の音で啓示が近づいたことが分かるのだと。これは癲癇の発作が近いことを示す兆候のひとつである。彼が自分の思想の全てを神の靈感と見せかけたことは、彼自身の神秘的な妄想によって説明できるのであり、彼が悪意の詐欺師だということを証明するものではない<sup>143</sup>。

ムハンマドはキリスト教世界では偽預言者・詐欺師として表象されてきたが、19世紀に入ると卓越した宗教家・政治家として描かれるようになる。その際に癲癇という病気を導入することで、ムハンマドが見た宗教的なヴィジョンは邪教を広めるための方便ではなく、癲癇の発作による幻覚であるという合理的な解釈が可能となった。

### 3-2-2. ドストエフスキーとムハンマド

ドストエフスキーがイスラム教への関心を深めるきっかけとなったのは『死の家の記録』で描写されているようなオムスク監獄でのカフカス人との交流、そしてカザフの知識人チヨカン・ワリハノフとの交友関係だったとされる<sup>144</sup>。作家が書いたものの中でムハンマドが癲癇者として最初に言及されるのは、1864年の『同時代人』誌との論争においてである。サルトゥイコフ＝シチェドリンを容赦なくからかったドストエフスキーの諷刺文「シチェドリ氏あるいはニヒリストの分裂」（『エポーハ』7月号）に対して、批評家アントノヴィチは同じくらい容赦ない文章「イワツバメたちへ、イワツバメの頭目ドストエフスキー殿」（『同時代人』9月号）を書いて反論した。そこには明らかにドストエフスキーを戯画化したと見られる登場人物（スイソエフスキー）が病的な発作を起こす場面が描かれている。「朗読は四度も中断された。一度目はスイソエフスキーが失神したため。二度目は彼にホフマン滴剤を与えるため。三度目はローレル水を与えるため。四度目は酔でこめかみを拭ってやるためであった」<sup>145</sup>。アントノヴィチの中傷に対してドストエフスキーは反論の文章を練るが、その草稿らしい部分が1864年の雑記帳に残されている。

そう、私は運悪くも12年前から癲癇を病んでいる。病気は恥じるにはあたらない。しかし癲癇は活動を妨

---

意見（1, 494-495）を参照。Futrellはこの説に反対して、作家が所持していた仏訳版コーランの注釈にもムハンマド癲癇説が記されていたと指摘している。M. Futrell “Dostoevsky and Islam” *The Slavic and East European Review* 57(1979), pp. 24-25.

<sup>143</sup> Добролюбов Н.А. Жизнь Магомета. С.333.

<sup>144</sup> M. Futrell “Dostoevsky and Islam”: 16-31; 宇山智彦「中央アジアから見たロシア文化」『ロシア文化の新しい世界：北海道大学スラブ研究センター公開講座』、1997年、44-46頁。

<sup>145</sup> [Антонович М.А.] Стрижам (Послание Обер-стрижу, Господину Достоевскому) //Современник. 1864. №9. С.161.

げはしない。偉大な人物ですら多くが癲癇にかかっていたし、その一人などは世界の半分を自己流に改変しさえしたのだ。癲癇であったにもかかわらずである。あなた（＝アントノヴィチ、注：越野）もまた何という手法に訴えてくれたものだ。（20, 198）

「世界の半分を自己流に改変した人物」とはムハンマドを指している。ドストエフスキーは『エポーハ』9月号に反論の文章『必要不可欠な声明』を載せるが、「どこかの病人の病気を笑うことが可能なことは私も分かる。つまるところ私にはそれが全く理解できないけれど、人がその成長の程度によっては極度の怒りの発作にかられて、復讐心からそういうことをしかねないことは知っている」（20, 126）と述べるに留まり、癲癇という病名やムハンマドについては言及しなかった。病気について論敵に更なる諷刺の種を与えることを恐れたのかもしれない。ドストエフスキーは概して自分の癲癇と天分に関してアンビヴァレントな意識を持っていた。その少し後に書かれた『罪と罰』（1866年）でラスコーリニコフが論じる流血を恐れぬ歴史上の「非凡人」の一人としてムハンマドはナポレオンとならんで言及される（6, 200）。ポルフィーリイの応答も含めれば3回もムハンマドの名前が挙げられることには注目してよいだろう。ラスコーリニコフの問題の論文はポルフィーリイによると「犯罪遂行の行為は常に病気を伴う」（6, 198）という奇妙な説を主張しているという。さりげなく触れられるだけなので、その後の非凡人の議論に隠されて見過ごされがちだが、注意深くラスコーリニコフの思考の流れを追うなら、それは犯罪をもちこたえられなかった者が理性を奪われるという罰としての狂気のモチーフにつながる。しかし犯罪行為を自らに許す権利を持つ非凡人としてムハンマドやナポレオンの名前が羅列されることで、犯罪に伴う病気とは癲癇を指しているのではないかという連想が働くことも確かである。

数学者ソーニャ・コヴァレフスカヤの回想によれば、1865年にドストエフスキーは彼女たち姉妹に自分の病気について語っている。それによると初めて癲癇の発作を経験したのはカザフスタンでの兵役中であり、無神論者の知人と議論するうちに興奮したドストエフスキーが「神はある」と叫んで発作を起こしたという。興味深いのは発作の瞬間に「復活祭を祝う隣の教会の鐘が鳴り始めた」という説明である。耳鳴りは発作の前兆であり、しばしば鐘の音と混同される。その後でドストエフスキーはムハンマドについて言及している。

「あなた方のような健康な人たちは、発作の起ころうとする瞬間に私の感ずるような天福はとても想像できません」。彼は言った。「ムハンマドはコーランの中で自分は天国にいたと言っています。愚人やわからず屋は彼を嘘つきだとか詐欺師だとか呼びます。決してそうじゃない。ムハンマドは嘘を吐きません。彼は私のように癲癇を病んでいたのです。その発作の起っている間にはほんとうに天国にいたのです。私はこの天福が何秒つづくか、それとも何ヶ月つづくか言えないが、どんな幸福な生活をくれたってそれと取り代えっこはしません」<sup>146</sup>

<sup>146</sup> Ковалевская С. В. Из «Воспоминаний детства» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях

ムハンマドが天国に行ったという話は、『コーラン』の「夜の旅」の章に由来するイスラムの伝承に基づいている。預言者は天使ガブリエルに導かれてエルサレムに飛び、そこから七層の天界を巡ってメッカに戻るが、時間はほとんど経過していなかったという。ドストエフスキーは『白痴』の中でムイシキンに同じような癲癇の発作におけるエクスタシーを経験させている。

稲妻のように瞬間的に、生きている感覚と自己認識がほとんど十倍にも膨れ上がった。頭と心が不可思議な光に照らされる。狂おしさも、疑いも、迷いも、すべてがいちどきに静まり、清らに和合する喜びと望みに満ちた、理性と根本原因に満ちた至高の静謐の中に解消する。しかしこの瞬間、この閃光は、発作そのものが始まる最後の一秒の予兆に過ぎず（一秒以上つづくことはない）、それはもちろん耐えがたいものだった。(8, 188)

ドストエフスキーがコヴァレフスカヤ姉妹に語った際と同じように、ムイシキンのエクスタシー体験はすぐその後でムハンマドの「夜の旅」と比較されている。

「この瞬間にこそ**時はもうない**という不思議な言葉の意味が分かる気がする」。さらに笑いながらムイシキンはつけ加えた。「それはひっくり返した水がめの中身がこぼれない間に、癲癇者ムハンマドがアッラーの住まいを見て回ることができたというあの瞬間と同じなんだ」(8, 189)

このようにドストエフスキーは自ら体験した癲癇発作のエクスタシーをムハンマドのそれと同列に並べている。『悪霊』でもキリーロフの至高の瞬間の体験が、やはり癲癇やムハンマドの「夜の旅」と同一視されている。ただし「時はもうない」という『黙示録』の言葉を引用した後の「笑いながらムイシキンはつけ加えた」という表現に見えるとおり、ムハンマドとの比較はある種のイロニーによって限定されてもいる。アントノヴィチとの論争で、同じ癲癇者としてムハンマドを持ち出すことで自分の病気を弁護する文章を書きながら、結局は発表しなかった作家の微妙な心理と同じものが、「笑いながら」というイロニーに働いているように思える。

ドストエフスキーは癲癇の持病に対してアンビヴァレントな自意識を抱いていた。病気は流刑という受難のシンボルとなり、死や狂気の可能性でもって作家を脅かした一方で、借金逃れや執筆の遅れの言い訳や国外旅行のための名目としても用いられた。幼い息子アレクセイの癲癇発作による死（1878年）は精神疾患の遺伝説を想起させ、自責の念で作家を

---

современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.26-28; 『ソニーヤ・コヴァレフスカヤ自伝と追想』野上弥生子訳、岩波文庫、124-125頁。

苦しめたであろう。『カラマーゾフの兄弟』はその翌年に書き始められた。遺伝により世代が下るほどに病気が悪化するという「変質説」は19世紀中頃以降に広まったが、祖父がアルコール中毒者で母が狂人（ユロージヴィ）のスメルジャコフが癲癇を病むのはその典型である。「信心深い女たち」の章ではクリクーシャに続いて、自分の子供（やはりアレクセイという名）を失って悲しみに暮れる不幸な女性がゾシマ長老に慰めを求める場面がある<sup>147</sup>。

『カラマーゾフの兄弟』のクリクーシャ達には、「女性の神経病」、「働きたくないがための仮病」という相矛盾する解釈が与えられている。しかし小説の主なプロットにおいて彼女たちが関係するのは「信仰の危機」と「奇跡の治療」というモチーフの展開に対してであり、それは信仰と無神論という主要テーマに結びついている。

キリスト者ドストエフスキーにとってムハンマドは肯定的な人物像ではありえなかったはずだが、癲癇発作によってイスラム教開祖の宗教体験を説明する同時代の医学的言説は作家の関心を引いた。「詐欺師」「癲癇者」「宗教的法悦の体験者」といったムハンマドの矛盾したイメージは、ムイシュキン、キリーロフ、スメルジャコフ等の特異な両義的性格を形作るのに一役買った。ムハンマド、ナポレオン、シーザー等を例に挙げて天才と癲癇者の相関性を主張する言説は作家と同時代の医学文献（骨相学など）にも既に見られるが、世紀末のロンブローゾやニーチェに至ってその頂点に達することになる<sup>148</sup>。ドストエフスキーのムハンマド理解はその過程の中間点にあったと考えられる。

クリクーシャもムハンマドも文化史における複雑な表象の歴史を持っているが、それはヒステリー発作や悪魔憑きを含む歴史的な概念としての癲癇（倒れ病）のイメージの変遷と密接に関係している。人間は未知な対象を神秘的なものと捉えて畏怖したり、偽りのものとして嘲笑したりしがちである。結核や癌やエイズをめぐるイメージについてソントグが論じているように、病気にまつわりつく「隠喩」を除去して、病気を病気として直視することが、現代における正しい病気への関わり方であろう<sup>149</sup>。しかし文学研究において現代の論理を他の時代にそのまま持ち込むことは、イメージの豊穡さを失わせることにもなりかねない。病気は医学的現象であると同時に文化的現象でもある。クリクーシャ、ムハンマド、および癲癇に関係する多義的なイメージは、ドストエフスキーが創作の中でアンビヴァレントな自意識を表現する際に豊かな語彙を提供したのである。

---

<sup>147</sup> 本章の下敷きとした拙論ではクリクーシャと子供を失った母親を同一人物とみなしていたがそれは誤読である。越野剛「悪魔憑きとムハンマド：ドストエフスキーの癲癇研究の一環として」『ロシア語ロシア文学研究』第36号、2004年、17-24頁

<sup>148</sup> テムキン『てんかんの歴史』、下402-424。

<sup>149</sup> スーザン・ソントグ『隠喩としての病い・エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、みすず書房

## 第4章：19世紀ロシア文学とコレラ

コレラという病気が世界史の上に登場するのは19世紀になってからで、比較的新しい病気といえる。もともとはインドのベンガル地方の風土病で、イギリスによる植民地経営を通じて一気に世界的流行を見たとされる。大きな流行は19世紀には6回を数えるが、ヨーロッパに初めてコレラが来たのは1826-36年にかけての第2次パンデミーの時だった。インドに発したコレラは、ペルシアから中央アジアを経て、1829年8月にオレンブルクに到達した。30年9月にはモスクワ、31年6月にはベテルブルクが襲われる。その後、疫病はポーランドを通過し、西ヨーロッパに広がっていく。このときにロシアでは50万人が発病し、その半数近くが死亡したと推測されている<sup>150</sup>。くわしくは章末に挙げた19世紀のコレラ流行の概要を参照されたい。

本章では主として第2次パンデミーの時期に焦点をあわせて、文学・フォークロア・裁判記録・医学文献などを通して、同時代のロシアの人々が未知の疫病をどのように想像し理解したのかを明らかにする。コレラのイメージは政治的革命や民衆の暴動と結びつくことが多かったが、第3節ではドストエフスキーの『悪霊』におけるコレラがステレオタイプな政治的な病気のメタファーというだけに留まらず、独特の意味を提示していることを明らかにする。

### 4-1. プーシキンとコレラ

1830-31年にロシアの両首都を襲ったコレラにプーシキンは強い関心を示している。本節では、この時期に書かれた書簡や作品を分析し、疫病を前にした人間の行動を彼がどのようにイメージしたかを明らかにしたい。またプーシキンの創作に関連する範囲で、疫病を通じたロシアのイメージ、当時の医学におけるコレラ論についても触れる。

#### 4-1-1. 書簡と『コレラに関する覚書』

私が堪え忍ばねばならなかったゴタゴタなんて、貴方に数え上げてみせたのはその半分にもなりません。けれどわけもなくここにもぐり込んだのではありません。田舎に出発したとき、あんな心がすさんでいなかったなら、二駅自でモスクワに戻ったことでしょう。そこで私はコレラがニージニイを荒らしていると知ったのです。あの時は後戻りするなんて、思いもつきません。疫病よりもましなものは何も望みませんでした（11, 420）<sup>151</sup>。

<sup>150</sup> Rodelick E. McGrew, *Russia and the Cholera 1823-1832*. (Madison: University of Wisconsin Press, 1965), pp.4-5.

<sup>151</sup> *Пушкин А. С. Полн. собр. соч. М.;Л.: Изд-во АН СССР, 1937-1959*. 引用は（ ）内に巻数と頁数を記す。

1830年の9月1日、結婚祝いに父から贈られた領地を検分するため、プーシキンはボルジノに向けてモスクワを出立する。このときコレラはすでにヨーロッパロシアに進出し、ボルジノのあるニジェゴロド県でもコレラが発生していた。しかし引用した手紙にあるように、プーシキンは引き返す気はなかった。「ゴタゴタ」とは、叔父のヴァシーリーの死や、婚約者の母とのいさかいが原因で結婚話がいっこうに進まないことを指している。

ところがプーシキンと入れ違うように、モスクワにコレラが発生する。このニュースをプーシキンが知るのには、ボルジノに着いた後で、9月末になってからだった。彼はモスクワにいる婚約者のもとに戻ろうとするが、政府が設けた検疫線を越えられない。さらにコレラ対策の公務に就くよう任命され、ますますボルジノを離れることができなくなった。

結局プーシキンは3ヶ月あまりも田舎に閉じこめられることになる。しかしなぜか彼の創作欲は高まり、多くの作品が書かれた。これが後に有名な「ボルジノの秋」と呼ばれることになる。

モスクワでは1830年の9月から翌年の3月まで9千人余りが発病し、約5千人が死亡する。婚約者ナターリアの所在が分からずいらしていたプーシキンは、彼女がモスクワに留まったことを知ると、すぐに町を出るよう催促する手紙を出している。このころの手紙の多くで、彼が婚約者の安否を気遣っている様子が見て取れる。

プーシキンはナターリアの安否ばかり心配していたが、自分の命の危険を感じることはなかったのだろうか。グロムパフも指摘しているように<sup>152</sup>、ボルジノから友人や婚約者に宛てた手紙には深刻さは感じとれない。ナターリアから愛情のこもった手紙を受け取ったプーシキンは有頂天になって返事をしたためるが、そこではコレラが「いたってかわいい奴 *une très jolie pesonne*」(14, 111) と呼ばれている。10月29日付のプレトニョフ宛の手紙では、「悪魔は言い立てられているほど恐ろしいものではない。コレラはトルコ人の射撃ほど危険ではない」(14, 117) と書いて、友人達と切り離された状態の方がよほどつらいとこぼしている。11月4日付のデリヴィグ宛の手紙では、次のようなおどけた調子で「ボルジノの秋」の成果を報告している。

この秋は非常な豊作で、もしも君のつつましい従者が、コレラという名の十字軍、すなわちかの曳船人足どもによって運ばれたサラセン人の疫病のためにくたばらなかつたら、君の域である「文学新開」には吟遊詩人の歌がまる1年ひきもきらずに歌われることだろう(14, 121)。

しかし、ロシアに今まで存在したことの無い謎の疫病が迫る中で、プーシキンが不安を感じなかったはずはない。後に書かれた『コレラに関する覚書』では、自分の恐怖心について

---

<sup>152</sup> *Громбах С. М. Пушкин и медицина его времени. М., 1989. С. 206.*



の率直な描写を見ることができる<sup>153</sup>。4 ボルジノへ向かう途中で、プーシキンがコレラによって荒廃した定期市の悲惨な状態を眼にする。

道中でコレラに追い散らされたマカリエフの市場を見ました。悲惨な市場。捕まった女泥棒が逃げ出したようなものです。商品の半分を放り出し、儲けを数えるひまもなく。引き返すのは意気地がないように思えました。私は、きっと皆さんが決闘に赴くときのように、いまいましく思いながら、また、いやいやながら、旅を続けたのでした (12, 309)。

ここでプーシキンが自分の旅を決闘になぞらえているのは興味深い。決闘において臆病風を吹かせることは最大の恥とされていた。自分の命をあえて死の危険にさらすことによって、侮辱され傷ついた名誉を回復することが決闘の目的である。軍人を中心とする貴族階級では、死を恐れない勇気が大きな名誉として讃えられていた。英雄は戦争において多く生み出されるが、それは戦争が常に「死の危険」と隣り合わせの空間だからだ。決闘は「死の危険」を一時的に作り出すための擬似的な戦争、あるいは戦争の代用品だといえる。

プーシキンも同じ貴族社会に属していたが、身分は文官だったので、戦場を経験したことはなかった。そのためナポレオン戦争の英雄たちや、同世代の将校たちに対して引け目を感じていたふしがある。若い頃のプーシキンは何度も決闘騒ぎを起こしているが、これも勇気を示すことに対する執着心、あるいは臆病者とみなされるのではないかという強迫観念がさせたことだろう。

コレラを前にして道を引き返すのは、戦争における「敵前逃亡」と同じである。逆に、あえて伝染病の汚染地に足を踏み入れるのは、死の危険に身をさらすことであり、戦争や決闘と同じような名誉の獲得につながる。

一方で、危険の中でのこの平然とした態度は、演技されるものという側面を持つ。短編小説『その一発』の登場人物の一人、B 伯爵は、決闘に際して銃で狙われながらも、何食わぬ顔でサクランボをかじっている。これはプーシキンが自分の決闘から取ったエピソードといわれるが、どこか大げさで、芝居がかった調子を感じられる。芝居がかった態度ということでは、9月9日付プレトニョフ宛の手紙が関心を引く。

ただこのあたりに真性コレラが発生。こいつはすさまじい盆獣でね、そのうちボルジノ村へもやって来て、われわれみんなに噛みつくことだろう。そうなったらぼくもヴァシーレイ叔父さんのところへ行って、君に伝記でも書いてもらおうさ。かわいそうなヴァシーレイ叔父さん！彼の最後の言葉を知っているかい。ぼくが行ったとき、彼は人事不省におちいていた。が、正気に返ってぼくに気づくと、ちょっと悲しそうな顔をしてから、しばらく黙って、「カテーニンの論文は退屈だな！」、こうぼつりと言ったのだ。それだ

---

<sup>153</sup> この文章は詩人の生前には発表されなかった。オリジナルは無題であり、ここでは便宜的に『コレラに関する覚書』と呼ぶ。

けだった。どうだい、つまり潔白な戦士として、盾の上で、雄叫びを口に死んで行ったのだよ (14,112)。

人間の最期の言葉には常に芝居がかった色合いが付きまとうものだが、「退屈だな」というこの無頓着な言葉は、何かできすぎた映画の台詞のようでもある。戦場における名誉の戦死と比較されていることも興味深い。コレラによって明日にも死ぬかもしれない自分の状況が、叔父の死に際に重ねられていることも明らかだろう。

『ロトマンの『ロシア貴族』は、日常生活が芝居を模倣する例としてこのエピソードを取り上げ、こうした演劇志向はロマン主義に特徴的なものだったと述べている<sup>154</sup>。先にも紹介した『コレラに関する覚書』では恐怖心という本音が見えているが、それと比較すると手紙の演劇性・芝居がかった調子がより明らかになる。

#### 4-1-2. 小悲劇『ペスト流行時の酒盛り』と詩『英雄』

この節ではボルジノ滞在中のプーシキンが書いた作品の中から、コレラに関係の深い二つの作品を取り上げ、分析してみたい。『ペスト流行時の酒盛り』はプーシキンのオリジナルの作品ではなく、イギリスの作家ジョン・ウィルソンの『ベストの町 The City of Plague』(1816年)の一場面を翻案したものである。有名なダニエル・デフォーの『ベストの記録』と同じく、1665年のロンドンペストを題材にしている。プーシキンはこの作品のフランス語訳をボルジノに携行しており、折からのコレラ猖獗を目の当たりにして作品の構想を得たものと思われる。ベストという逃れようのない死を前にしてどういう態度をとるかという問題をめぐって、二人の人物の対立が作品の核になっている。一方の老司祭は、悔い改めと来世での救いという解決法を提示する。もう一方のワリシングムは、宗教的な救済を拒否し、疫病のさなかに宴会を開く。二人の対決は平行線に終わり、最終的な結論は出ないまま劇は幕を閉じる。理屈の上では司祭の方が筋を通しており、ワリシングムの言動は矛盾に充ちているが、プーシキンの共感は現実の不条理を受け入れることを拒むワリシングムに向けられている。こうした対立のモチーフはヨーロッパ文化史では普遍的なテーマであり、14世紀の黒死病を思い出すならボッカッチョ『デカメロン』のプロットは後者、「メメント・モリ」や「死の舞踏」のモチーフは前者に該当する。20世紀の文学ではカミュの『ペスト』(1947年)におけるタルーとパヌルー神父の対立に同様のテーマの緻密な展開が見られる。

ワリシングムは悪魔的な側面を持ったヒーローであり、「死を恐れない」というロマンチックな英雄像の必要条件を満たしている。それは劇中でワリシングムが歌う「ペスト賛歌 Гимн в честь Чумы」によく表れている。この歌はウィルソンの原作にはなく、プーシキン

---

<sup>154</sup> ユーリー・ロートマン『ロシア貴族』桑野降・望月哲男・渡辺雅司訳、筑摩書房、1997、250-52、284-86頁。

による全くの創作である。

Есть упоение в бою,	喜びに陶醉するは、戦闘のさなかに、
И бездны мрачной на краю,	くらき深淵のはしに、
И в разъяренном океане,	荒れ狂う海原に
Средь грозных волн и бурной тьмы,	恐ろしき怒涛と嵐の闇に、
И в аравийском урагане,	アラビアの砂嵐の内に、
И в дуновении Чумы.	そしてベストの息吹の中にあり。
Все, все, что гибелью грозит,	死の際にある全てのひとは
Для сердца смертного таит	人間の心に言い知れぬ、
Неизъясны наслажденья —	密かな快樂を隠すもの。
Бессмертья, может быть, залог!	これぞ、あるいは不死のしるし。
И счастлив тот, кто средь волненья	幸いなるかな、騒がしき中にも
Их обретаť и ведать мог.	それを見つけ、知るものよ。(7, 180-181)

戦争や暴風雨、疫病といった、死に近づく場所にこそ、最大の喜びがあるという逆説が述べられている。疫病のはびこる街路で宴会を張って楽しむ光景には、死に対して超然とするヒーローの理念が込められている。しかしこの歌は矛盾に満ちたワリシガムの性格の半分しか説明していない。司祭との論争のなかで、彼は次のように言う。

(...) я здесь удержан	(...) 私をここに引き留めるのは
Отчаяньем, воспоминаньем страшным,	絶望と、恐ろしい思い出と、
Сознаньем беззаконья моего,	己の背徳の自覚と、
И ужасом той мертвой пустоты,	我が家で直面する、
Которую в моем доме встречаю —	あの死の世界の空虚に対する恐怖と、
И новостью сих бешеных веселий,	そしてこの狂おしい歡樂の新奇さと、
И благодатным ядом этой чаши,	この杯の喜びを与える毒と、
И ласками (прости меня, господь)	墮落したが愛らしきひとの
Погибшего, но милого созданья...	愛撫 (主よ許したまえ) …。(7, 182)

歌で語られた部分と地の文で語られた部分は互いに矛盾している。ワリシガムであれ死ぬのが平気なはずはない。恐怖心を含めて複雑な感情をいだいているのであって、英雄的な言動は一種のポーズだと考えた方がいいのではないか。建て前としての英雄的な勇気と、本音としての人間的弱さともいえるだろう。しかしプーシキンはそうしたポーズ、演技性を積極的に肯定しているように思える。ワリシガムは原作では端役に過ぎないが、プーシキンの翻案によって、複雑に矛盾したヒーローとして再創造された。「死を恐れない英雄」と

いう人物像は、その性格が複雑でリアルなものであるほど、英雄を演じる人物という構造を持たざるをえない。プーシキンの英雄を見る目は、誉め称えると同時に、ある種のアイロニーを投げかけているといえる。

『英雄 Герой』はプーシキンのボルジノ滞在中に書かれ、モスクワのポゴージン宛に送られた。ポゴージンは1830年9月から翌年の1月まで、コレラの情報を主に伝える『モスクワ市情勢通報 Ведомости о состоянии города Москвы』という臨時の新聞を発行していた。プーシキンはこの新聞への掲載を考えていたようだが、ポゴージンには匿名で発表するよう頼んでいる(14, 121-122)。作品はポゴージンの新聞には載らず、翌年の『テレスコープ』第1号に掲載されたが、彼は約束を守り、プーシキンが死ぬまで詩の作者名を明かさなかった(3-2, 1221)。

この詩は最も英雄的な行為とは何かということを巡って、詩人とその友人がかわす対話という形式を取っている。ナポレオンがエジプト遠征の際にペストに苦しむ兵士たちを訪問して勇気づけたというエピソードを主題にしており、コレラのモスクワを訪れたニコライ1世の行為を暗に想起させるという仕掛けになっている。この出来事は宮廷画家のアントワーヌ＝ジャン・グロによって描き出され(「ヤッフアのペスト患者を訪れるナポレオン」、1804年)、ナポレオン伝説の一端を構成するエピソードとして神話化される<sup>155</sup>。一世を風靡した英雄が流刑先で死んでから1820年代にはいわゆる「ナポレオン崇拜」の熱が高揚するが、1830年ごろを境にこれに懐疑的な主張も力を持つようになる<sup>156</sup>。プーシキンの詩は、ペストの感染を恐れずに患者の手を握ってはげましたナポレオンの勇気を称える「詩人」と、それはでっちあげられた伝説にすぎないとする「友人」の意見が対比されている<sup>157</sup>。

Герой	英雄
Что есть истина?	真実は何か
Друг	友人
Да, слава в прихотях вольна. Как огненный язык, она По избранным главам летает, С одной сегодня исчезает	まったく栄光とは気まぐれにおいて自由なもの。 それは炎の舌のごとく 選ばれし者の頭を飛びめぐり、 今日そこから消えたと思えば、

<sup>155</sup> 鈴木杜機子『ナポレオン伝説の形成』筑摩書房、1994年、52-59頁。

<sup>156</sup> ロシア文化におけるナポレオンのイメージの変遷については以下を参照。Molly W. Wesling, *The Russian Representation of Napoleon: A Cultural Myth* (Ann Arbor: UMI, 1998)

<sup>157</sup> 作品における対話性に着目した次の論考を参照。浅岡宜彦「プーシキンの詩「英雄」論」『人文研究：大阪市立大学大学院文学研究科紀要』44-2号、1992年、43-58頁。

И на другой уже видна.  
За новизной бежать смиренно  
Народ бессмысленный привык;  
Но нам уж то чело священно,  
Над коим вспыхнул сей язык.  
На троне, на кровавом поле,  
Меж граждан на чреде иной  
Из сих избранных кто всех боле  
Твоею властвует душой?

別の頭の上に現れる。  
新しいものに従順に走るは  
道理を知らぬ民には慣れたこと、  
けれど、我らにとって尊きものは、  
かの炎の舌が頭上に燃えるその額。  
玉座、血塗られた戦場、  
ある種の分野の人物の中で、  
選ばれし者のうちで他の誰よりも  
君の心を支配するのは誰なのか。

Поэт 詩人

Все он, все он — пришлец сей бранный,  
Пред кем смирились цари,  
Сей ратник, вольностью венчанный,  
Исчезнувший, как тень зари.

彼、彼だけだ、皇帝たちも頭を垂れたという  
かの戦場の異端者、  
日暮れの影のように消えた、  
あの自由の冠を受けた武人。

Друг

Когда ж твой ум он поражает  
Своею чудною звездой?  
Тогда ль, как с Альпов он взирает  
На дно Италии святой;  
Тогда ли, как хватает знамя  
Иль жезл диктаторский; тогда ль,  
Как водит и кругом и вдаль  
Войны стремительное пламя,  
И пролетает ряд побед  
Над ним одна другой вослед;  
Тогда ль, как рать героя плещет  
Перед громадой пирамид,  
Иль, как Москва пустынно блещет,  
Его приемля, — и молчит?

友人

おのれの奇跡の星で  
いつ彼は君の頭を撃ったのか。  
アルプスから低みにある  
神聖イタリアを眺めたときなのか。  
戦旗を、あるいは独裁者の錫杖を  
手にしたときか。それとも  
手近に遠方に  
戦争の疾駆する炎をもたらし、  
次から次へと重ねられる  
勝利の山を駆け抜けたときなのか。  
かの英雄の軍勢が  
巨大なピラミッドに押し寄せたときなのか、  
あるいはモスクワが彼を受け入れながら  
無人のままに燃え、沈黙したときなのか。

Поэт

Нет, не у счастья на лоне  
Его я вижу, не в бою,  
Не зятем кесаря на троне;

詩人

違う、幸福の懷に抱かれる  
彼を見はしない、戦場でも、  
王座についた皇帝の女婿でもない。

Не там, где на скалу свою  
Сев, мучим казнию покоя,  
Осмеян прозвищем героя,  
Он угасает недвижим,  
Плащом закрывшись боевым.  
Не та картина предо мною!  
Одров я вижу длинный строй,  
Лежит на каждом труп живой,  
Клейменный мощною чумою,  
Царицею болезней... он,  
Не бранной смертью окружен,  
Нахмурясь ходит меж одрами  
И хладно руку жмет чуме  
И в погибающем уме  
Рождает бодрость... Небесами  
Клянусь: кто жизнь своей  
Играл пред сумрачным недугом,  
Чтоб ободрить угасший взор,  
Клянусь, тот будет небу другом,  
Каков бы ни был приговор  
Земли слепой...

Друг

Мечты поэта —

Историк строгий гонит вас!

Увы! его раздался глас,—

И где ж очарованье света!

Поэт

Да будет проклят правды свет,

Когда посредственности хладной,

Завистливой, к соблазну жадной,

Он угождает праздно! — Нет!

Тьмы низких истин мне дороже

Нас возвышающий обман...

断崖に腰かけ、  
安楽の刑に苦しみ、  
英雄のあだ名で辱められ、  
軍用マントに身を包んで、  
不動のまま消えゆくあの場所でもない。  
私が見るのはそんな光景ではない。  
長く列をなす病床を私は見る、  
どの床にも生ける屍が横たわる、  
猛々しきペスト、  
病の女王に刻印を押されて…彼は、  
戦とは異なる死に囲まれ、  
顔をしかめ、病床を行き  
そして平然とペストの手を握る、  
すると死にかけた意識の中で  
勇気が生まれる…。天にかけて  
誓おう。おのれの命を  
陰鬱な病を前にして弄び、  
輝きを失った眼差しを励まさんとする者は、  
誓って言うが、天上の友となろう、  
盲目の地上が  
どんな裁きを下そうとも…

友人

詩人の夢想だ。

厳格な歴史家は君らを追い出すだろう。

ああ。あの人の声が聞こえたというのに\*  
どこが世を魅了するというのだ。

\*ブリエンヌの回想録 (原注)

詩人

真実の光など呪われるがいい、

もしそれが冷淡で嫉妬深く

誘惑には弱い凡人を

徒に喜ばすだけならば。否。

私にとって貴きは、低俗な真実の闇よりも

僕らを高める偽りなのだ。

Оставь герою сердце! Что же  
Он будет без него? Тиран...

英雄に心を残してやれ。それがなければ  
彼は何者となろうか。暴君でしかない...

Друг  
Утешься. ....

友人  
落ち着きなよ....

29 сентября 1830

1830年9月29日

Москва

モスクワ (3-1, 252)

「平然とベストの手を握る」という言葉が死を恐れない態度を強調しているように、ここで称えられるナポレオンもこれまで分析してきた英雄のイメージに一致する。しかしこの対話詩では、懐疑的な友人がナポレオンを崇拝する詩人に対置されている。彼は、ナポレオンがベスト患者の手を触ったというのは作り話に過ぎないと反論する。「あの人の声が聞こえたというのに」はナポレオンの部下だったブリエンヌの回想録(1829年)を指しており、そこではこの有名なエピソードが実は存在しなかったと述べられていた。それに対する詩人の最終的な結論は、「卑しい真実の暗闇より、僕らを高めてくれる偽りの方がよい」というものだった。

詩の末尾にある1830年9月29日という日付はニコライ1世がコレラのさなかにモスクワを来訪した日に当たる。モスクワの状況を伝える同時代人フェルディナンド・クリスチンの書簡を見てみよう。

陛下の突然の来駕は、モスクワの全住民を喜ばせ、勇気づけた。陛下は臣民への愛を見事に示された。このような旅行は避けることもできたはずなのに、住民と危険をわかちあうためにやって来たのだ。しかしながら我々にとってかくも貴い陛下の存在が、我々の恐怖を強めることになるだろう。なぜなら陛下がモスクワ市内にいらしたこの3日間に、公表された報告を信じるなら、病気は増大し、さらに恐怖をあおるだけの厳しい予防策が取られている。昨日からモスクワは封鎖された。この12日間で6万人が都市を出ていった。今では新たな命令書なしにはモスクワに入ることも出ることもできない<sup>158</sup>。

ツアーリ来訪の知らせはモスクワ市民を熱狂させた。しかし、ニコライは直ちにモスクワ市の封鎖を命じ、都市内の地区も検疫線で遮断するように要求した。この厳しい処置は住民の不満を呼び、暴動が起きる可能性すらあったといわれる。クリスチンの皇帝への評価は肯定面と否定面に分かれている。

プーシキンの『英雄』では、ナポレオンがペスト患者を見舞ったことが、ニコライ1世がコレラのモスクワを訪れたことと重ねられている。しかしナポレオンの逸話は実際には行われなかった虚偽ではないかという疑いがかけられている。ツアーリの行為は評価するも

<sup>158</sup> Холера в Москве. Из писем Кристина к С. А. Бобринской // Русский архив, 1884, Кн.3. С.141.

の、そうした行為はあくまで象徴的政治的な意味を持つだけである。実際に取られた検疫線などの措置にはプーシキンも大きな不満を抱いていた。彼はこの詩の中で、英雄的行為を称えるとともに、あるアイロニーを投げかけているように思える。

「死を恐れない英雄」のイメージはプーシキンにとってあくまで尊いものだった。しかし、それは現実においては完全な形では存在しがたいものでもある。『ベスト流行時の酒盛り』では英雄は演技される側面を持っていたが、ここで問題になっているのは「つくられた英雄」のイメージだといえる。こうしたアイロニーの部分がニコライ1世の嫌疑を呼ぶことを恐れて、プーシキンは匿名で詩を発表することにしたのではないだろうか。ポゴージンが自分の新聞に詩を載せなかったのも、それと関係しているかも知れない。この詩は両義的な解釈が可能であり、英雄に対する賞賛とアイロニーが同居している。ナポレオンを称える詩人の立場も反対する友人の立場も、どちらもプーシキン自身の両義的な声を反映しているといえよう。

#### 4-1-3. 疫病とアジアイメージ

ヨーロッパでは伝染病は東つまりアジアから西へもたらされるという考えがあった。冒頭で述べたとおりコレラの世界的伝播はインドが発点だった。コレラは当初、ベストとよく混同されたが、そのベストも中東に発生源があると考えられている。

特にベストの時期に顕著になったことだが、患者の取り扱いに関して東と西では大きな違いが見られる。見市雅俊の研究によれば<sup>159</sup>、西欧では、病人の体を媒介に病気が伝達されるという接触伝染説に基づき、病気がそれ以上広まらないように、患者や患者の出た家、地区、都市を周囲から切り離し、隔離するという方策がとられた。公共の利益に基づく公衆衛生の思想の起源をここに見る人も多い。一方、東のイスラム社会では、ベスト患者の隔離は行われず、介護から埋葬に至るまで、普通の病人と同じように扱われていた。公共の利益よりもプライベートな人間関係が優先されていたともいえる。神のなす業に逆らうことは無意味だとするイスラム的宿命論を背景に見る考えもあるが、これはヨーロッパの側から見たステレオタイプであろう。

18世紀には西欧のベストがほぼ終息したのに比べ、イスラム世界では19世紀になってもベストの流行が反復されていた。これが不潔なアジアと清潔なヨーロッパという図式を生み出すことになる。

しかし、同じキリスト教文化圏に属すとはいえ、ロシア東欧地域ではベストが遅くまで続き、例えばモスクワでは18世紀の終わりにも大きな流行を経験している。コレラがヨーロッパに侵入する際には、ロシアがその通り道となった。1831年のポーランド蜂起に対して

---

<sup>159</sup> 見市雅俊『コレラの世界史』品文社、1994年、26-35頁。



差し向けられたロシア軍は、コレラを運ぶ要因のひとつになったとされる<sup>160</sup>。ポーランド鎮圧に対する西側からの批判には、ロシア・専制国家・アジア・野蛮・疫病といったイメージの連想が働いている。

一方、ドイツでは東ヨーロッパから来たポーランド人やユダヤ人の移民がコレラの病巣と見なされたという。また19世紀には大気中のオゾンの量が病気の発生率と関係があるという説があり、それによると東から吹く風にはオゾンが少ないため、もともとあるオゾンを奪って、病気を増加させるという<sup>161</sup>。

以上のように、東と西の対立は段階的・相対的なもので、明確な境界線があるわけではない。ヨーロッパとアジアの境目にあるロシア（及び東欧）は、非常に曖昧な立場にあったといえる。その点で、地理的には似た関係にあるオスマン帝国が、はっきりとアジアのイメージを持っていたのとは対照的である。

話をプーシキンに戻すと、コレラの前年、1829年に彼はカフカス地方への有名な従軍旅行を行い、そこでペストと遭遇している。そのときのプーシキンの対応は東と西の問題を考える上で非常に興味深い。後に書かれた『エルズルム紀行』（1836年）では、初めてアジアを訪れた印象として、「アジア的華美」は過去のことであって「今は、アジア的貧困、アジア的不潔と言うことができるし、華美はあるが、もちろんヨーロッパに属するものである」（8,477）と述べている。プーシキンもまた衛生面におけるヨーロッパの優位というイメージを共有していた。しかし、エルズルムに滞在するうちに、それが微妙に変化していく。軍隊勤務のなかったプーシキンがそれをコンプレックスにしていたと先にも述べたが、エルズルムではその必要がなかったにもかかわらず戦闘に参加し、勇敢に戦っている。しかし、戦場では死を恐れない勇気を示したプーシキンも、エルズルムで広がりだしたペストには怖じ気づく。ペスト患者を視察に行ったときのエピソードを見よう。

好奇心が打ち勝った。翌日になり私は医者と一緒にペスト患者のいるキャンプに出かけた。私は馬から下りず、風の中に立つよう用心した。（...）私は患者を腕に抱えて連れ出した二人のトルコ人に注意を向けた。二人はまるでペストが鼻かぜに他ならないとでもいうように、患者の服を脱がせたり、触ったりしていたのである。正直に言って、このような平然さを前にして私は自分のヨーロッパ式の憶病さが恥ずかしくなり、すぐに町へ引き返したのである（8-1,482）。

この後プーシキンは従軍旅行を早々に切り上げ、帰国の途についている。戦争での勇敢なふるまい方は知っていても、疫病にどう対処すべきか分からなかったのかも知れない。しかし、ペスト患者の世話をしていたトルコ人にプーシキンは強い感銘を受けた。1830年のボルジノ行きの際にはプーシキンもコレラを恐れない態度を見せたが、その理由について『コ

<sup>160</sup> McGrew, *Russia and the Cholera...* pp.100-105.

<sup>161</sup> 柿本昭人『健康と病のエピステーメー』ミネルヴァ書房、1991年、35-87、206-215頁。

レラに関する覚書』では次のように書かれている。

私は泰然自若として出かけましたが、この平然たる態度は私がアジア人たちの間に滞在していたことによって身についたものであります。アジア人たちは運を天にまかせ、またある程度の予防に頼って、ペストを恐れませんが、私の想像では、コレラとペストとは悲歌と賛歌のごとき相互関係にありました(12, 309)。

西ヨーロッパの知識人であれば侮蔑の対象であつたらうアジア的宿命論に、プーシキンはある共感を寄せているように見える。プーシキンが抱いた英雄像、疫病を前にして死を恐れない平然とした態度というイメージに、アジアの影響が見られるのは興味深い。

#### 4-1-4. コレラと同時代の医学

コレラと勇気という問題をいろいろと論じてきたが、当時の医者達の中には、臆病風にふかれたものはコレラにかかりやすいという見解があつたことを最後に紹介しておきたい。コレラの病因については大別して二つの説があつた。ひとつは患者の体から病気が伝わるという接触伝染説で、ペストがその代表的な病気と見なされていた。政府による交通網の遮断や患者の隔離はこの説を根拠としている。もうひとつは大気汚染説で、ミアズマと呼ばれる毒物が空气中を伝わって病気を引き起こすと考える。この説に立つ人は政府の措置に批判的であることが多く、プーシキンも基本的にはこの立場だつた。

しかし、コレラ自体が未知の病気だつたこともあり、病気の原因に対する明確な答はなかつた。飲食物、温度、湿度、大気や地面の電磁気の状態など、ありとあらゆるものが病因として考えられた。『テレスコープ』誌に掲載されたコレラに関する論文には次のような言葉が見える。

実際に、臆病な人、小心者は、勇気と不屈さを持ってこの国民的不幸を耐え抜く人々よりも、コレラにかかりやすかつた<sup>162</sup>。(…)コレラになりやすい内的条件のうち、指摘すべきなのは、(a)感化をうける能力の高揚した状態での、感化への抵抗力の弱さ。従つて第一にコレラにかかりやすいのは、感受性が強く、気の弱い臆病な人である<sup>163</sup>。

この論文の基本的な立場は大気汚染説であり、臆病風は副次的要因として挙げられているにすぎない。しかし、同じような言説は同時代の文献に数多く見られる。コレラという言葉は「胆汁の流出」を意味するギリシア語から来ている。伝統的な体液説の考えによれば、

<sup>162</sup> Ловецкий А. Свойства и происхождение зараз вообще и в особенности холеры. // Телескоп, 1831, №8. С. 515.

<sup>163</sup> Ловецкий. Свойства и происхождение... С. 527. この記述は第2章で論じたメスメリズム(催眠術)にかかりやすい人間の特徴と似ている。

胆汁質 (choleric) は気性の激しい、怒りやすい性格とされる。怒りっぽい性格と臆病な性格は結びつかないようだが、怒りも恐怖もどちらも強い感情にとらわれた状態であり、それが病気を引き起こすと想像されたのだろう<sup>164</sup>。

臆病風原因説はプーシキンも知っていた。1830年にボルジノから発送されたヴェルストフスキイ宛の手紙には、コレラに対する処方として「塩素水で入浴し、ハッカ水を飲み、そしてザクレフスキー伯爵[当時の内務大臣]の指示に従い、憂鬱にひたらないこと」(14, 128)と書かれている。

また、同時代人のミハイル・マカロフの回想によると、ヴァシーリイ・プーシキンが死んだとき、弔いにやってきた詩人のミハイル・ドミートリエフが、死因がコレラではないかと恐れて死体に近寄らないことがあった。

アレクサンドル・プーシキンにはコレラには接触伝染性はないと言い張り、私に向かつて、[あなたは医者たちの近くで勤務しているから、不思議ではないでしょう。医者たちだってコレラが何なのかすぐに分かるわけではないですよ。この場合の唯一の薬は勇気、勇気だけで、他には何もありません]と言った。私はほぼ同じ事を言っているギリデブラントから聞いた見解を教えてやった。「ああ、ギリデブラントのような人は少ないのだよ」とプーシキンは言った<sup>165</sup>。

先に述べたとおり、プーシキンの意見は大気汚染説だったので、臆病風原因説をどのくらい本気で信じていたのかは分からない。しかし、作品や書簡に見られる、恐怖心を外に出さないこと、勇気の演出へのこだわりを考えると、興味深いものがある。余談だが、先のドミートリエフは、この後で本当にコレラにかかり、生死の境をさまよったという<sup>166</sup>。臆病風説も彼に関しては正しかったのかも知れない。

コレラの経験は、プーシキンの内面に複雑な屈折を生み出したと思われる。多くの伝記作者の中で、特にユーリイ・ロトマンが「ボルジノの秋」の創作欲とコレラの関係に着目して、戦争や疫病など、死に近い危険な状況こそがプーシキンのインスピレーションを高めたと見ている。

ボルジノの一人住まいの中で、もうひとつプーシキンを魅惑するものがあった。それは穏当なものでは全くない。死がそばに潜んでいた。周辺をコレラが横行していたのだ。危険の感覚が彼を興奮させ、楽しませ、刺激した。それはほんの2年前に軍隊が進軍中のエルズルムに旅行したときに、二重の脅威(ベストと戦争)がプーシキンを陽気づけ、興奮させたのと同じだった。プーシキンは危険やリスクを好んだ。危

<sup>164</sup> 見市雅俊『コレラの世界史』、52-56頁。

<sup>165</sup> Макаров М. Н. Александр Сергеевич Пушкин в детстве (Из записок о моем знакомстве) // А. С. Пушкин в воспоминаниях современников. Т.1. М., 1974. С.57.

<sup>166</sup> Дмитриев М. А. Главы из воспоминаний моей жизни. М., 1998. С.346.

陰の存在は彼を揺さぶり、創作意欲をそそった<sup>167</sup>。

プーシキンの関心を呼んだのは、極限状況の中で人間がどのように振る舞うかということである。その際に示された理想的な規範は「死を恐れずに平然と振る舞う」という英雄像だった。しかし、それは現実には得難いものである。プーシキンは理想を理想として高く称えながらも、同時に冷めた眼でアイロニーを交えてもいる。全般に作品においても実生活においても、彼の示すヒーロー像は、芝居がかった、演技を志向するものだといえる。演技的であるということは、建て前と本音で矛盾する人間の姿を全一的に捉える試みともいえるのではないだろうか。ここに若い頃の自意識過剰な英雄指向から脱皮したプーシキンの姿を見ることができるようと思われる。

#### 4-2. コレラ暴動の文化史：病気・ナロード・ツァーリ

1830-31年にヨーロッパロシアで猛威を振るったコレラは民衆の間にパニックを引き起こし、セバストポリ、タンボフ、ペテルブルグ等で次々と暴動が発生した。特に1831年7月末スターラヤ・ルッサを中心とするノブゴロド県の屯田兵地（военные поселения）で始まったそれは、プガチョフ以降では最大規模の民衆叛乱となった。当時コレラの検疫線で外部と遮断されたツァールスコエ・セローにいたプーシキンは、この事件に非常な関心を寄せ、1831年8月3日付のヴァーゼムスキイ宛の書簡の大半を事件の詳細にあてている。「ノブゴロドの屯田兵地では百人以上の将官、連隊長、士官が、むきだしの憎悪のもとで斬り殺された。暴徒は彼らを鞭打ち、頬を殴り、愚弄し、家々を略奪し、婦人たちを強姦した」（14, 204）。暴動の経緯は7月26日および29日の詩人の日記にも詳述されている。民衆の叛乱・暴力への関心は、後年のプガチョフを題材とした創作へとプーシキンを導いていく。

本節では、ロシア文化史において「病気」「ナロード」「ツァーリ」という三つのキーワードが織り成す複雑な構造を、様々な資料をもとにして明らかにする。まずコレラと暴力の中に現れた民衆の世界観と想像力を、いくつかの史料やフォークロア文献をもとに分析し、次いで、コレラ暴動にからめて、ロシア文化史におけるナロードとツァーリのイメージの二重性の問題を考える。その際に議論の手がかりとなるのは、『ペスト流行時の酒盛り』『英雄』から『大尉の娘』『プガチョフ叛乱史』に至るプーシキンの創作と、マクシーモフの小説『検疫』およびツヴェターエヴァの評論である。

##### 4-2-1. ペテルブルグのコレラ暴動

1831年6月15日、首都ペテルブルグで最初のコレラ患者が発生し、都市民の緊張が一気

---

<sup>167</sup> Лотман Ю. М. Биография писателя: Пушкин. Л., 1981. С. 183-184.

に高まった。検疫線による移動の制限や、病院への患者の強制的な移送といった政府当局の措置に対する不満が、疫病への恐怖と重なり合う。6月21日は日曜日で、コレラを免れるための祈りと十字架行列（крестный ход）が教会によって組織された。しかし儀礼が終わっても集まった群衆は解散せず、それが暴動の発端となった。ロジェストヴェンスカヤ区にあったコレラ病院が襲撃されるが、これは失敗に終わる。それでも勢いの衰えない暴徒たちは翌22日に、今度はセンナヤ広場の病院に突入し、ドイツ人医師らを虐殺し、患者を解放した。事態を重く見たニコライ1世はペテルゴフから首都に駆けつけ、23日にセンナヤ広場で演説を行い、暴徒たちを何とか鎮めることができた。歴史家アルカジイ・プパレフはこの時期に生じたペテルブルグでのコレラがらみの刑事事件に関する貴重な記録を残している。そのいくつかを紹介しよう<sup>168</sup>。

①6月21日、ロジェストヴェンスカヤ区での暴動の際、農民メリニコフが所有する付近の売店に（職務怠慢と不品行のために役所をくびになった）元九等官ナウモフが酩酊状態で訪れ、店主の子供（12才）をコレラだといって連れ去ろうとした。警察は同時刻の病院襲撃事件で彼が群衆を扇動したのではないかと疑った。翌年2月にナウモフは釈放されたが、飲酒を止めて就職するよう厳しいおとがめを受けた。

②6月24日のイヴァンの祭日に御者街（Ямская словода）で暴動が企まれているという噂が当局に伝わった。十等官クルペンニコフが騒動に巻き込まれ、携帯していたコレラ予防用の酢の小瓶を毒薬と勘違いされてリンチを受ける。翌朝には街頭で病人をコレラだと診断した医師コストウイレフが御者達のリンチにあう。

③6月29日はペテロ・パウロの祭日にあたり、ナルフスカヤ区の寡婦バルビの家で小さな集まりがあった。その際フィン人の宿営者フレイマンが、28日にツアーリが狙撃されたし、コレラの暴動はまだまだ拡大するという噂をまくし立てた。出席者の一人が密告したためフレイマンが逮捕されたのはもちろんだが、女主人のバルビまでが密告しなかった罪を問われた。

④同日の夜、農奴身分の木工職人ミハイロフが、カレートナヤ区の路上で酔っぱらい、歩哨中の退役砲兵下士官（фейерверкер）アチャノフに「俺はコレラだから捕まえてくれ」と叫んだ。なだめようとする老人にミハイロフは、ポーランド人から勲章を貰って俺たちを毒殺しようとしていると文句をつけ、勲章をはぎ取って暴れ、取り押さえられた。翌年、彼は鞭打ち30回の罰を受けた。

⑤7月2日、第二アドミラルテイスカヤ区の売店で、九等官ルドニェフが店を出た後で、売り子のステパノフがパン棚に怪しい白い粉が散らばっているのを発見し、追いかけてルドニェフを捕まえる。群衆は興奮し、被疑者が留置所に連れて行かれるまで後を追ひ、解散し

---

<sup>168</sup> Пуларев А. Г. Холерный месяц в С.-Петербурге, июнь 1831 г. // Русская старина. 1884. Т. 44. С. 401-416; 1885. Т. 47. С. 69-86.

ようとしなかった。検査の結果、粉から毒物は発見されず、今度は扇動の罪でステパノフが逮捕された。

こうした事件の登場人物は、下級役人、農村からの出稼ぎ人、手工業者、御者、門番、小商人、町人（мещанин）などの中・下層民である。日曜日や祭日に人々が集まる教会儀礼や縁日（гуляние）が、そのまま暴動に移行することも特徴的である。多くの事例が祝日のお祭り気分や酩酊と結びついている。疫病という非常事態下では社会経済的な矛盾が極端な形で現れ、上述のような中・下層の人々が最も打撃を被りやすい。警察や病院など目に見える対象に向けて不満が鬱積し、それが祝祭的な時空間において暴力の形をとって噴出する。

その際に重要なのは、デマや噂話による情報の伝播が、人々の意識を暴動に向けて準備したことである。コレラという病気は実際には存在せず、警察や医者健康な人々をさらっては殺害しているという噂が広まり、暴動の際に病院が真っ先に襲撃の対象となる原因になった。何者かによって毒がまかれているという噂も根強く、③のクルペンニコフや⑤のルドニェフが毒物の携帯を疑われたのもそのせいである。災厄を目に見えない病気のせいにするよりも、誰かを毒殺犯人を仕立て上げる方が分かりやすく、噂となって広がりやすい。コレラは19世紀になって初めて世界中に知られるようになった新しい病気であり、伝染病と細菌の関係もまだ知られていなかった。

ただし、回想録や書簡などの文献は毒殺説について触れながらも、自分は批判的な見解をとっているのが普通である。7月6日のチャアダーエフ宛の書簡でプーシキンは「ペテルブルグでは毒殺が行われていると民衆（народ）は想像している。新聞は躍起になって教訓やら厳粛な保証やらを垂れているが、残念ながら民衆は文盲なので、流血の事態がいつ何時繰り返されないとも限らない」（14, 430）と書いている。憲兵長官ベンケンドルフも、特に平民層（простонародье）が「健康を守るために取られたあらゆる措置、警察の監視の強化、都市の封鎖、コレラにかかった者を病院で世話することまでも計画的な毒殺とみなし始めた」と書いている<sup>169</sup>。貴族・教養階級に属する彼らは毒殺の噂に惑わされる人々を「民衆 народ」「平民 простолюды」「賤民 чернь」などと呼んで自分たちからはっきり距離を置いて区別している。両者の相違は新聞・雑誌を読むか、噂話を聞き語るかという情報伝達手段の違いでもあり、毒殺説は明らかに後者の経路を伝って伝播していった。

とはいえ識字階級の間でも様々な噂話が語られていた。9月2日付のナシヨーキンの手紙によると、モスクワではプーシキンが死んだという噂が広まっていたという（14, 218）。誰それがコレラで死んだらしいというのは、この時期における人々の主要な話題のひとつだった。プーシキンも常日頃からへボ詩人と馬鹿にしていたドミトリー・フヴォストフがコレラで死んだらしいと7月22日付の手紙に書いているが（14, 198）、二週間後にはそれが間違いだったことを「心からの遺憾の念とともに」知ることとなる（14, 206）。

<sup>169</sup> Щильдер Н. Император Николай I в 1830-1831 гг. // Русская старина. 1896. Т. 88. С. 87-88.

ミハイロフスコエ村におけるプーシキンの隣人プラスコヴィヤ・オシポヴァは、ポーランドでの戦争中にコレラで死んだコンスタンチン大公の遺体が首都に送られる途上、至るところで病気を発生させたという怪しげな話を伝えている(14, 440)。彼女はコレラの接触伝染説を否定していたはずなのだが(14, 432)。当時のマスメディアは現代とは比較にならないほど貧弱だったし、コレラ検疫線のせいで郵便も遅れがちだった(14, 434)。前年の1830年にボルジノにいたプーシキンは、妻のいるモスクワでコレラが発生した際に彼女の消息がなかなか伝わらず、苛立った手紙を何通も書いている。信憑性のある情報が数少ない中で、噂が重要な役割を果たしたのはむしろ当然といえる。

毒殺説において犯人と見なされたのは警察と医者、それと外国人だったが、とりわけスケープゴートにされたのはポーランド人である。1830-31年にはロシア帝国の支配下にあったポーランドで反乱が起こり、ロシア軍との間で戦争状態にあったため、ポーランド人が毒をまいているという噂は受け入れられやすかった。プパレフの資料に戻るなら、④でアニャノフ老人がポーランドのまわし者と言いがかりを付けられたのにはそうした背景がある。ポーランド人のジャーナリスト、オシプ・プシェツワフスキの回想によると、夜になるとポーランド人が菜園に毒をまいたり、船を雇ってネヴァ川に大量の砒素を流したりするという噂もあったという。「ペテルブルグのポーランド人は悲しむべき立場に置かれていた。彼らはロシア人の家庭に行くことを止めてしまった。主婦が大テーブルに茶を出す際に、ポーランド人から目を離さず、砂糖壺、クリーム、クッキーを離れたところに置くようなことがあったからだ」とも書かれている<sup>170</sup>。

暴動を引き起こす原因として当局も噂話を重要視していた。③の例で暴動の噂話を披露して逮捕されたフィン人のフレイマンは、露店の売り子ヴィノグラドフから安食堂で聞いたと語り、ヴィノグラドフは露店の所有者、町人ソフロノフから聞いたといったが、ソフロノフは話を否定し、捜査の糸はそこで切れてしまった。①の元役人ナウモフも警察が病院で患者を毒殺しているという噂を誰かから聞かなかったか尋問されている。

#### 4-2-2. フォークロアの中のコレラ

フォークロアの世界では病気がしばしば超自然の存在として人格化された。例えばマラリア(лихорадка)は12人姉妹として表され、それぞれの名前は病気の症状と結びついている。例を挙げるなら Тряся, Трясовица は震え、Огня, Огниха は熱、Ледея は寒気、Гнетя は息苦しさ、Грыкуша は膿の混じった咳、Глухя は耳詰まり、Пухля は浮腫、Желтя は黄疸、Бессониha は不眠の原因となる。多くの伝承で彼女たちは預言者ヨハネを殺したヘロデ王の娘たちとされる<sup>171</sup>。

<sup>170</sup> Воспоминания О. А. Пржецлавского // Русская старина. 1874. Т. 11 С. 695-698.

<sup>171</sup> Попов Г. И. Русская народно-бытовая медицина. СПб., 1903. С.17-18; Новичкова Т. А. Русский демонологический словарь. СПб., 1995. С. 343-352.

天然痘 (оспа) は、目玉の代わりに大きな疱瘡を持つ女性の姿で現れる。他の病気と違って、天然痘は恐れられると同時に敬意の対象ともなり、オспа・イヴァノヴナと父称を付けて呼ばれることもある。人々は贈り物を持って患者を訪れ、自分たちの家に天然痘を招待しようとした。患者と同じ風呂に子供を入れたり、同じ食べ物を与えたりすることもあった<sup>172</sup>。弱い菌によって耐性をつける種痘の原理を、知らず知らずのうちに利用していたとも考えられる。

ペスト (чума) は 19 世紀には比較的まれな病気になっていたが、過去の黒死病の凄惨な記憶はフォークロアの中に残っている。テレク川沿いのコサックの伝承によると、人間の頽廢に怒った神は罰として、一人のふしだらな女性を選びペストをもたらす妖怪に変えた。彼女は決して死ぬことができず、永遠に世界をさまよいつつ疫病を人々にもたらし続けることになったという<sup>173</sup>。ペストは白い服をまとい、髪を振り乱した背の高い女性の姿で現れる。彼女はしばしば自分を背負ってどこかへ連れて行くように人に命じることがある。彼女が赤いハンカチを振るとそこは必ず死者が出る。そんな彼女も不浄な存在の常として犬には弱い。あるとき農夫が干し草の山で昼寝をしていると、ペストが犬の群に追われてきた。彼女は梯子の上に逃れたが、農夫はこっそり忍び寄ってペストを突き落とした。彼女は指を振って脅す身ぶりをしてから姿を消したが、その時から男は足の震えが止まらなくなった<sup>174</sup>。

コレラはペストの形象を多く受け継ぎ、女性・老婆の姿をとることが多い。道端で馬車を呼び止めて、村まで連れて行ってもらうと、そこで病気を発生させる。1892 年カルーガ県でコレラが発生した際、次のような噂話が広がったという。ある農夫が馬車を走らせていると、自分を呼び止める声がある。

「待ってくれよ、おまえさん、わしを乗せて行っておくれ」。農夫が振り返ると、痩せた弱々しい婆さんが追いかけてくる。上衣はボロボロで、頭巾からはみ出た髪の毛が風に揺れ、体中がびしょぬれになっている。農夫は老婆が可哀想になり、馬を止めると、馬車に老婆を乗せてやった。

「ありがとさんよ」老婆は言った。「あんたは私の役に立ってくれたから、私もあんたの役に立ってやろう」

「何の役に立ってくれるんだい、婆さんよ」

「私の正体はコレラだからね。村に着いたら井戸という井戸に毒を入れてやるから、水を飲んだ奴は病気にかかるってわけさ。あんたは家族のために川の水を汲んでやりな。病気が過ぎ去るまで、そこには毒を入れないから」

農夫が老婆を見ると、彼女は黒く、恐ろしい姿をし、目は炭火のように燃えている。男は考えた——正体を明かしたのは幸いだ、婆さん魔女、あんたをもてなしてやろう。老婆を家に連れてくると、ウォッカを

<sup>172</sup> Власова М. Русские суеверия: энциклопедический словарь. СПб., 1998. С. 381-383;  
Новичкова Т. А. Русский демонологический словарь. С. 458-459.

<sup>173</sup> Новичкова Т. А. Русский демонологический словарь. С. 615-616.

<sup>174</sup> Афанасьев А. Н. Поэтические воззрения славян на природу. М., 1995. Т. 3. С. 55-57.



持ってきて御馳走した。彼女はペチカの上で横になり、いびきを立て始めた。農夫は斧を取って、首筋に喰らわせようと忍び寄り、一息に首を切り落とした。見ると、毒の小瓶を体中に身につけている。次の日、農夫は郷役所に老婆を見せに行った。調べが終わると、褒美に百ルーブルが与えられた<sup>175</sup>。

コレラに限らず、ロシアでは病気が女性の姿で表されることが多い。特にペストはスラブ語世界では共通して女性のイメージを持つようだ。その理由のひとつは病気を表す名詞が女性形であるためだが、アフナーシエフによればペストには мор という男性形の同義語があるにもかかわらず、詩的な語りでは女性形が用いられることが多いという<sup>176</sup>。

伝染病の侵入を防ぐために、農村では「畦廻し опахивание」が行われた。この儀式を行うのも主として女性だった。夜中に女性が集まって犁を引き、村の周りを畦で囲む。するとそれが魔法陣の役割を果たし、疫病は村には入ってこられない。その際に女性が白い服を着たり、髪をあらわにしたりする場合があります。追い出す対象であるはずのコレラやペストの女性像と一致していて興味深い。畦廻しの際に出会った者は、それが司祭であってもコレラが化けている可能性があるので、捕まえて打ちのめすという記述もある。他に疫病への生け贄として人や動物を生き埋めにもすることもあった<sup>177</sup>。ちなみに『静かなるドン』の冒頭でメレホフ家の祖母にあたる女性が魔女として生き埋めにされそうになるが、これもコレラの災いを免れる意味合いがあった。

以上で紹介したフォークロア文献は古くても 19 世紀後半のものが多く、1830-31 年のコレラを人々が同じように想像したかどうか、確証はない。その点で興味深いのが、アレクサンドル・オルロフという作家が 1830 年に書いた『ペストとコレラの出会』という小品である。スクドウモフ（知恵足らず）とクルチニン（悲しがり）という二人の田舎者がモスクワ見物に出かける途上、恐ろしい形相の女性たちに出会う。「女っていうやつは、どこでいつ会っても普通じゃない連中だけど、今度のは冗談で済むようなものではなかった。〈…〉一人には数千の翼が、一人には数千の足があった。両者とも頭は蛇で覆われ、何でも呑み込もうとする喉を四方に向けて開いている。一人目の女は目が落ちくぼみ、死人のように赤黒く、ひきつるような動きをし、彼女の破滅的な性質を印づけていた。その眼差しは死を招くものだった」。一人目の詳しく特徴を描写されている方がコレラである。「数千の翼」はコレラが瘴気（ミアズマ）となって空気中を伝わるという説を、一方「数千の足」はペストが人から人へ「接触伝染」（コンタギオン）するという通説を反映している。コレラが接触伝染する病気がどうかは、交通路に検疫線を引く問題とも関わり、大きな論争点になっていたの

<sup>175</sup> Попов Г. И. Русская народно-бытовая медицина. С. 20-21.

<sup>176</sup> Афанасьев А. Н. Поэтические воззрения славян на природу. С. 54, 56 ; 栗原成郎『吸血鬼伝説』河出文庫、1995 年、133-160 頁。

<sup>177</sup> Власова М. Русские суеверия: энциклопедический словарь. С. 520-521 ; 東欧の事例については、栗原成郎『吸血鬼伝説』、153 頁を参照。「畦廻し」の訳語はここから借用させていただいた。白石治郎『ロシアの神々と民間信仰』彩流社、1997 年。

は前節でも示した通りである。「落ちくぼんだ目」や「ひきつるような動き」はコレラ患者の典型的な症状である。ペストは自分が60年前にモスクワで災厄を起こしたことを誇るが、今ではペストの正体が明らかにされてしまった（接触伝染）ことを嘆き、コレラについて人々は何も知らないが、おまえは何者なのかと問いかける<sup>178</sup>。

コレラやペストが女性の怪物として描写されている点は、フォークロアと一致している。オルロフは、文学史上ではブルガーリンのベストセラー小説『イヴァン・ヴイジギン』の続編を勝手に創作し、プーシキンがそれを逆手にとってブルガーリンをからかう材料に用いたことで記憶されているだけの、独創性のない三流の小説家である。しかし独創性の欠如は、彼の用いる病気のイメージが通俗性の強い、民衆の想像力に近いものである可能性を示唆している。オルロフの作品では、伝染病は不道德な人々を罰するために神が世に送ったものだとして説明されているが、これもフォークロアと一致している。ただしフォークロア以外にも、あらゆる抽象的概念が登場人物として人格化される古典主義的なアレゴリー文学の伝統にも類似した点があり、双方を考慮に入れる必要があるだろう。

#### 4-2-3. 民衆の暴力とコレラ

ここまでコレラを通じた民衆の想像力・世界観を分析してきたが、次はやはりコレラを媒介にして、ロシア文化史における民衆のイメージを考えてみたい。

20世紀の作家ヴラジーミル・マクシーモフの小説『検疫』（1973年）はコレラが発生したために停車させられた列車の中で乗客たちが酒を酌みかわし、現代史の暗部に触れるような話を順繰りに物語るという「ソ連版デカメロン」小説である<sup>179</sup>。一方で主人公フラモフが乗客の話の合間に見る夢は、遠いキエフルーシからロシア革命にまで至る彼の先祖たちの物語であり、これが作品の歴史的な縦糸となっている。その夢のひとつが冒頭でも触れた1831年のスターラヤ・ルッサにおける「民衆の暴動 народный террор」の克明な描写となっている（30章）。

この章はフラモフの見る他の夢と比べて、分量の多さ、詳細な記述、残酷な暴力の描写が際立っており、一見したところ何のために作品の中心に置かれているのか理解に苦しむほどである。スターラヤ・ルッサでは実際にはコレラが発生していないにもかかわらずパニックが生じ、暴徒と化した民衆が貴族・将校たちを殺戮していく。リンチを受けて動けなくなった青年は通りがかった女に一杯の水を乞うが、女は青年の口に砂を押し込み足で踏みつける。語り手（フラモフの先祖）は凄惨な状況に対して「いかにしてこれを説明すべきだろうか」と問いかけるだけである。権力側の暴徒に対する制裁も残忍なもので、「その場で処

<sup>178</sup> Орлов А. Встреча Чумы с Холерой. М., 1830. С. 3-5.

<sup>179</sup> 『検疫』は1973年に国外で出版された。政治的迫害にあったマクシーモフは1974年に亡命することになる。

刑される方がまし」のような列問答刑が執行される<sup>180</sup>。

支配者だけが暴力的なのではなく、支配される民衆も同じ程度に暴力的でありうる。苦しみを引き受ける従順な民衆と、残酷で暴力的な民衆という矛盾が作品全体を貫いている。しかし、あらゆる罪悪と流血の歴史が語られる中で、「青い帆 голубые паруса」に象徴される聖なるロシアとその救済のイメージが作品の下を静かに流れており、小説の最後の風景に溶け込んでいく。深い罪を犯した者が聖人になるというモチーフをロシア全体に当てはめたのだとも考えられる。

ロシアのナロード像のこうした二重性は、事件当時スターラヤ・ルッサにいた作家ニコライ・コンシンがプーシキンに送った手紙にもよく表現されている。「善良なるロシアの民衆は冷酷さにおいて何とすさまじいことだ。情けをかけるかと思えば人を拷問にかけ、閣下殿と敬うかと思えば棍棒で殴りつけ、それが一緒くたなんだ。くそつたれ、こんなことが他にあるだろうか」(14, 216)

1830-31年はコレラ暴動の他にも、フランスの七月革命、ベルギーの独立革命、ポーランドの反乱が次々と発生し、帝政ロシアにも衝撃を与えた時期である。ニコライ1世はセンナヤ広場の暴徒たちに「おまえたちはフランス人やポーランド人の真似をするのか」と問いかけている<sup>181</sup>。病気は革命や無神論のメタファーとして使用される場合がある。マクシーモフの小説では、東から侵入してくるコレラに対して、ヨーロッパから迫る革命が「精神のコレラ холера моральная」と呼ばれている<sup>182</sup>。ドストエフスキーの『罪と罰』のエピローグで主人公が見る伝染病の夢もまたロシアを冒す西欧的个人主義のメタファーだった。コレラ暴動の暴徒を病気にかかった民衆と見なせば、ナロード像の二重性の矛盾は解決し、健康な民衆という貴族・知識人が抱いていた理想像は保たれる。それは単純で乱暴なイメージだが、社会の多くの部分で通俗的な了解を得ていたと推測される。

#### 4-2-4. ツァーリ幻想とコレラ

貴族・知識人階級が「残酷で善良なナロード」という矛盾を、西欧の無神論・自由思想に毒された病気のナロードと、そうではない健康なナロードと区別することで回避したのと同じような構造が、民衆がツァーリに抱いていたイメージにも見ることができる。

1831年6月23日、センナヤ広場で群衆を前にしたニコライ1世の演説は、暴動を鎮めるのに驚くべき効果を発揮した。興奮した群衆を刺激しないため馬車一台のみで暴徒たちの中に入った皇帝は、詩人ジュコフスキーが伝えるところによると、次のような厳しい言葉を発したという。「私は善良なる者にとっては善良である。彼らは私の内に友と父とを見出す

<sup>180</sup> Максимов В. Е., Карантин // Собрание сочинений в 8 томах. М.: Терра, 1991-1993. Т. 3. С. 194-210; Макシーмоф 『検疫』 水野忠夫訳、河出書房新社、1975年。

<sup>181</sup> Щильдер Н. Император Николай I в 1830-1831 гг. С. 88.

<sup>182</sup> Максимов, Карантин. С. 254.

であろう。しかし悪意ある者には災いあれ。彼らに対して私は武器を向けるであろう。私はおまえ達を恐れはしない。おまえ達が私を恐れるのだ」<sup>183</sup>。さらに皇帝は自らが犯した罪について神に許しを請うよう、それから解散して家に帰るよう命じた。群衆は「無意識の動作」で地にひれ伏して祈ったという。またベンケンドルフによれば、ツァーリの明瞭で力強い声はセンナヤ広場の端から端までよく響き、群衆に対して「魔法のような効果」を与え、荒れ騒いでいた暴徒は瞬時に沈黙し、涙を浮かべて十字を切ったのである<sup>184</sup>。ジュコフスキもベンケンドルフも事件を直接に目撃したわけではないので、多少の美化や誇張はあるだろうが、民衆の中に一種のツァーリ信仰があったことは確かである。このエピソードはニコライ 1 世の偉業のひとつとして神話化され、のちにはペテルブルグのイサーク寺院前に建てられてた皇帝の記念碑（1859 年）を飾るレリーフのひとつに、馬車の上に立って民衆に語りかけるその姿が描かれることになる。

同様の効果は、暴動が起きた直後のスターラヤ・ルツサや、その前年コレラによって危機に瀕したモスクワを皇帝が訪れた際にも引き起こされた。もちろん権力者のカリスマには実体的な基盤があるわけではなく、皇帝も所詮は普通の人間である。力を持つのは皇帝を巡って語られる神話の方なのである。プーシキンはそれをよく理解していた。コレラのモスクワを訪問したニコライ 1 世に捧げられた『英雄』には、「卑しい真実の暗闇よりも／僕らを高めてくれる偽りの方が貴し」（3-1, 253）という一節がある。これは権力者のカリスマが持つ演技的・神話的な性質をよく示している。またプーシキンは「民衆がツァーリの顔を何でもないこととして見慣れてしまうようではいけない。警察による制裁措置だけが広場の争乱に干渉すべきだ。散弾や鞭による威嚇をツァーリが口にしてはいけない。ツァーリは民衆と直接に関わり合ってはならない。賤民はやがて神秘的な権力を恐れなくなり、陛下と自分の交際を得意がるようになるだろう」（12, 199）と書いている。民衆のツァーリ崇拜の基盤をプーシキンは鋭く見抜いている。

民衆にとって権力者は聖なるものであると同時に悪をなすものでもあった。この矛盾・二重性は権力者を目に見える部分と見えない部分に分けて考えることによって解消される。悪いのはツァーリの周囲にいる連中であり（この場合は警察、病院、軍隊など）、ツァーリ自身は常に正しい（なぜなら目の届くところにはいないから）というロシアのナロードの伝統的な考え方がこうして導き出される。

民衆と権力者がお互いを単純なイメージで理解してきたことは、社会的均衡を保つには役立ったはずである。従順な民衆と暴力的な民衆を同じものと認めるより、健康なナロードと病気のナロードを区別する方が分かりやすいし、神が遣わした皇帝が民衆に悪を働くと考えるより、聖なるツァーリと狡猾な官僚を分けた方が理解しやすい。社会的な現実はずっと複雑なはずだが、人々はステレオタイプで物事を見がちである。しかも悪のイメージは

<sup>183</sup> Из Письма В. А. Жуковского к принцессе Луизе прусской // Русский архив. 1864. С. 341.

<sup>184</sup> Щильдер Н. Император Николай I в 1830-1831 гг. С. 89.

外部に、アジアのコレラとか、西欧の革命運動とか、ポーランド人と結託した医者・警察とか、ピョートル大帝が導入した官僚制とか、非ロシア的なもの、自分と異質なものに結びつけられやすい。フォークロアにおける病気が常に女性の姿をとる理由も、女性の周縁性の問題がひとつには考えられる。1830-31年のコレラ騒動は、こうしたロシア社会・文化の精神構造の一端を明瞭に照らし出してくれる。

#### 4-2-5. プーシキンと二重のプガチョフ像

プーシキンはコレラ暴動をひとつのきっかけとして、民衆蜂起、特にプガチョフの叛乱に強い興味を抱くようになった。プガチョフはコサック出身でありながら、ピョートル3世を名乗った僭称者でもある。プガチョフの人物像は複雑で、上で論じたようなナロードとツァーリの両方のイメージを合わせ持っている。プーシキンは『プガチョフ叛乱史』という歴史書と『大尉の娘』という歴史小説を書き分けることによって、入り組んだイメージを立体的に映し出そうとした。ツヴェターエヴァはプーシキンが描いたプガチョフ像の二重性を美しい詩人の言葉で解き明かしており、ここでは彼女の言葉を借りて論をまとめに導きたい<sup>185</sup>。

ツヴェターエヴァは『大尉の娘』のプガチョフを偏愛する。他の登場人物は彼女にとって積極的な意味を持たない。ヒロインのマーシャに至っては「単に不必要だけでなく軽蔑に値する」(500)と酷評され、小説自体が『大尉の娘』ではなく『道案内 *Вожатый*』(プガチョフが初めて登場する章の題名)と呼ばれる始末である。小説でプガチョフは無造作に人を縛り首にする残酷で非情な人物として登場するが、彼女は「どんな子供もそうであるように残酷さ *зверство* には慣れ親しんでいた」(501)という。プガチョフの残酷さは童話の残酷さと同じものとされる。もうひとつ興味深いのは福音書から引用される「十人の罪を犯さなかった義人より、一人の悔い改めた罪人を天は喜ぶ」(ルカ：15-7)という言葉で、ツヴェターエヴァはこれを「キリストが口にした最も魅惑的で、善にとっては最も破滅的な言葉のひとつ」(501)と書いている。天に受け入れられるにはまず悪を為すべしという逆説が成り立つからであろう。

ツヴェターエヴァの評論は小気味よいほど好き嫌いが明確で、『叛乱史』のプガチョフは小説とは逆に嫌われている。その理由は残酷さにもあるが(『叛乱史』には、目玉の飛び出した捕虜を縛り首にしたり、殺した将校の脂肪を傷口に塗り付けたりするの描写がある)、評論の中で何度も引用されるプーシキンの二つの詩(『ペスト流行時の酒盛り』と『英雄』)の断片がもっと雄弁に両作品の違いを説明してくれる。二つの詩はどちらも1830年に猛威を振るうコレラの中でインスピレーションを得て書かれたものである。プガチョフを論じ

<sup>185</sup> *Цветаева М. Пушкин и Пугачев // Цветаева М. Собр. соч.: В 7-ми т. М.: Эллис Лак, 1994. Т. 5. С. 498-524.* 以下、本書からの引用は( )内に頁数を記す。

る際にツヴェターエヴァがこの二つの詩を引用しているのは偶然かもしれないが興味深い。

二つの詩はどちらも疫病という危機的状況下でありながら死の危険を恐れない英雄的主人公を描いている。『ペスト流行時の酒盛り』からツヴェターエヴァが好んで引用するのは、「死の際にある全てのひとは／人間の心に言い知れぬ／密かな快樂を隠すもの」(7, 181)という一節である。断頭台へ向かいながらも群衆の中にグリニョフを見つけ、うなずいてみせたという『大尉の娘』のプガチョフの姿がそこに重ねられている。一方で『叛乱史』8章の注釈にはプガチョフが判決を前に恐怖のあまり死にそうだったというエカチェリーナ女帝の手紙が載せられている(9-1, 147)。愛する女性や友人を部下たちが嫉妬のあまり殺害した時も、プガチョフはわが身の命かわいさにそれを黙認した(3章)。ツヴェターエヴァはこうした行為に「生きながらえるための低劣なあがき *низкое цепляние за жизнь* 」という表現を与えて、死を恐れない英雄と対比させている(516, 518)。

『叛乱史』のプガチョフの方が史料に基づいており、事実に近いところはツヴェターエヴァも認めているが、「魅惑は経験に先立つ *чара старше опыта* 」(520)という。彼女にとって大事なのは少女の頃から魅了され続けてきた『大尉の娘』のプガチョフ像だった。「知ってます、知ってますとも。すべてがどうであったか、どうすべてがあつたかということは。プガチョフが下劣で臆病だったことは知っています。すべて知っていますけれど、この自分が知っていることを私は知りたいとは思いません。自分のものではない誰か他人の知識には“自分”の知識を対立させます」(519)。同じ段落には、先にも挙げたプーシキンの『英雄』の一節、「卑しい真実の暗闇よりも／僕らを高めてくれる偽りの方が貴し」が引用されている。「卑しい真実」とは歴史上のプガチョフ像、「貴い偽り」とは小説のプガチョフ像にあたるのであろう。ツヴェターエヴァは『大尉の娘』のプガチョフを書いたプーシキンは詩人だが、『叛乱史』のプーシキンは散文作家であるともいっている(514)。

ツヴェターエヴァの評論は極めて主観的なものだが、それだけにプーシキンの作品におけるプガチョフ像の二重性を、好き嫌いを基準にしてはつきりと捉えている。ツヴェターエヴァが引用している二つの詩もよく分析すればもう少し複雑な構造を持っており、単純に「死を恐れない英雄」が讃えられているのではなく、同時に、詩的な英雄像に対する散文的な皮肉や懐疑が投げかけられていることが分かる(詳しくは前節を参照)。プーシキンはプガチョフに関する創作のため1833年に集中的に資料収集を行い、1834年末に『プガチョフ叛乱史』、1836年に『大尉の娘』を発表した。両者は同じ作業の中から生まれたものであり、相補的な関係にある。『大尉の娘』に描かれた、童話の悪役のように魅力的なプガチョフ像と、『叛乱史』の卑怯で臆病だが、脱神話化されてより等身大の人間に近いプガチョフ像の関係は、ツァーリ像やナロード像を巡る二重のイメージと重なり合う。支配階級と民衆が相互に抱いていた矛盾したイメージは、1830-31年のコレラ疫を巡る言説の中に明瞭に見てとることができる。プーシキンの言葉には、そうした矛盾や二重性をすべて引き受けるだけの大きさがある。プガチョフに関する二つの作品は、対立するイメージを含みながら、合わせてひとつの全体像を照らし出すものと考えられるべきであろう。

#### 4-3. ドストエフスキー『悪霊』におけるコレラのイメージと権力の問題

1830年のフランス7月革命はベルギーやイタリア、ドイツなどに波及し、1848年の「諸国民の春」はフランスの2月革命をはじめとしてヨーロッパ全土を席捲した。ロシア帝国でも1830-31年にかけてポーランドの11月蜂起があり、コンスタンチン大公やイヴァン・ディビチなどロシア軍の重要人物がコレラで死亡している。1848年の革命運動はドストエフスキーも関係するペトラシェフスキー会員の逮捕・裁判という事件を引き起こした。一連の革命や独立運動は興味深いことにコレラの世界的流行（第2次、第3次パンデミー）と時期が重なっている。1830-32年の第2次流行の際にはヨーロッパ各地でコレラ暴動が発生しており、ロシアでもペテルブルグのセンナヤ広場やスターラヤ・ルッサの事例があることはすでに示した通りである。

疫病と革命・暴動の関連性については同時代人も意識していた。ニコライ1世は1831年にセンナヤ広場の暴動の場で「おまえたちはフランス人やポーランド人の真似をするのか」と呼びかけた。一方、ペテルブルグ大学で教鞭をとっていたアレクサンドル・ニキチェンコは、その有名な日記の1830年9月5日のページに以下のように記している。

コレラ・モルブスという恐ろしい病気が先月はアストラハンで猛威を振るい、そこからサラトフ、タンボフ、ペンザに移動し、内務省の地方当局が伝えるところによると今度はヴォログダを襲ったところだという。首都の人々は恐れおののいている。実際、この病気の場合は大都市のほうが危険なのだ。この町はコレラにとってはまさに収穫の場となるだろうし、あるいは揺籃の地ともなりかねない。それでなくともペテルブルグの気候は、秋であればなおさら、多くの病気を発生させるのだから。

一方でヨーロッパの北部では大量の犠牲者を呑みこもうとする怪物が育ちつつあるし、西部と南部では政治的な病気が猛威を振るっている。フランスは鎖でもって縛ろうとする手を払いのけることに成功した。シャルル10世を立てようとした狂気の専制は、3日間で廃墟だけしか残らなくなってしまった。フランスのお手本にならって、オランダの南部が目覚めた。ブリュッセルでは衝突事件で血が流された。スペインでも人心が動揺している。ポルトガルではミゲルの蛮行が重荷となり始めている。

わが国ではこれら諸事件についてどんなことが語られているだろうか。わが国では考えを口に出すのが怖いので、心の中で多くを考えている<sup>186</sup>。

東から接近するコレラと7月革命を発端とする西欧の政治動向がパラレルに論じられている。はっきり名指されていないが「ヨーロッパの北部」とは反革命のウィーン体制を支える立場となったロシアのことだろう。ニコライ1世とニキチェンコではヨーロッパの革命運動の高揚に対する評価が真逆になっているが、それをコレラの流行と重ね合わせて理解する点が共通している。

---

<sup>186</sup> *Никитенко А.В. Записки и дневник. СПб.: Герольд, 1904. Т.1. С.202.*

1848 年はドストエフスキーが癲癇の初期症状と思われる発作に悩みながら、ペトラシェフスキー会の政治活動に没頭していた時期である。後にドストエフスキーがこの時期の自らの精神状況のある種の政治的な病と見なしていたことは序論でも触れた。それと同時に1848 年は1830-31 年の再現であるかのようにモスクワとペテルブルグをコレラが襲った年でもあった。ペトラシェフスキー事件におけるドストエフスキーの供述書には、致死性の病気の感染を恐れるドストエフスキーに対して、同じペトラシェフスキー会員のパーヴェル・フィリッポフがコレラを恐れない態度を見せびらかしていたと述べられた箇所がある。ドストエフスキーは青年の若さゆえの自己顕示欲としてとらえているが、プーシキンが示したような死を恐れない英雄の演技的身振りを思わせる。

私は病気が発生した最初の頃にはコレラを怖がっていました。いつの日のいかなる時でもコレラを少しも恐れていないということを私に見せるのは、フィリッポフにとって何よりも愉快なことだったに違いありません。私を驚かせようというただそれだけのために、彼は食べ物に用心しようとせず、青物を食べたり牛乳を飲んだりしましたし、ある時などは彼がどうするだろうという好奇心から、私は花が散ったばかりで青々したナナカマドの実がなっている枝を指して、あの実を食べたら五分後にはコレラになるだろうと言ってみたところ、フィリッポフはまるごと一房をちぎりとして、目の前で半分を食べてしまったところできちんと止めさせることができました (18, 155-156) <sup>187</sup>

本節ではこれまで明らかにしてきたロシア文化史における病気のイメージを意識しながら、ドストエフスキーが政治的風刺に富む小説『悪霊』においてコレラを用いた用法を分析する。『悪霊』(1871-72 年) はそのタイトルを聖書の悪霊に憑かれた男のエピソードから取っていることからわかるように、人から人へと伝染する思想というテーマをあからさまな病気のメタファーによって描き出している。革命思想を疫病に喩えるというメタファー自体はソクタグも指摘しているようにありふれたものである。ロシアにおいても革命運動を風刺するアンチ・ニヒリスト小説においてしばしば疫病のメタファーが用いられている。例えばヴァシリイ・アヴェナリウスの小説『疫病 Поветрие』(1867 年) はニヒリストの登場人物たちの邂逅がスイスを出発点としており、その伝染性のある思想が次第にロシア国内で広まっていく過程が描かれるなど『悪霊』のプロットと共通する点が多い <sup>188</sup>。しかしドストエフスキーが疫病に喩えている思想の伝染というテーマは、病気の汚染源ともいえるスタヴローギンの不可解な人物像とも関係して、単純なニヒリスト批判には還元されない構造を持っている。

<sup>187</sup> ドストエフスキーの引用は Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-83. により ( ) 内に巻数と頁数を記す。『悪霊』については部・章・節も付記した。

<sup>188</sup> Авенариус В. П. Поветрие // Собрание сочинений в 5 томах. М.: Terra, 1996. Т.3. С.541-686.



#### 4-3-1. レンプケ知事とシュピグリン工場と女性の権力

複雑に入り組んだ構造を持つ長篇小説『悪霊』の後半部では、夜会でのスキャンダル、放火、殺人など、ピョートル・ヴェルホヴェンスキーの仕掛けた陰謀が目まぐるしいほどのスピードで展開していく。その発端のひとつとなるのがシュピグリン工場の労働者が起こす「暴動」であるが、その描写には1831年のセンナヤ広場での事件がパロディ的に反映されている。

レンプケ知事は小説の舞台である地方の県に意気揚揚と赴任するが、当地では伝染病と火事に関する不吉な噂が蔓延していた。「目下のところコレラが接近中であつた。強力な疫病による家畜の死が確認された地域もあつた。夏の間を通じて町や村で火事が猛威をふるい、放火だという愚かなささやきが人々の間で広まりつつあつた」(10:267, 2部6章1節)。15年間も掃除をしたことがないという不潔なシュピグリン工場に伝染病が飛び火するのではないかという疑惑の目が向けられ、「工場自体やとりわけ労働者の家屋がどうしようもなく汚れているので、コレラなんて全くなかつたとしても、その場で発生したにちがいない」(10:270, 2-6-2)とさえ噂される。レンプケ知事の命令により消毒措置が取られるが、工場自体が経営者の都合で閉鎖されてしまう。賃金未払いのまま首を切られた労働者たちは、不満を直接うたえようとして知事公邸の前に集まってくる。ニコライ1世がペテルゴフからセンナヤ広場の暴徒のもとに馬車で駆けつけたように、レンプケ知事もヴァルヴァーラ夫人の領地スクヴォレシニキから馬車に乗って労働者たちの前に駆けつける。しかし「帽子を取れ!」「ひざまづけ!」(342, 2-10-1)という命令<sup>189</sup>も、ツァーリの場合のような鎮静効果をもたらさない。ピョートルの策謀に振りまわされてすっかり頭が混乱したレンプケは、労働者たちを本物の暴徒と決めつけ、鞭による厳罰を命じる。混乱の中でたまたまその場に居合わせたステパン氏までも巻き添えを食いそうになる。これが事件のあらましである。

『悪霊』においてコレラの伝染が革命思想の浸透のメタファーになっていることは明瞭である。伝染病が近隣の県から次第にせまってくるのと同じように、政府の転覆を訴える檄文もまた同じ経路を伝わって県内に入ってくる。「三週間ほど前に工場で一人の労働者がアジア・コレラにかかって死亡し、さらに数人が発病した。ちょうどコレラが隣県から迫りつつあつたときだったので、町の人々はみな怯えた」(269, 2-6-2)。一方で同じころに気の触れた少尉のもとで発見された檄文は、「後に囁かれたところによるとH県で先ごろ撒かれたものとそっくりだったし、一ヵ月半前に郡部と隣県に出かけたリプーチンも向こうで同じビラを見たと言つた。ただレンプケにとってショックだったのは、少尉のところで見つかったのと全く同じビラが数束、夜中にシュピグリン工場へ放りこまれ、工場の管理人が警察に届け出たことである」(269, 2-6-2)。以上のように革命と病気は同じような経路を通してシュピ

<sup>189</sup> 30巻本全集の注釈者はレンプケ知事の台詞にニコライ1世のそれが反映されていることを論証している(12, 308)

グリーン工場に到達する。工場の労働者たちが担わされている二重の汚染イメージは、次のようなピョートルの台詞にもよく現われている。

それではもうひとつ言いましょう、シュピグリンという面白い工場がありましてね。そこじゃ、どうです、500人の労働者がいて、コレラの温床ですよ、15年間も掃除をしてないし、職工はピンはねされてる。大金持ちの商人がやってるんですよ。これは本当のことだけど、労働者の中にはインターナショナルに理解を持つものだっていますからね。(180, 2-1-3)

レンプケ知事の認識ではシュピグリン工場の事件は、1831年のセンナヤ広場で起こったのと同じ「コレラ暴動」であった。しかし語り手はそれとは別の視点をも提示している。例えばある種のリベラルな意見によるなら、「この70人はシュピグリン工場の全900人の職工から選出された人々であり、彼らの目的は、工場主が不在なので、代わりに県知事のもとへ行って管理人の制裁を求めることだったという」。悪いのは払うべき賃金を持ち逃げした工場管理人であり、労働者たちは単に知事のもとに請願に集まっただけだという解釈である。これに対して正反対の視点も並列されている。「この70人は単なる暴徒どころか極めて政治的な徒党である、もともと凶暴な連中だったところを例の檄文によって焚きつけられたに違いないと熱心に説く人々もいた」(235, 2-10-1)。しかし同じ段落の最後に挙げられる語り手自身の解釈は次のようなものである。

しかし職工たちが困窮していたのは本当であるし、警察に訴えても彼らの憤慨をちゃんと聞いてはもらえないとしたら、一団となって「將軍さま」のところへ出かけていこう、もしできるなら、嘆願書を頭にかざし、屋敷の玄関前に行儀よく整列して、閣下が現れたらすぐにも足元にひざまづいて神さまの前でするように哀訴しようとするのはまったく自然なことである。私が思うに、これは古くからある歴史的なやり方であり、暴動とか選出などというものに出る幕はなかった。ロシアの民衆は昔から「將軍さま」との会話が好きであり、しかもただそれが嬉しいから会話するのであって、たとえ結果がどうなろうと大した問題ではないのである。(235-236, 2-10-1)

ここで描かれているのは、センナヤ広場で暴動を起こした民衆がニコライ1世の一言でひざまづいて静かになったのと同様の「ツァーリ崇拜」の心理である。しかしレンプケ知事には権力者に従順な「善良なナロード」の姿が見えず、自由思想に焚きつけられた暴徒としてしか認知できない。興味深いのは反体制の側にあるピョートルもまた、「汚染されたナロード」のイメージに加担して、それを人々に焼きつけようと策動していることである。権力者も革命家もシュピグリン工場の労働者に対して向けるまなざしは同質なのである。「將軍さま」との会話を望む善良なナロードを見ているのは語り手だけである。ピョートルは病氣と革命思想で二重に汚染されたナロードのイメージを作り出し、レンプケ知事はそれに惑わされてシュピグリン事件の沈静化に失敗してしまう。1831年のコレラ暴動の際にはうまく機能していた「善良なツァーリ」「善良なナロード」の幻想は、ドストエフスキーのパ

ロディイ的描写においてはぴったりとかみ合わずに機能不全を起こしている。ニコライ1世の時代と違うのは、権力者でも民衆でもないピョートルのような職業的革命家の存在であり、これがナロードとツァーリをめぐる幻想を打ち壊しているとも考えられる。

『悪霊』の舞台となる県をロシア社会の縮図と解釈するならば、レンプケ知事はツァーリのパロディ的な代替物と見なすことができよう。そこで興味深いのは県政を実際に掌握しているのがレンプケではなく妻のユリア夫人とされていることである。その政治的ライバルとしてスタヴローギンの母であるヴァルヴァーラ夫人が配置されており、県内の政治はいわば女同士の権力争いとして描写されている。ユリア夫人は無神論や自由思想に冒された青年たちを正しい道に導くことを自らの役割と考えるようになるが、そうした彼女の熱意溢れる使命感は語り手によって徹底的に滑稽な諷刺の対象にされている。

しかし詩心が多すぎたせいか、青春の最初期に長くてわびしい不遇を体験したせいか、運命が変転した途端に、ユリア夫人は自分が特別な使命を帯びていると感じ始めた。「かの炎の舌が頭上に燃え上がる」、聖油を塗られ、神に選ばれたのだとさえ思った。ところがこの舌にこそ災いの原因があったのである。なにしろ付け鬘と違ってこの舌はどんな女性の頭にでもくっつけられる代物ではない。(268, 2-6-1)

ここで引用されている「炎の舌」とは新約聖書に出てくる聖霊のイメージだが（「使徒列伝」2:3）、直接には先にも挙げたプーシキンの詩『英雄』から取られたものである。「まったく栄光とは気まぐれにかけては勝手なもの。／それは、炎のように／選ばれし子どもの頭上を飛びめぐる／ (...) /されど我らにとって尊きものは／かの炎の舌が頭上に燃えるあの額なのだ」。プーシキンの詩によれば「炎の舌」とはナポレオンに代表されるような英雄を凡人と区別するしるしとなるべきものである。ユリア夫人は自分を英雄になぞらえ、ナポレオンがペスト患者の手をにぎって励ましたように、無神論に汚染された若者たちを自分の力で救おうと決意したのである<sup>190</sup>。

ドストエフスキーが権力者を女性として描いたことには二つの理由が考えられる。まず考えられるのはアリストファネス以来の伝統である諷刺の対象を異化する技法であるが、この場合であれば男性的職業のイメージが強い政治家たちを女性にすることによって諷刺の効果を高めるものである（女性のほかにも、子供、老人、異国人、動物などを用いることもありえるだろう）。たしかにユリア夫人とヴァルヴァーラ夫人の権力闘争の描写には諷刺文学的な滑稽味が感じられる。しかしドストエフスキーが政治に女性イメージを付与した理由はそれだけではないだろう。先にも指摘した「将軍さま」との会話を好む民衆のツァー

---

<sup>190</sup> 『伯父様の夢』(1859)に登場する権力的な母親もまたナポレオンに喩えられていることは興味深い。「マリヤ・アレクサンドロヴナはある点ではナポレオンとさえくらべられた。もちろんこれは真理というよりも風刺のために、彼女の敵たちが冗談でやったことではある」(2, 297)。語り手によれば、下賤の出であったナポレオンは得た地位の高さに目が回って失墜したが、それと対照的に彼女はモルダソフ市の権力者であり続ける。

り崇拜には、権力者との関係が公的な空間と私的な空間に分離する以前にありえたかもしれない神聖な権力の時代という理念が反映されており、ドストエフスキーが夢見た太古の「黄金時代」などがこれに類するものである。近代的＝男性的な権力イメージに対して、古代的＝女性的という想像上の理想化された権力者の姿が対置されていると考えられる。例えばユリア夫人は「幸福を与えること、和解しえないものを和解させること、もっと正確にいうなら、御みずからの神格化のうちに в обожании собственной ее особы 万人を統合することを夢見ていたのだ」(268, 2-6-1)。もちろん『悪霊』のテキストに描かれている女権力者は滑稽なパロディでしかないが、それはドストエフスキーが例えば父親像に抱いていた複雑なアンビヴァレンスを考慮すれば不思議なことではない。

民衆と「將軍さま」との直接的な会話というモチーフは、たとえばプーシキンの『大尉の娘』におけるマーシャのエカテリーナ2世への直訴、ネクラソフの『ロシアは誰にすみよいか』における農婦の県知事夫人への直訴などのロシア文学の伝統に連なっている。いずれの場合も権力者が（請願者も）女性であることは興味深い。そうした伝統をふまえた上でドストエフスキーの小説においては、ユリア夫人やヴァルヴァーラ夫人が弱き配偶者（レンプケ知事とステパン氏）を凌駕する強い権力者として描かれている背景に、「母なるツァーリ」ともいべき理想がひそかに隠されているように思われるのである。

#### 4-3-2. ステパン氏とその子供たちと男性のヒステリー

コレラと革命思想の二重の汚染イメージを表現するのに、『悪霊』においては「温床 *рассадник*」という言葉が効果的に使われている。この語は小説全体の中で6回だけ用いられており、そのうちの2回は「病気の温床」(270, 2-6-2)「コレラの温床」(180, 2-1-3)のようにシュピグリン工場を形容するのに用いられている。残りの4回はステパン氏が主宰するサークルが「自由思想と退廃と不信心の温床」(30, 1-1-9)「県内の無神論の温床」(49, 1-2-4)などと名指されるときに使われる<sup>191</sup>。シュピグリン工場の「暴動」が起きた直後の興奮冷めやらぬレンプケ知事などは「こいつがあゝの温床か」「今まで積み積みしてきたこと全部の温床ですな」(344-345, 2-10-2)という具合に、ステパン氏個人を「温床」呼ばわりするほどである。「温床」という共通の言葉が用いられることによって、ステパン氏とそのサークルは、シュピグリン工場と同じように病気と革命思想の二重汚染のイメージを帯びることになる。

初期の『悪霊』の構想では、ステパンとピョートルのヴェルホヴェンスキー親子を中心とする世代間の衝突が小説の主要な筋となるはずだった。主人公スタヴローギンの導入によってステパン氏はいくぶん後景に退いてしまったが、それでも物語の前史にあたる部分で

<sup>191</sup> 小説中における語の使用回数を調べるため、ペトロザヴォツク大学サイトの作品コンコーダンスを利用した。<http://www.karelia.ru/~Dostoevsky/dostconc/alpha.htm>

は主要登場人物に対して動因的な役割を果たしている。ステパン氏は陰謀家ピョートルの実の父であり、スタヴローギン、リーザ・トゥーシナ、ダーシャ・シャートヴァの家庭教師であった。彼はまたシャートフ、リプーチン、ヴィルギンスキーなどの集まるサークルを主宰し、メンバーのひとりである語り手のGによると「わたしたちの誰にたいしても父のような態度で接していた」(29, 1-1-8)という。トランプの借金を返すためにステパン氏が売り払った農奴が、懲役人となったフェージカであることも見逃すことはできない。もちろん小説の主要な筋においてスキャンダルや殺人事件を引き起こす第一の要因となるのはピョートルであり、間接的に唆すのはスタヴローギンである。スタヴローギンが観念の毒を与えて人々の精神を支配し、ピョートルが術策でもって彼らの肉体を操ったとするならば、ステパン氏は新しい世代の登場人物たち(=子供たち)を産み育てる「温床」(=父親)としての役割を担ったといえる。

シュピグリン工場のコレラ(холера)との対比で興味深いのは、ステパン氏の持病とされる「擬似コレラ холерина」である。擬似コレラとはいわゆる「ヨーロッパ・コレラ」「散发性コレラ」と呼ばれる病気の俗語表現であるが、これは不潔な環境が原因で起きる消化器系の疾患である。もともとヨーロッパにおいてコレラという語はこちらの病気を指す名称だった。19世紀になって東方から伝播してきた未知の疫病が猛威を振るうようになってから、症状の類推によって新しい病気もまたコレラと呼ばれるようになったのである。新旧のコレラを区別するため「アジア・コレラ」や「インド・コレラ」という言葉がしばしば用いられた<sup>192</sup>。ただしステパン氏の持病の発作は「擬似コレラそっくり」と形容されているように疑似コレラそのものではなく、「たいがいの場合には神経の衝撃が引き起こすいつもの結果であり、彼の体質の一風変わったところを成していた」(16, 1-1-3)とある。従ってステパン氏の「擬似コレラ」は消化器系の病気に症状は似てはいるが、むしろ心因性の神経症の一種と考えるべきである<sup>193</sup>。

『悪霊』に二種類のコレラが登場することは単なる偶然ではなく、ステパン氏とピョートルに代表される両世代の関係性のメタファーとして読みとることができる。古い病気が症状は似ているものの毒性ははるかに強い新しい病気にその名称を譲った経緯は、40年代のリベラルな知識人が60年代の急進派に取って代わられる過程と重なって見える。両者の継承関係については例えばステパン氏が新しい世代に属する作家を評するつぎの台詞に明らかである。

著者の基本的な思想が正しいものであることに異存はありません。(…)でも、だからこそ恐ろしいのです。我々の、まさに我々と同じ思想です。この理念を植え育てて準備したのは我々の方が先だったのです。我々の後からきた連中に新しいことなんて言えるわけがありません。それにしても何という表現をするのだから

<sup>192</sup> 見市雅俊『コレラの世界史』、52-56頁。

<sup>193</sup> 筑摩版ドストエフスキー全集(小沼文彦訳)では「急性胃腸炎」という意識が用いられている。

う、歪曲と欠陥が甚だしいじゃありませんか。(239, 2-4-2)

シュピグリン工場のコレラが革命や暴動のイメージと結びついているのに対して、ステパン氏の擬似コレラの発作は滑稽で喜劇的な身体表現となっている。ドストエフスキーの小品『いやな話』(1862)にはさらに過剰に喜劇的な擬似コレラの描写を見ることができる。主人公の四等官イヴァン・イリッチは部下の結婚披露宴を断りもなく訪れた挙句に、酔いつぶれて新婚の初夜を台無しにしてしまう。「擬似コレラのような」症状に冒された主人公は、ほかに休ませる場所もないので若い夫婦のために新調した寝台に運びこまれる。「ひどく胃の調子を悪く」してしまった彼のため、新郎の母親は「一晩中、寝室と廊下の間をおまるを持って出たり入ったり」(5, 39-40)しなくてはならなくなる。このように『いやな話』では下痢もしくは嘔吐を暗示させるかなり露骨な描写がなされている。『悪霊』には擬似コレラの具体的な発作の描写はないが、少なくとも同時代の読者には同じようなスカトロジカルな連想を働かせたであろう。

ステパン氏の生活は自らが脚色したロマン主義的な幻想で飾り立てられているが、実際の境遇はみじめで屈辱的なものである。それは「氏にはAというすばらしい点があった」「もっともそれは実際にはA'とでもいふべきものであったが」というようなアイロニカルな対句的表現を用いて読者に紹介される。例えばステパン氏は自由思想を抱いたために首都から地方に追放された進歩派知識人と見なされているが、実際は当局の監視を受けたことはいちどもない。ヴァルヴァーラ夫人との関係ではパトロンに保護される芸術家を気取っているが、実際にはただの居候の身分でしかない。ロマン派詩人クコーリニクの肖像画に似た美丈夫であるが、最近はいよいよお腹がたるんできた。「無為によってはなにも獲得できないのです。労働することによって自分の意見を持つようになるのです」(10:32, 1-1-9)と偉そうに主張するわりには、無為な日々を過ごしているのは自分の方である。「市民的役割 гражданская роль」「追放の身 гонимый」「流刑者 ссыльный」などステパン氏の境遇にロマンチックな色を添える形容表現も、語り手によって皮肉混じりに用いられることで信憑性を失う。コレラ型神経症とでも呼べそうなステパン氏の発作は、そうした虚構が暴露されて矛盾や葛藤を直視せざるをえなくなったときに生じる<sup>194</sup>。フロイトであれば耐えきれない恥の情動エネルギーが抑圧されて、擬似コレラという身体的症状に転換されたと説明するであろうか。

もっとも分かりやすい例はステパン氏が自分のサークルで仲間たちに振舞うシャンパンである。気前のよい身ぶりを見せていても、酒盛りの費用はヴァルヴァーラ夫人に頼っている。追放の進歩派知識人という虚構と、生活能力のない食客という現実のギャップを意識せ

<sup>194</sup> マーティンセンは恥と嘘という観点からステパン氏を分析しているが、本論における擬似コレラの考察と一致する点が多い。Deborah A. Martinsen, *Surprised by Shame: Dostoevsky's Liars and Narrative Exposure* (Columbus: Ohio State University Press, 2003), pp.103-134.

ざるをえない状況に追い込まれるとステパン氏は発作を起こす。「請求書に従ってヴァルヴァーラ・ペトロヴナが半年ごとに清算するのだが、清算の日はほとんどいつも擬似コレラの日となった」(26, 1-1-8)。ステパン氏を中心とする男性のユートピア的な共同体が、実際には「母なるツァーリ」たるヴァルヴァーラ夫人の権力のもとに依存して成立している点が興味深い。

ステパン氏の擬似コレラは当時の医学概念でいえばヒステリーにあたると思われる。ヒステリーはもともと子宮が体内を動き回るために起きる女性特有の病気と考えられていた。19世紀後半には医学者の間で男性のヒステリーの症例も報告されるようになっていたが、ヒステリーは女性の病気であるというイメージは医学者もふくめて一般に強く定着していた<sup>195</sup>。ドストエフスキーがステパン氏の発作を直接にヒステリーと名指すことができなかつたのはそのためと思われる。ただしステパン氏の身ぶりや言動には「ヒステリー的な」「ヒステリックに」というかたちで間接的に病気のイメージが付与されている。以下の表は『悪霊』においてヒステリーを表す名詞とそこから派生した形容詞・副詞が、どの登場人物について用いられているかをまとめたものである。ステパン氏と結びついた用例が圧倒的に多いことが分かる。ステパン氏を除くと、二回以上この語が使われているのは、実際にヒステリーの発作を起こす場面のあるリーザ・トゥーシナだけである。

	ヒステリー истерика	ヒステリー的な истерический	ヒステリックに истерически	合計
ステパン氏	1	4	2	7
リーザ	2 (本物の発作)	1	1	4
ユリア夫人	1	0	0	1
カルマジノフ	1	0	0	1
その他 (女4男2)	0	3	3	6

男性であるステパン氏がヒステリー患者として描かれていることは偶然ではありえない。本章第2節で見たように、ロシアのフォークロアの伝統においては、ペスト、天然痘、コレラなどの伝染病が女性の形象で描かれることが多かった。原因不明の伝染病がもたらしたであろう前近代的で神秘的な恐怖感が、女性のイメージと結びついたと考えられる。一方で革命思想という「伝染病」はきわめて近代的な所産であり、それを人間の姿で描くため、あえて男性のイメージが用いられたと仮定することもできるだろう。無神論と革命思想に汚染された同時代の若者たちを産み育てた温床、すなわち「父なるコレラ」としてステパン氏は描かれているのである。

シュピグリン事件に先立ってステパン氏が家宅捜査を受ける場面がある。そこで彼は取

<sup>195</sup> エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』青土社、1998年、119-152頁。

調室の椅子に仕掛けられた落とし穴というロシアの秘密警察（第三官房）に関する有名な噂を真に受けて<sup>196</sup>、自分も逮捕されて鞭打たれることを異様なほどに恐れる。「足元の床が急に開いて体が半分まで落ちる…。有名な話じゃないですか」（2-9）。貴族階級は体刑を免除されてきたという歴史的経緯があり、鞭打たれることは身体的な苦痛というよりも精神的な恥辱として忌避されていたことが念頭に置かれている。もちろん国家的な政治受難者というステパン氏の大げさな自己理解は現実と乖離しているとはいえ、レンプケ知事から「温床」と呼ばれる程度には認識されているといえよう。いずれにせよ興味深いのは、その直後に起きたシュピグリン事件に巻き込まれたステパン氏が、危うく警察官に殴られそうになることである。しかも語り手の推測によると、この一件には尾ひれがついて拡散し、ついにはタラプイギナ夫人という存在しない女性が警察によって鞭打たれたという噂話に変容してしまう。言葉や思想が人から人へと疫病のように伝わっていくというのが『悪霊』の語りの特徴である。ここでは口伝の噂話だけではなく新聞というジャーナリズムも介在している。

何といおうか、鞭が出てくるのがあまりに早すぎた。明らかに察しのいい警察長官によって予め用意されていたのだ。罰せられたのはせいぜい2人で、3人ということもないだろう。この点は請け合っておく。

(...) 墓地の養老院に住んでいるアヴドチャ・ペトロヴナ・タラプイギナという女性について多くの人が話題にした。なんでも彼女がお客に行き、養老院に帰る途中で広場を通りかかり、自然に湧き出た好奇心から見物人を押し分けて事件を目撃し、「なんて恥知らずな」と叫んで唾を吐いたのだそうだ。そのせいで彼女は捕まって、やはり「処置」を受けたという。この事件は新聞に掲載されたばかりか、町では怒りのあまり彼女のための義援金が集められたほどだ。私も20コペイカ寄付した。ところがである。タラプイギナなどという養老院住まいの女性など存在しないことが分かったのだ（2-10-1）

序論でも触れたが、ドストエフスキー自身がオムスクの監獄で鞭打ちの刑罰を受けたことがあり、そのせいで癲癇発作を起こしたという噂話が広まっていたことを思い起こそう。おそらく事実ではないこのエピソードもまた体刑という恥辱と受難者の名誉という複雑なスティグマをドストエフスキーに与えていた。こうした点を考慮に入れるのが妥当であれば、ステパン氏の鞭打ちにまつわるエピソードは作家の経歴の自己パロディといえるだろう。

ステパン氏の疑似コレラの発作（男性のヒステリー）もドストエフスキーの持病である癲癇発作の自虐的なパロディと見られないこともない。ドストエフスキーの作品世界の中では癲癇とヒステリーは基本的に違うものとして描き分けられているが、実際には両者の区別は作者の同時代において判断の難しい問題であった。フロイトがドストエフスキーの病

---

<sup>196</sup> この噂話については以下を参照。Лотман Ю.М. Избранные статьи. Т.2. Талинн: Александр, 1992. С.18-19.



気をヒステリーと見なしたことを思い起こそう。民衆の世界観の中ではどちらの場合も「悪魔憑き」として解釈される伝統があり、これは第3章で詳述したように『カラマーゾフの兄弟』で興味深い意味を担っている。ステパン氏の擬似コレラは、癲癇や悪魔憑きの格下げされた表現とも考えることができる。

ステパン氏が最後に擬似コレラの発作を起こすのは、居候の境遇を捨てた放浪の旅の途上で、聖書売りの女性ソフィアと出会った際である。お茶を受け皿について角砂糖をかじりながら飲むというソフィアの身ぶりは彼女の民衆性を示す記号であり、この場面は余計者の知識人であるステパン氏とナロードの体現者である女性の対話という意味を持っている。ステパン氏はソフィアを相手にロマンチックに脚色された身の上話を語る。「ブリュネット」と「ブロンド」の二人の美女（ヴァルヴァーラ夫人とダーシャ・シャートヴァ）との悲劇的な三角関係という筋立ては、もちろん個々の事実を自分本位に歪めたものでしかなく、語り終わったステパン氏はそれを意識して擬似コレラの発作を起こす。ステパン氏の発作は虚構と現実の矛盾が暴露されたときに発生する強烈な羞恥心が原因であるが、ここでは同時にある種の精神的な浄化の作用も持っている。ステパン氏は虚飾に満ちた人生を反省してソフィアに向かい次のように告白する。

ぼくはもしかして今も嘘をついているのかもしれませんが。きっと今も嘘をついていますよ。大事なのは嘘をついているときにそれを自分で信じないことです。人生において何よりも難しいのは、嘘をつかずに生きること、そして自分がついた嘘を信じないことです。(497, 3-7-2)

ステパン氏はやがて駆けつけたヴァルヴァーラ夫人に対して、憑き物がおちたように無邪気に愛を告白する。「母なるツァーリ」のヴァルヴァーラ夫人とナロードの女であるソフィアの間での余計者ステパン氏の穏やか死は、シュピグリン工場の「暴動」で権力者と民衆の相互関係が破綻したのとは対照的に、驚くほど静かで調和に満ちた光景を示している。その「子供たち」のほとんどが破滅的な死を迎えるのと異なり、ステパン氏の死はむしろコレラに喩えられる時代の病からの癒しを象徴しているようでもある。

#### 4-3-3. スタヴローギンと権力の問題

スタヴローギンはヴァルヴァーラ夫人が亡夫との間にもうけた子供である。幼年時代には家庭教師のステパン氏から精神的に大きな感化を受けたとされている。ステパン氏の精神的な後継者としては、実の息子でありながら放ったらかしにされたピョートルなどよりも、スタヴローギンのほうがふさわしいともいえる。「母なるツァーリ」と「父なるコレラ」が産み育てた子供こそが『悪霊』の主人公スタヴローギンなのである。その人物像にはカリスマ的な権力者の側面と伝染病的な思想の温床という側面とが備わっている。しかし果たして彼はその母と父を超えるなにかを持ちえたのだろうか。

小説中のスタヴローギンは「ハリー王子 *Принц Гарри*」や「イヴァン皇子 *Иван-Царевич*」などの権力者のイメージでもって形容されることが多い。しかしそれらの形容はあくまでも潜在的な権力を指し示すものでしかない。シェークスピアの『ヘンリー4世』のハリー王子は身分を隠してやくざな遊び仲間と放蕩生活を送っているが、それがそのままスタヴローギンの生活に重ねられている。ハリー王子がヘンリー5世として戴冠するには、フォルスタッフのような連中と手を切って、王たるにふさわしい偉業を成し遂げなくてはならないのだが、スタヴローギンにそのような通過儀礼的な機会が訪れることは決してない。

「イヴァン皇子」とは、スタヴローギンが社会的混乱の後に絶対的な権力者として顕現することを期待してピョートルが考えた呼称である。そのカリスマ的な権力の源泉は、イヴァン皇子が決して人々の前に現われず、姿が隠されていることである。

いいですか、わたしはあなたを誰にも見せませんよ、誰にもね。そうしないといけないんです。かの人は存在する。しかし誰もその姿を見たものはおらず、かの人は隠れている。たとえば10万人のうちのひとりには姿を見せてもいでしょう。そうすれば「姿を見たり、姿を見たり」と言って国中を触れ歩いてくれますよ。(326, 2-8-1)

ピョートルのこの台詞は、コレラ暴動を鎮めるためにニコライ1世が民衆の前に姿を現したことに対して、「ツァーリは民衆と直接に関わり合ってはならない。賤民はやがて神秘的な権力を恐れなくなるだろう」と批判したプーシキンの言葉と同じ考えに基づいている。民衆にたいするカリスマ的な権力の基盤は「神秘性」にあり、それは「隠されていること」を前提とするという考えである。しかしスタヴローギンのカリスマ的な権力は、ピョートルの期待に反してロシアのナロードに対しては永久に「隠されたまま」である。野に隠れた権力者のイメージは僭称者のそれとも結びつく。聖痴愚の面影を与えられたレビヤートキンの妹マリアがスタヴローギンに対して「グレシカ・オトレピエフ<sup>197</sup>、呪われるがいいわ」(219, 2-2-3)と叫ぶのが象徴的である。権力者としてのスタヴローギンはあくまでも、「ツァーリの子供」もしくは「ツァーリの偽者」でしかないのである。

スタヴローギンはそのカリスマ的な権力を用いて、リーザ・トゥーシナ、ダーシャ・シャートヴァ、シャートフの妻マリアたちを誘惑し、ピョートル、キリーロフ、シャートフたちを思想的に服従させ、レビヤートキン大尉<sup>198</sup>たちの上に君臨する。しかしその支配はただ人々を破滅に追いやるような力しか持たなかった。その点では「父なるコレラ」であるステパン氏よりもはるかに強力な「病気の温床」であったといえる。ステパン氏からスタヴロー

<sup>197</sup> イヴァン雷帝の殺された長男を僭称した偽ドミートリー1世の本名とされる。

<sup>198</sup> マーティンセンはレビヤートキンの人物像を分析する際に、その身ぶりや台詞がスタヴローギンのそれを格下げした模倣であると喝破し、「ツァーリの僭称者」であるスタヴローギンのさらなる僭称者、「偽ドミートリー2世」として性格づけている。Martinsen, *Surprised by Shame...* pp.187-191.

ギンへ、スタヴローギンからピョートルへ、ピョートルから「五人組」やエルケリへと思想の毒は伝染病のように移動していく。

そうした思想の毒の本質を考える上で興味深いのは、チーホン主教がスタヴローギンに（削除された『告白』の章）、あるいはソフィアがステパン氏に読んで聞かせる次のような聖書の一節（「ヨハネの黙示録」3:14-17）である。

われは汝の所業を知る。汝は冷たからず、熱からず。汝が冷たきか、もしくは熱くあれば良かりしものを。しかれども熱からず冷たからず、ぬるきゆえに汝をわが口元より吐き出さん。なぜなら汝は口にするからである。われは豊かなり、裕福なり、足りぬものはないと、しかれども汝はおのれが不幸であり、哀れであり、貧しく、盲目で、裸であることを知らぬ。(497, 3-7-2)

この一節の引用は、信仰を持たず（熱くもなく）、かといって無神論も信じない（冷たくもなく）ぬるま湯のような内面の虚無を示すものだろう。本論の趣旨に従って敷衍するならば、ステパン氏やスタヴローギンの撒いた伝染病は多くの登場人物を破滅に導いたが、各人はその破滅をむしろ豊かに（熱く、あるいは冷たく）生きたともいえるのである。

ハリエット・ムラフはドストエフスキー作品における聖痴愚（ユロージヴィ）のイメージが果たす機能のひとつとして言葉に対するアイコン（目に見えるイメージ）を挙げている。『罪と罰』において「新しい言葉」を発することに執着するラスコーリニコフに対して、口下手なソーニャはもっぱらその身振りや表情で影響を及ぼす。ラスコーリニコフの饒舌はある種の病気であり、それは沈黙するソーニャというアイコンを文字通り見ることによって癒される<sup>199</sup>。同じ役割はステパン氏の死に立ち会う聖書売りの女性ソフィアによっても担われている。ドストエフスキーの作品には言葉と沈黙、あるいは言葉とイメージという対立項をしばしば見出すことができる。

『地下室の手記』の語り手が「あらゆる意識は病気である」と告げるとき、その意識とは過剰なまでの言葉によって構成されているのは明らかだ。『悪霊』の登場人物が噂話やスタヴローギンの「理念」に呑まれていく過程は、意識から意識へと伝染する言葉の疫病に喩えることができる。一方、第3章で見たように悪魔憑きも伝染性があり、『カラマーゾフの兄弟』のクリクーシャのソフィアの発作は息子アリョーシャによって再現される。これはムラフの論を借りるならば、言葉によらないイメージや身振りがアイコンを模写するように身体から身体へと反復される過程と考えられる<sup>200</sup>。ベルナップは幼少時の光景（日差し、教会、母親など）が忘却の期間を経て再び蘇ることで現在の実践に影響を及ぼすという記憶の働

<sup>199</sup> Harriet Murav, *Holy Foolishness: Dostoevsky's Novels and the Poetics of Cultural Critique* (Stanford UP, 1992), pp.66-69.

<sup>200</sup> Murav, *Holy Foolishness...* p.157-158.

きを重視する<sup>201</sup>。コミュニケーションの次元においても言葉とイメージは対比的な関係にあり、それぞれがコレラとクリクーシャの隠喩を媒介にして物語に組み込まれている。

しかし人間の言葉に対して聖なるアイコンが優位にあることが単純に示されているわけではない。ドストエフスキーの作品世界において、言葉は罪であり、虚偽であり、病気でもある。しかしそれは同時に人間が存在する意味の秘密とも大きく関わっている。悔い改めるためには罪を犯す必要があるように、人間であるためには病気でなくてはならず、言葉によって汚染されねばならない（もちろん、作家は言葉によって書くしかない）。同じ「病気の温床」でありながら、ステパン氏は自身も擬似コレラに示される病的な身体を生きて、それがゆえに癒しにも似た死を迎えることができたのに対して、スタヴローギンには不気味なほどの身体的な健康さが強調されており、それがゆえに孤独で空虚な死を選ぶしかなかったのである。『悪霊』の結末で医者たちがスタヴローギンの死体を解剖して、「精神異常の徴候を発見できなかった」（10, 516）とあるのは示唆的である。

『悪霊』のコレラは単に革命思想や無神論のメタファーだというだけに留まらない。あらゆる言葉は人間の意識に蔓延する伝染病なのである。人間は言葉の病を通過する必要がある。結核の場合と同じようにドストエフスキーの描くコレラは、メタファーの過剰な使用によってステレオタイプを越えた意味を生み出したといえよう。

---

<sup>201</sup> Robert L. Belknap, *The Genesis of The Brothers Karamazov: The Aesthetics, Ideology, and Psychology of Making a Text* (Northwestern UP, 1990), pp.79-87.

19 世紀コレラ流行（パンデミー）の概要<sup>202</sup>

パンデミー	主な流行地域と概況	ロシアでの流行	ロシアの被害
第 1 次 1817-1824	インドから始まって、中国、東南アジア、日本まで到達。最初のコレラの世界的流行。ロシア領内ではカフカースとアストラハンまで到達。	1823	
第 2 次 1829-1837	ヨーロッパ、北米にコレラが初めて広まる。ロシアでは両首都で疫病が猛威を振るい、各地でコレラ暴動が発生。同じ時期にフランス 7 月革命、ポーランド反乱などが起きる。	1830,1831	56 万人罹患、 24 万人死亡
第 3 次 1840-1860	モスクワとペテルブルグでも発生（1848）。幕末の日本で「ころり」病として流行(1858)。同じ時期にフランス 2 月革命、ドイツ 3 月革命など。クリミア戦争でもコレラが蔓延する(1853-55)	1848,1853,1855	259 万人罹患、 103 万人死亡
第 4 次 1863-1875	コレラが南米にも到達、真に世界的な流行となる（オーストラリア大陸を除く）。ペテルブルグでコレラが流行(1871-72)	1866,1871,1872	88 万人罹患、 33 万人死亡
第 5 次 1881-1896	コッホがコレラ菌を発見(1884)。チェーホフがゼームストヴォのコレラ防疫活動に参加する。ヴォルガ流域などでコレラ暴動の発生。	1892,1893	50 万人罹患、 23 万人死亡

<sup>202</sup> 以下の文献をもとに作成した。McGrew, *Russia and the Cholera*; 見市雅俊『コレラの世界史』。

## 第5章 ドストエフスキーにおける火事と病気のイメージ

本論はドストエフスキー作品における火事のイメージの分析を通じて、作家の病気に関する研究に新しい視点の導入を試みるものである。それはドストエフスキーの病気が火事への異様な偏執と結びついていることを論証するだけのものではない。それはある一面においては正しいが、別の一面では間違っている。なぜなら単純だからである。単純な議論は貧困なイメージを生産する所為にはかならない。19世紀ロシアにおける火事の文化史を背景にしてドストエフスキーの作品テキストを読むときに見える病気と火事のイメージとの複雑な絡み合いを解きほぐすことを目指したい。1812年モスクワの火事、1862年ペテルブルグの火事、1866 トゥーラの田舎で起きた小さな放火事件を順番に考察するが、その前にまずはドストエフスキー作品における典型的な例をいくつか見てみよう。

初期作品『プロハルチン氏』(1846年)では失踪した主人公が火事場見物の後に意識を失った状態で発見される。プロハルチン氏を下宿に運んできた御者の語るところによれば「酔っ払っちゃいない、一口も飲んでねえよ。請合ってもいいけどよ、気を失ったか、身体が動かなくなったか、ひょっとすると卒中 *кондрашка* かもしれねえな」(1:248)<sup>203</sup>。シベリア流刑前の作家がしばしば意識を失うような何らかの神経的発作に悩まされていたことはよく知られている。序論でも触れたように、当時の知人だった医師ヤノフスキーの回想によるとドストエフスキーは自分の病気を冗談交じりに「微風を伴う卒中 *кондрашка с ветерком*」と呼んでいた。*кондрашка* は卒中を表す俗語表現であるが、「微風 *ветерок*」という語は癲癇発作の予兆である「アウラ」のロシア語訳として当時は用いられており、ヤノフスキーはこれを作家が既に癲癇の発症を幾分か自覚していた証拠と考えている<sup>204</sup>。いずれにせよ『プロハルチン氏』の主人公の病気は癲癇として描かれているわけではないにしても、作家自身の病気と *кондрашка* という語を通じて結びつく。一方でプロハルチンの発作は火事見物を発端として起きたものであり、主人公は熱病にうなされながら自分が目撃した炎の悪夢に取り憑かれることになる。

『未成年』(1875年)のアルカージイには賭場からたたき出された後で、やけになって町に放火しようとする場面がある(13, 269-270)。足をすべらせて失神したアルカージイは、「不意に耳で重々しい鐘の音が鳴りはじめた」。鐘の響きはやがて懐かしいモスクワのニコラ寺院のものであることが分かり、アルカージイは夢の中で幼年時代を回想し始める。ところで鐘の音は神経性発作の症状である耳鳴りの典型的な描写でもある。例えばドストエフスキーも読んでいたはずのバルザックの『谷間の百合』(1836年)のモルソフ伯爵はヒポコンデリーの凶暴な発作が近づくたびに鐘の幻聴を聞いている。第3章でも論じたように、イスラム教の教祖ムハンマドが癲癇患者であったという説がドストエフスキーの同時代に広

<sup>203</sup> ドストエフスキーからの引用は30巻全集を用い()内に巻数と頁数を記す。

*Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-83.*

<sup>204</sup> James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, pp.6-9.

まっていたが、その論拠のひとつとしてムハンマドが啓示の予兆として鐘の音を聞いたことがしばしば挙げられた。すでに何度も引用しているコヴァレフスカヤの回想によると、ドストエフスキーは流刑先で癲癇発作を初めて体験したときにちょうど復活祭の教会の鐘が鳴り始めたと言っているが、これも発作に伴う幻聴が作家の記憶に混入した可能性がある<sup>205</sup>。『未成年』の放火未遂の場面には鐘の音を聞きながら意識を失うという癲癇発作のモチーフが結びつけられている。

晩年の大作『カラマーゾフの兄弟』（1879-80年）には癲癇患者のスメルジャコフが登場する。語り手はクラムスコイの絵画『瞑想の人 созерцатель』を引き合いに出しながら、スメルジャコフのような瞑想型の人物は「唐突にすべての物をなげうって、放浪の苦行のために、エルサレムをめざして出て行くかもしれないが、あるいは不意に自分の生れ故郷の村を焼き払ってしまうかもしれない」（14, 117）と述べる。宗教性（巡礼）と犯罪性（放火）は天才性と並んで癲癇のイメージを構成してきた歴史がある<sup>206</sup>。興味深いことにドストエフスキーは自分の発作を記録したノートの中で、発作の後遺症として「なにか切迫した、しかも朦朧とした、まるで瞑想しているような状態 созерцательное состояние がこの頃では以前よりも長く続く」（27, 100）というように「瞑想の人」を思わせる表現を用いている<sup>207</sup>。フランスの殺人犯トロップマンが同じ時刻にパリでギロチン台に上ったことがノートに記されているのも興味深い。以上のように『プロハルチン氏』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』の三つの例では病気の描写が「卒中」「鐘の音」「瞑想」というキーワードを介して火事のモチーフと結びついており、これら全てを偶然と片付けることはできそうにない。

### 5-1. モスクワ大火と民衆の聖なる暴力

1812年8月26日（ロシア暦）のボロジノ会戦で疲弊したロシア軍はモスクワの放棄を決定、9月2日にフランス軍は人気のなくなったモスクワを占領する。しかしその日の夜から市内に火の手があがり、クレムリンにまで火は迫ったため、ナポレオンは一時的に郊外に避難することを余儀なくされた。このモスクワ大火が戦争の境目になり、フランス軍はやがて壊滅的な撤退戦に追い込まれることになる。

誰がモスクワに火を放ったのかについては戦争後も議論が続いた。ロシア政府はフランス兵の仕業であるとし、フランス側はロシア人が自ら放火したのだと主張した。後の歴史研究が示すところではモスクワ総督ロストプチンが配下の警察組織を操って町に放火したのが真相のようである<sup>208</sup>。ロシア人が自ら町を焼いたという言説はフランスからロシアに入

<sup>205</sup> Ковалевская С. В. Из «Воспоминаний детства» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.26-28

<sup>206</sup> テムキン『癲癇の歴史』中央洋書出版部、1988年、下巻、402-412頁。

<sup>207</sup> James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, pp.252-259; 望月哲男「謎への情熱—癲癇の記録から見たドストエフスキイ」『えうゐ』22号、1991年、52頁。

<sup>208</sup> Холодковский В.М. Наполеон ли сжег Москву? // Вопрос истории, 1966. №4. С.31-43;

ってきた。ところがロストプチン説はロシアでは不人気であり、モスクワの住人が愛国心から町に火をつけて回ったという一種の神話的な言説が 1820 年代を通じて広まる。ロストプチン自身が戦後のロシア社会では急速に支持を失っており、逆にフランスの社交界では自国の首都に火を放った蛮勇としてもはやされておきながら、公式にはフランス軍が放火犯だという立場を取り続けたという経緯がある。こうしてモスクワの火事は実際的首謀者の名前を欠いたままロシア人の愛国的行為と解釈し直され、たいまつを持って街中を走る無名の民衆（ナロード）のイメージが強調されることになった<sup>209</sup>。

民衆による「愛国的な放火」という神話が確立するのは 1830 年代の初頭と見られ、ウォルター・スコットに範を取った歴史小説が盛んになった時期と一致する。歴史小説ジャンルの確立にはナポレオン戦争の記憶が大きな役割を果たした<sup>210</sup>。ロシアの歴史小説の創始者ともされるミハイル・ザゴスキンの小説『ロスラヴレフ』（1830 年）を読むと愛国放火説はまだ定着していなかったことが分かる。物語の叙述から逸脱した一場面で語り手は「自分の家に火をつける以外のやり方では身を守れなかった野蛮人」というフランス側の非難に萎縮しないよう呼びかけ、「モスクワ大火の名誉は誰にも譲らない」と宣言している<sup>211</sup>。『ロスラヴレフ』はナポレオン戦争を歴史小説として描いた最初の作品だが、ここでは愛国心に燃えるモスクワの商人たちが組織的に町を燃やしてまわる姿が描かれている。クレムリンから郊外に脱出しようとするナポレオン一行が案内人を買って出た商人によって炎に包まれた袋小路に誘い込まれる<sup>212</sup>。この場面は 17 世紀の動乱期にツァーリの命を守るためにポーランド軍を道に迷わせた農民イヴァン・スサーニンの伝説的なモチーフを模倣している。ナポレオン戦争による 19 世紀初頭の愛国心の高揚の中で、それまで公文書の中に記されているだけだったスサーニンの名前が、シャホフスコイ、セルゲイ・グリンカ、ルイレーエフなどの作品を通じてロシア社会の意識に刻まれていき、ミハイル・グリンカのオペラ『皇帝に捧げた命』（1836 年）の成功をもたらすことになる<sup>213</sup>。ところでスサーニンが雪原の中に敵軍を誘い込むエピソードは 19 世紀に入ってから脚色であり、1812 年のナポレオン軍を苦しめた「冬将軍」のイメージが時間を逆行して 17 世紀の伝説に取り入れられたとも考えられる。ザゴスキンの『ロスラヴレフ』も 1812 年の祖国戦争を題材としながら、200 年

---

*Тартаковский А.Г.* Обманутый Герострат. Ростопчин и пожар Москвы // Родина, №6-7, 1992. С.88-93; *Горностаев М.В.* Генерал-губернатор Ф.В.Ростопчин: страницы истории 1812 года. Библиотека интернет-проекта «1812 года». 2003. <http://www.museum.ru/1812/library/Gornostaev> (ウェブは 2017 年 11 月 26 日現在有効)

<sup>209</sup> 越野剛「ナポレオン戦争におけるフォードル・ロストプチンと民衆（ナロード）イメージ」『ロシア語ロシア文学研究』第 40 号、2008 年、28-37 頁

<sup>210</sup> 越野剛「ナポレオン戦争と歴史小説」『現代文芸研究のフロンティア(VII)』、北海道大学スラブ研究センター 21 世紀 COE 研究報告集(9)、2005 年、69-87 頁。

<sup>211</sup> *Загоскин М.Н.* Рославлев, или Русские в 1812 году // Сочинения в двух томах. Т.1 М., 1987. С.483.

<sup>212</sup> *Загоскин М.Н.* Рославлев, С.481.

<sup>213</sup> *Киселева Л.Н.* Становление русской национальной мифологии в николаевскую эпоху (сусанинский сюжет) // Лотманский сборник, Т.2. М., 1997. С.279-302.



前のスサーニンの物語プロットを巧みに活用しているのである。

同じくナポレオン戦争を題材にした歴史小説では、ファデー・ブルガーリンの『ピョートル・ヴィジギン』(1831年)とラファエル・ゾートフの『レオニード』(1832年)にも類似した場面を見ることができる。どちらも文学的な価値をあまり評価されてはいないが、大衆小説の走りとされることも多く当時としては広く読まれた作家である。ブルガーリンの小説では退役軍人の小地主が自警団を作って家々に火を放っている。「わしはモスクワの町人や旅券を持って滞在中のわしの農民の中から命知らずを30人ばかり集めて武器を与え、目に見えない首都の警察署長になった」<sup>214</sup>。ゾートフの作品でもモスクワの住人たちが自分たちの生活の場をすすんで犠牲にする姿が描かれる。「欲深いとされている商人が自らの露店に、職人は自分の工房に、町人は財産の全てをなす自分の家屋に火を放ったのです。変装した警察官が町中に残って彼らを手伝うことさえありました」<sup>215</sup>。いずれも民衆の参加を強調しており、ナロードによる愛国的な放火という神話的言説の拡大を助長したのであろう。モスクワ総督ロストプチンの名前はほとんど挙げられない。

「ナロード」という言葉は「国民・民族」という意味を持つと同時に、「民衆・農民」という下層階級を指して貴族が除外される場合もある。最近の歴史研究では地主貴族の支配下にある農奴たちが必ずしも愛国的に振舞ったとはいえないことが指摘されているが<sup>216</sup>、非エリート階層を含む全ロシア国民が団結して敵と闘う「ナロードの戦争 *народная война*」だったというのがロシア側のオフィシャルな立場だった。スサーニン伝説の場合と同じように文学が重要な道具となり、17世紀の動乱の時代の貴族ボジャルスキーと商人ミーニンの戦いが19世紀初頭の国民統合のモデルとして謳われる<sup>217</sup>。そこからフランス軍と戦う農民のパルチザンをめぐる様々な言説が生み出される。モスクワの民衆たちの愛国的放火もまた、そうした神話的なイメージのひとつだったといえる。

守銭奴を題材にしたドストエフスキーの『プロハルチン氏』は歴史小説のブームから10年ほど後に書かれたものだが、その奇妙な火事の描写には1812年の歴史的モチーフの反映を見ることができる。プロハルチンは失踪中に見た火事場の地獄絵図を熱病にうなされながら夢の中で以下のように再現する。

ここにきてプロハルチン氏は恐怖心が沸きあがるのを感じた。これらすべての出来事が何かわけがあつてのことであり、自分が無事ではすまないだろうことが分かったからである。じっさい、破れ外套の帯がほ

---

<sup>214</sup> Булгарин Ф. В. Петр Иванович Выжигин // Собрание сочинений Фадея Булгарина, СПб., 1839-1844. Т.4. С.168. (21 章)

<sup>215</sup> Зотов Р. М. Леонид, или некоторые черты из жизни Наполеона // Собрание сочинений в пяти томах. Т.1. М.:Терра, 1996. С.486-487. (第4部3章)

<sup>216</sup> Yitzhak.Y. Tarasulo, *The Napoleonic Invasion of 1812 and the Political and Social Crisis in Russia* (Ann Arbor:UMI, 1983)

<sup>217</sup> Зорин А. Л. Кормя двухглавного орла... Русская литература и государственная идеология в последней трети – первой трети века. М., 2001. С.157-186.

どけて、髪とあごひげを火に焼いた百姓男がすぐそばの薪材の上に登って、民衆をプロハルチン氏に向かってけしかけ始めたのである。人だかりはどんどん数を増し、百姓男は叫び、恐怖で身体が凍りついたプロハルチン氏は、この男がちょうど5年前に非情なやり口で一杯食わせた御者だと、とつぜん気がついた。支払い前に相手の目を盗んで通り抜けできる門にもぐりこみ、真っ赤に熱した鉄板の上を裸足で走るみたいに、踵を地面につけずに逃げたのである。プロハルチン氏は絶望にとらわれ、なにか喋ろう叫ぼうとしたが、声が出なかった。怒り狂った群集がまだら色の蛇のように自分に巻きつき、締めつけ、押しつぶすのを感じた。途方もない努力をしたすえに、プロハルチン氏は目を覚ました。(1:250-251)

一人の「百姓男 мужик」によって「民衆 божий народ」が暴動へと唆される。憤怒に燃える群集に追われるプロハルチン氏がここではナポレオンの立場にある。興味深いことに小説中には下宿仲間が傲慢なプロハルチンを実際にナポレオン呼ばわりする場面がある。「あなたはなんだというんです。(…)あなたひとりのためにこの世は創られたんですか。あなたはナポレオンなんですか。なんだというんです。何者ですか。ナポレオンだというんですか。ナポレオンなんですか、ちがうんですか」(1, 256-257)。民衆に追われる火事の悪夢から目を覚ましたプロハルチンは、こっそり貯めた財産が隠してあるマットレスともども部屋が火に包まれているのを見て驚愕するが、そこでまた夢から覚めるという顛末になっている。「どうやら燃えていたのはプロハルチン氏の頭のほうだったようだ」(1, 251)。現実の火事と主人公の頭の中の火事(病気・幻覚)は相互に結びついている。「あの家が焼けちゃったので、あんたの頭も焼け落ちるっていうのかね」(1, 255)。

死期の近づいたプロハルチンは大人しくなり、人々に許しと哀れみを乞い求める。「熱病の炎で燃える灰色の目から、不意に小粒の涙が溢れ出した」(1, 257)。火事によって焼かれることにより主人公の傲慢なエゴイズムが浄化されたかのようなようである<sup>218</sup>。英雄を志向する肥大した自我はドストエフスキーの作品においてしばしばナポレオンのイメージを伴うことはよく知られている<sup>219</sup>。例えば『罪と罰』のラスコーリニコフにもしばしばナポレオンのイメージが重ねられるが、そこでも主人公が火に焼かれることによって悔い改めるといふモチーフが見られる。「四辻に行って民衆 народ の前にひざまずき、大地に口づけなさい、あんたは大地の前でも罪を犯したのだから」というソーニャの言葉を思い出しながらラスコーリニコフは自首して出るため警察に向かう。「心の中が火花によって燃えあがり、まるで炎のようにいきなり全てを呑みこんだ。全身の力が一気に抜けたようになり、涙が溢れ出した。彼は立っていたときの姿勢のまま、地面に倒れこんだ」(6, 405)。モスクワの民衆によって焼かれるナポレオンという歴史モチーフが、民衆を前に己を虚しくして浄化の炎に

<sup>218</sup> Чернова Н.В. «Господин Прохарчин» (Символика огня) // Достоевский. Материалы и исследования. СПб., 1996. Т.13. С.29-49.

<sup>219</sup> ドストエフスキーにおけるナポレオン像については以下の文献を参照した。井桁貞義「ドストエフスキーとナポレオン」『ドストエフスキー・言葉の生命』群像社、2003年、206-232頁。19世紀ロシア文化史全般における影響については以下の研究がある。Molly W. Wesling, *The Russian Representation of Napoleon: A Cultural Study* (Ann Arbor: UMI, 1999)

包まれるラスコーリニコフの姿と重なり合う。

## 5-2. ペテルブルグの火事とナロードのイメージの変化

1862年の5月から6月にかけてペテルブルグで発生した一連の火事は、ピョートル・ザイチネフスキーの書いた革命派の文書「青年ロシア」が同じ頃に出回ったこともあり、大学生を中心とする革命グループの陰謀であるという噂が広まることになった<sup>220</sup>。強い衝撃を受けたドストエフスキーがチェルヌイシェフスキーを訪れて革命グループの放火を止めさせるように頼んだ逸話はよく知られている。この事件をきっかけにしてロシア社会における火事のイメージは大きく変わることになる。それは愛国的放火よりも暴動と革命のメトニミーとして受け取られるようになる。『悪霊』で描かれる火事が1862年の事件を念頭においていることはすでに定説と言ってよい。小説中で錯乱したレンプケ知事は「これはニヒリズムだ。何かが燃えているとしたら、それはニヒリズムだ」(10, 395)と叫ぶ。『未成年』のヴェルシーロフは息子アルカージイとの対話で、1871年のパリコミューンの革命家を「放火犯 *петролейщики*」と呼ぶ。革命派と政府軍の戦闘の終盤でチュイルリー宮殿をはじめとしてパリ市内で火災が発生したことが念頭に置かれている。ヴェルシーロフは革命運動が発生する歴史的な必然性を肯定しながらも、パリコミューンのような事件をヨーロッパの「黄金時代」の終焉と見なして悲嘆する(13, 375-376)。「放火犯」という言葉はフランス語の「石油をまく女たち *les pétroleuses*」に由来するものと思われる。コミューンの崩壊の際、女性たちがパリに火を放って回ったと噂された。今日では女性の放火説はほぼ否定されており、流言を生んだ奇怪な想像力についてジェンダー論の見地から事件にアプローチする研究も出されている<sup>221</sup>。

	火事件数		火事件数		火事件数
1853年	7412	1857年	11020	1861年	10317
1854年	7462	1858年	10073	1862年	12320
1855年	8650	1859年	10915	1863年	13640
1856年	10780	1860年	10456	1864年	13718

大改革期のロシアでは、統計調査と新聞などのメディアを通じて、国内のどこかで毎日のように火事が発生し、しかもそれは次第に増えつつあるという社会意識が形成されていっ

<sup>220</sup> Abbott Gleason, *Young Russia: the genesis of Russian radicalism in the 1860s* (New York: Viking Press, 1980)

<sup>221</sup> ヤニク・リーパ『女性と狂気：19世紀フランスの逸脱者たち』平凡社、1993年、48-55頁; Gay Gullickson, “La Petroleuse: Representing Revolution,” *Feminist Studies* 17:2, 1991. pp.240-266

た。1865年に内務省統計委員会が発行した統計資料は火事件数の着実な増加を示している(上図)<sup>222</sup>。しかし統計集の解説によれば件数の増加は、調査の精密度の向上によってそれまで数えられていなかった火事が統計に含まれるようになったことや人口数の増加などが原因とされている。19世紀後半のロシアにおける火事のネガティブなイメージと近代化の問題を幅広く論じたフライアソンによると、実際に火事が増加したかどうかを見極めるのは難しい<sup>223</sup>。1860年には地方の警察官僚は二週間ごとに管轄区域で起きた火事を県知事に報告するようという指示が出され、ゼムストヴォ制度や農村での火災保険の導入などを通じて火事に関する統計が次第に精緻なものになっていくのは確かである。それらは地主貴族の支配から解放された農民を今度は国家が直接に管理統制しようとする動向と結びつく。一方で人口増加と伝統的な大家族制度の解体や工業製品の流入(マッチ、煙草、サモワール、ランプなど)によって、可燃性の家屋が密集したロシア農村で火事の増加が促進されたことも否定できない。しかしここでは現実の火事よりも人々の意識の中でロシア国内に蔓延する火事のイメージが増大していったことをまず問題にしたい。

同じことは新聞などのメディアにおける火事の取り扱いについても言える。『罪と罰』のラスコーリニコフが自分の犯した殺人事件の記事を探して新聞を読む場面では、見世物の小人(マッシモ)や遊楽施設(イズレル)の記事と一緒に火事のニュースが大量に並んでいる。「女が階段から落下、町人が飲みすぎて死亡、ペスキで火事、ペテルブルグ区で火事、もひとつペテルブルグ区で火事、またひとつペテルブルグ区で火事、イズレル、イズレル、イズレル、イズレル、マッシモ、おっ、あったぞ」(6, 124)。『罪と罰』のテキストが1865年の生活風俗のディテールを正確に反映していることを論じたダニーロフによれば、火事についての記事は実際に新聞紙上に溢れていたという<sup>224</sup>。すぐ後の場面でラスコーリニコフとザミョートフは「火事のニュースが多いですな」という会話を交わしており、新聞の紙面を通じてニュースが人々の意識の中で共有されていたことが分かる。1860年代は「厚い雑誌」に代わって新聞メディアが台頭した時期であり、そこに掲載される犯罪事件や裁判報道がドストエフスキーの小説の重要な材料となっていく<sup>225</sup>。

ペテルブルグの放火事件があった年のドストエフスキーの雑誌『時代 Время』(1862年7号)は「ペテルブルグで始まった火事はやがてロシアの隅々まで燃え移った」として、ロシア国内で火事が蔓延しているという一般的な印象を述べた後に、むしろ火事に関する新聞報道が増えているせいで火事が多くなったような気がするのだと冷静な判断を示している。

<sup>222</sup> Статистические сведения о пожарах в России, Издание Центрального статистического комитета Министерства внутренних дел, СПб., 1865.

<sup>223</sup> Cathy A. Frierson, *All Russia Is Burning! A Cultural History of Fire and Arson in Late Imperial Russia* (Seattle and London: University of Washington Press, 2002), pp.64-100.

<sup>224</sup> Данилов В.В. К вопросу о композиционных приемах в «Преступлении и Наказании» Достоевского // Известия АН СССР (Отделение общественных наук), 1933, №3. С.249-263.

<sup>225</sup> 番場俊「『罪と罰』と同時代のジャーナリズム」『新潟大学言語文化研究』、第10号、2004年、1-13頁

1862年にドストエフスキー兄弟が書いた『火事』という論文も（検閲は通らなかったが）、学生たちが犯人だという噂は根拠がないにもかかわらず、保守派の新聞があおることによって広まったのだと批判している<sup>226</sup>。増え続ける新聞記事や統計データは、あまり知られていなかった民衆の生活文化を記録する（監視する・統制する）という19世紀後半の政治的文化的エリートの欲望を反映している。それはナポレオン戦争に見られた「ナロードによる愛国的な放火」の神話的イメージを危ういものに変えてしまう。国内の知られざる広大な領域で火事が燃え広がっているという認識は、第1に火事のイメージから聖性を奪い、第2に革命や暴動の危険を暗示するものとなり、第3には後進的で野蛮なロシア民衆というイメージを強めることになる<sup>227</sup>。

『悪霊』のクライマックスで描かれる火事で、犯人として名指さしされているのは「シュピグリン工場の労働者3人」と元農奴の懲役人フェージカであり（10, 394）、ここでも放火犯が民衆的な出自を持っていることが分かる。しかし1812年のモスクワにおける「自発的な放火」の場合と違い、『悪霊』では事件の背後に煽動者ピョートル・ヴェルホヴェンスキーが隠れている。民衆を扇動する革命家という要素を導入することによって、ナロードの神聖なイメージが守られているとも考えられる。革命家ピョートル自身のプロパガンダの言葉が放火を「きわめて民衆的な手段 *средством народным*」と見なしているのも興味深い。

一方では、活動しつつあるグループのそれぞれが信奉者を作って下部組織を無限に増加させながら、暴露的プロパガンダによって地方当局の存在意義を絶え間なく失墜させること、住民の間に猜疑心を植えつけ、シニズムとスキャンダル、あらゆるものに対する完全な不信、よりよきものへの渴望を生み出し、遂には火事というきわめて民衆的な手段を用いて、定められた時点において、もし必要となれば、国中を絶望のどん底に突き落とすことを任務とする。（10, 418）

ナポレオン戦争を描いた歴史小説も1860年代以降になるとモスクワ大火の描写に明らかな変化を見せる。トルストイの『戦争と平和』（1863-69年）では愛国的な放火という神話的な言説自体が否定され、火事は自然に発生したものだという説が主張される。「フランス人にとってロストプチンの野蛮さを非難することがどんなに快いことであり、またロシア人にとってボナパルトの悪逆非道を責め、あるいは後になって自国民の手に英雄的な松明を持たせることがどんなに気分のいいことであっても、それでも火事のそんな直接的原因はありえなかったのは明らかである」<sup>228</sup>。やはり祖国戦争を題材にしたグリゴリイ・ダニレフ

<sup>226</sup> Розенблюм Н.Г. Петербургские пожары 1862 г. и Достоевский (Запрешенные цензурой статьи журнала «Время»), 1973, Литературное наследство, Т.86. С.16-54. この論文を兄弟のどちらが書いたのかについては議論があるが、ドストエフスキーがまったく無関係だったとは考えにくい。

<sup>227</sup> 例えばチェーホフの『農民 Мужики』（1897年）で描かれる火事は農村の前近代的状況の悲惨を映し出している。

<sup>228</sup> Толстой Л. Н. Война и мир. // Полное собрание сочинений в 90 томах. Т. 11. М.:

スキーの歴史小説『焼かれたモスクワ』(1886年)はトルストイの大作に敬意を払いながら書かれたが、モスクワ大火の原因はやはり民衆によるものとされている。ただしその民衆は愛国的な理想のロシア人像というよりは、貴族文化に属する主人公たちとは異質で暴力的な存在という面が強調されている。フランス軍の占領下にあるモスクワに取り残された登場人物の一人イリヤが、建物に放火する門番のカルプを目撃する場面がある。「カルプに見つからないように地下室に降りながらイリヤは考えた。モスクワに放火しているのが誰なのか、いま分かったぞ。カルプの秘密の放火を見たことで、イリヤは嬉しくもあったが、放火犯を当惑させることを恐れもした」<sup>229</sup>。愛国的ではあっても野蛮な手法である放火を行う民衆とそれを盗み見る貴族との間には、1830年代のザゴスキンの達によって描かれた幸せな国民的統合の幻想を見ることができない。

### 5-3. オリガ・ウメツカヤ裁判と放火の女性イメージ

ペテルブルグの火事から5年後、トゥーラ県の田舎で起きた放火事件の裁判がドストエフスキーに強い印象を与える。これも新聞報道を通じて世論の関心を集めた事件であり、『声 Голос』紙に裁判の様子が詳しく連載された(1867年9月26-28日、266-268号)。これが『白痴』のナスターシャの人物像の構想に影響したとされるオリガ・ウメツカヤの事件である。14歳の少女オリガは両親の度重なる虐待を受けて、ついに4回にわたって家屋に火を放つ。裁判では子供の犯した犯罪に対して親がどの程度の責任を負うのかという点が大きな争点となった。ドストエフスキーが事件に興味を引かれたのはオリガが子供だったということもあるだろうが、背景に女性の放火という問題を考えることができる。

19世紀後半には放火が女性的な犯罪であるという言説がしばしば見られる。1864年にリャザン県で生じた火事で起訴された農婦フェクラは、夫の家で迫害された恨みのために火を放ったと疑われた。興味深いことに弁護人は「女性的な愚かさ」と潜在的な悪意によって放火した」というのは、放火といえば女性が犯すものだという先入観からくる誤りであると述べた。陪審員の同情を集めたフェクラは無罪放免された。フライアソンはフェクラの事件を典型例のひとつとして挙げて、女性の放火という言説を分析している<sup>230</sup>。

先に引用した内務省の統計集も「報告では放火を行う者の中に女性が挙げられることがきわめて多いのが目につく」と述べて、「女性による放火の原因となるのは、ほとんどの場合、嫉妬心から出た報復、もしくは家庭内でのひどい待遇に対する報復である」と論じている<sup>231</sup>。しばしば挙げられるのは女性特有の「嫉妬心、愚かさ、自制心の欠如」といった心理的要因、他方では農村の家父長的な家族制度における女性の虐げられた地位という社会

Художественная литература, 1940. С.358. (3卷3部26章)

<sup>229</sup> Данилевский Г.П. Сожженная Москва. М., 1977. С.131-132. (26章)

<sup>230</sup> Cathy A. Frierson, *All Russia Is Burning!*. pp.129-135.

<sup>231</sup> Статистические сведения о пожарах в России. С.36.

的要因であり、それらが放火を女性的犯罪とするステレオタイプを構成する。ペテルブルグ大学の法学教授イヴァン・フォイツキーは女性の犯罪に関する論文の中で、放火を毒殺や嬰兒殺しと並んで肉体的な力で劣る女性に特徴的な犯罪だとしている<sup>232</sup>。「個人的な自立の要素、行われたことへの意識、自分の行為をコントロールする能力といったものが女性においては弱められており、情動や興奮の力に身を任せてしまう」というように女性の犯罪に目立つ心理的側面についても紋切型の言説を繰り返している<sup>233</sup>。こうした言説は同時代にしばしば論じられた女性のヒステリーや狂気というイメージとも容易に結びつく。男性の犯罪とは違い、女性の犯罪は法律だけでなく社会・文化・医学などの複数の規範から逸脱した行為と見なされやすい<sup>234</sup>。それは逆に「正常な女性」のイメージの範囲が極めて狭くて貧困であったことを示唆するものでもある。

『白痴』のナスターシャの問題に戻りたい。創作ノートには「癲癇持ちであり、神経性の発作を起こす」という主人公の「白痴」が「ミニョンを犯す。家に放火する」という筋書きが記された箇所がある(9, 141)。この主人公像は完成版のムイシュキン公爵とはかなり異なるものであり、アルカージイの放火の場面を思い起こすならば、むしろ後の『未成年』に転用されている印象を受ける。一方で「ミニョン」は創作ノートの中で放火事件の「ウメツカヤ」と合成されて、ナスターシャ・フィリップヴナにつながる一連の形象のひとつである。この名前はもちろん『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796年)に登場する印象的な少女から借用されたものだが、ゲーテの作品にもミニョンの父親が嫉妬のあまり家に放火する謎めいた場面がある。ミニョンが主人公の前で癲癇に似た発作を起こす場面もあり、『虐げられた人々』(1860-61年)の薄幸の少女ネルリにもミニョンと似た発作の描写があることを考えると、ドストエフスキーの想像力を刺激した少女像であっただろうことが推察できる。

ドストエフスキーの『白痴』にはけっきょく放火のモチーフは使われず、ナスターシャが両親を火事で失ったという設定にかすかな反映が感じられるだけである。しかしロゴージンから受取った10万ルーブルの札束をナスターシャが暖炉の中に放りこむ場面に、虐げられた女性による反逆としての放火のモチーフを見ることができる。

じゃあ、いいかい、ガーニャ、あたしは最後にあんたの心を見たいと思ってるのさ。あんたには3ヵ月というものずっと苦しめられたからね。今度はあたしの番だよ。この札束が見えるかい、10万ルーブルだよ。こいつをすぐ暖炉の火の中に放りこむからね、みんなの前で、ここにいる全員が証人だよ。炎が札束を包

<sup>232</sup> *Фойницкий И.Я.* Женщина-Преступница // Северный вестник, 1893, №3. С.133.

<sup>233</sup> *Фойницкий И.Я.* Женщина-Преступница. С.135.

<sup>234</sup> 19世紀ロシアの女性犯罪を扱った研究としては以下のものを参照した。Laura Engelstein, *The Keys to Happiness: Sex and the Search for Modernity in Fin-de-Siècle Russia* (Ithaca and London: Cornell UP, 1992), pp.96-127; Stephan P. Frank, « Narratives within Numbers: Women, Crime and Judicial Statics in Imperial Russia, 1834-1913 » *Russian Review* 55:4 (1996), pp.541-566.

みこんだら、暖炉に這いこみなさい、ただし手袋はなしの素手じゃないとだめ、袖をまくってね、そして札束を炎の中から引っぱり出すがいいさ。引っぱり出せたら、あんたのものだよ、まるごと 10 万ルーブルがね。指をちょっと火傷するだろうけど、なにせ 10 万だからね。つかみ出すのにそんな時間がかかるかしらね。あたしのお金をもらうために火の中にはいずり込むときの、あんたの心を眺めていたいのさ。札束があんたのものになるってことは、ここみんなが証人になるよ。這いこまなければ、燃え尽きちまうだけ。だれにもやりはしないよ。(8, 144)

ナスターシャのふるまいに驚いたエパンチン将軍はしきりに「あれは気が違ったんじゃないのかい。つまり比喩ではなくて、ちゃんとした医学的な言い方だけど」(8, 133)、「縛らなくてもいいだろうか」「だって気が違ったじゃないか」(8, 145)と繰り返す。これは女性の犯罪を自制心の欠如やヒステリーや狂気によって説明する同時代の言説のパロディと見なすこともできるだろう。『カラマーゾフの兄弟』の神経症の少女リーザ・ホフラコヴァも「私はどうしようもなく家に火をつけたいのよ」と叫ぶが、アリョーシャは子供の放火の欲求は珍しいものではなく「病気のようなものだ」とリーザに返答する(15, 22)。女性と子供のふるまいが病的な犯罪傾向という点で同じカテゴリーに入れられていることも注目値する。

『罪と罰』と『プロハルチン氏』ではナポレオンやロスチャイルドの理念に見られるようなエゴイスティックな固定観念を抱いた主人公が、ナロードの放つ火事によって焼かれることで浄化されるというモチーフを見るのに対して、ウメツカヤ事件と『白痴』のナスターシャは火事で焼かれる側ではなく火を放つ側に焦点を向けさせる。女性、子供、民衆、病者があるとき、男性、父親、ツァーリ、健常者に対して突然の反逆を起こす。これはドストエフスキーの作品世界から引き出される一種の元型的モチーフである。『プロハルチン氏』から『未成年』につながる守銭奴のイメージ、ロスチャイルドの理念がここでは 10 万ルーブルの札束となって炎に焼かれるとも考えられる。プロハルチンは悪夢の中で民衆の暴動に直面するが、その舞台となる現実の火事を引き起こしたのはどこかの「禿の娘 *лысая девка*」だったとされている(1, 253)。この娘はプロハルチンの下宿の女主人のあまり要領を得ない世間話で言及されるだけだが、やはり放火する女性の系譜に位置づけることができるだろう。

燃えさかる炎のイメージは癲癇というドストエフスキーの人生における最も謎の領域と密かにむすびついており、否定と肯定のアンビヴァレントなイメージの間を揺れながら作家の心理に常に深い印象を与えるものだったように思われる。癲癇者スメルジャコフが不意に思い立ってエルサレムに巡礼に行くかもしれないし、村を焼き払ってしまうかもしれないと性格づけられていたことを思い起こそう。『悪霊』の語り手によれば火事場見物は妖しい魅力を秘めている。「見物人の間にある種の脳震盪のような作用を及ぼし、内なる破壊本能を刺激する。しかもこの破壊本能は、いやはや、どんな人間の心にも、まじめきわまり



ない家族持ちの九等官の心の奥にもひそんでいるのだ」。ステパン氏も「火事を眺めながら何の満足をも感じずにいられるものか怪しいと思いますね」と語っている（10, 394）。

火事は焼かれる側から見ればナポレオンやロスチャイルドなどの理念に囚われた登場人物の魂が浄化される場であり、火を放つ側から見れば追い詰められた人間が反逆を起こすための手段となる。しかし 1812 年のモスクワ大火にあった民衆による神聖な暴力というイメージは、1862 年のペテルブルグの連続放火事件によって革命家に操られる陰謀劇に格下げされてしまった。しかし青年時代のドストエフスキーがペトラシェフスキー会の集まりで反政府運動に関与していたことを考えると、フランクが推察するようにペテルブルグの炎に映し出された革命派の活動は作家の歪んだ自己像だったとも言える<sup>235</sup>。19 世紀ロシアの火事の文化史と結びついていたナロードや女性に関する様々な言説とイメージもまたドストエフスキーの創作の中に取り込まれて、火事のイメージと病気のイメージを両義的で豊穡なものにしていったと考える。

---

<sup>235</sup> Joseph Frank, *Dostoevsky: The Stir of Liberation, 1860-1865* (Princeton and New Jersey: Princeton UP, 1986), pp.145-148.

## 結論—ロシアと西欧

文学作品を題材にしてロシアにおける病気の文化史を考える際の困難のひとつはロシア文化に固有の特徴を見出すことである。19世紀ロシアにおけるコレラ言説を詳細に論じたボグダノフも、「毒殺者」の陰謀を信じる民衆の心性は1830年前後のコレラ疫を体験した多くのヨーロッパと共通すると述べる<sup>236</sup>。本論で扱ったメスメリズムや美化された病気（結核）のイメージは西欧文化から導入されたものであり、例えばロマン主義期のロシア文学のテクストだけを読んでも、そこで描かれる病気の独自性はなかなか見えてこない。しかしドストエフスキーの小説が病的なイメージの豊穡さゆえにユニークな文学となりえていることは確かである。そのひとつの特徴は西欧の文化に大きく依存していることを認めながら、その西欧を激しく批判するドストエフスキーのアンビバレントな態度である。

そもそもロマン主義の多面的な方向性のひとつは、普遍志向の古典主義への対抗軸として国民文化・民族文化を確立することであった。啓蒙的な近代的合理性の批判もロマン主義の重要なテーマであった。それは中東欧の多くの地域に当てはまる文化現象であり、ロシアのスラブ派の思想家・文学者たちもロマン主義を出発点にしていた。しかし西欧の合理主義批判や国民化の創設というアイディア自体がドイツ・ロマン派から借用されたものだともいえる。

ドストエフスキー作品における病気のイメージの特徴のひとつは、結核やメスメリズムといったロマン主義文学で流行したモチーフを拒否するのではなく、しばしばパロディ的な距離を置きつつ、人間の不合理な精神のメカニズムを描くために利用していることだ。ライスが強調するドストエフスキーの「反省」的な思考の現れだともいえる。西欧由来の概念を単純に同化するのではなく、時に茶化したり風刺したりしながら対話的に受容するという志向は後期のプーシキンにも見られるようにロシア文学のひとつの傾向であり、それがドストエフスキーに極端な形で現れていると考えたほうがよい。

本論の第3章で触れたように、『白痴』のムイシキンが癲癇発作の前兆である「瞑想的」で朦朧とした意識の中でスラブ派的な思想に到達するのは興味深い。ロマン派文学のメスメリズムの手法が換骨奪胎されて、ドストエフスキーの考えるきわめてロシア的な人間の性格を表現するのに用いられるのだ。作中で二度目の癲癇発作が起きるエパンチン家の夜会で、ムイシキンは恩人のパヴリシシェフがカトリックに改宗したという話を聞いて、極端から極端に走るロシア人の心性について長広舌をふるい、人々を唾然とさせる。癲癇の発作に先立って起きた二つの出来事、中国製の花瓶を割ること、場違いな内容の演説を始めることは、その前夜にアグラレーヤがムイシキンを前にして「予言」しており、それらが文字通りに再現されたことから彼がすでに暗示にかかりやすい半催眠状態にあったと推察できる。

---

<sup>236</sup> Богданов К.А.. Врачи, пациенты, читатели, пациенты, читатели. Патографические тексты русской литературы XVIII – XIX веков. М.: О.Г.И., 2005. С.406.

ロゴージンの「燃えるような目」に操られるようにして癲癇発作に導かれる場面でも、マイシキンはロシア人の特殊性、「ロシア人の心は謎だ」という問題について瞑想している。信仰をめぐるロゴージンとの対話で挙げられた、無邪気な赤ん坊の笑顔に対しても、眠っている友人を殺そうとする瞬間にも神に祈りをささげることのできるロシアの民衆の逸話もマイシキンの意識の中に重なり合っている。ロゴージンの人物像はロシア人の矛盾した性格についてマイシキンが混乱した思考をめぐる軸の役割を果たしている。

コレラ（あるいはその先駆けとしてのペスト）はヨーロッパではなく、アジアに由来するものである。1830年前後の第2次パンデミーはロシアを経路にしていたため、西欧ではロシアをアジアと重ね合わせて病気の温床と見る傾向があった。同じ時期にポーランドの11月蜂起が鎮圧されたこともロシアの暴力的な専制政治のイメージを強めていた。ロシアを批判・風刺する西側のメディア言説はただちにロシアの知識人の知るところとなった。一方で革命家の言動（あるいは各種の秘密結社や社会的マイノリティ）が伝染病のメタファーによって表現されるのも普遍的な現象である。ロシアではしばしばそれが西からの伝染病として描き出された。ドストエフスキーの『悪霊』はロシアの地方都市を混乱に陥れるニヒリズムの蔓延をコレラに喩えた。しかしここでは真性コレラと「疑似コレラ」の象徴的な対比に表現されているように、精神の伝染病を批判すべき立場にある旧世代の知識人たち（ドストエフスキー自身もそこに含まれる）もまた同じ西欧近代の影響下にあることが明らかになる。

一方で悪魔憑き（憑依）という現象自体は普遍的にみられるものでありながら、クリューシャはロシア独自の民衆文化・宗教文化として理解されてきた。西欧でも辺境のエキゾチズムを愛したプロスペル・メリメが小説『ロキス』（1869年）でクリューシャをロシア特有の精神病として紹介している。ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』で描いたクリューシャのソフィアが示すけいれんの身振りは、悪魔に喩えられるニヒリズムや無神論に抵抗する民衆文化の身体表現と考えることができる。人間の言葉が伝染性のある理念として模倣されるように、クリューシャの身振りもまた息子のアリョーシャによって反復される。それは言葉に対抗するイメージであり、病気に与えられる癒しの技であった。

序論で述べたようにドストエフスキーは自分の病歴によって癲癇の文化史に大きな影響を残した。ドストエフスキーの文学作品はコレラ・結核・癲癇などの様々な病気のイメージを利用する一方で、その後のロシアの病気の文化史に多くの新しい材料を提供した。今日、犯罪と病理にかかわる物語を考えるうえでドストエフスキーのテクストが直接・間接に及ぼす影響は測りがたい。それはロシア文化圏だけにかぎらない。我々はドストエフスキーの目で病気を見ているかもしれないのだ。

## 参考文献

ドストエフスキーとプーシキンのテキストは基本的に以下の全集から引用した。

*Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-83.

*Пушкин А. С.* Полное собрание сочинений. М.;Л.: Изд-во АН СССР, 1937-1959.

## 日本語

浅岡宜彦「プーシキンの詩「英雄」論」『人文研究：大阪市立大学大学院文学研究科紀要』44-2号、1992年、43-58頁。

井桁貞義『ドストエフスキー・言葉の生命』群像社、2003年。

宇山智彦「中央アジアから見たロシア文化」『ロシア文化の新しい世界：北海道大学スラブ研究センター公開講座』、1997年、38-53頁。

アンリ・エレンベルガー『無意識の発見—力動精神医学発展史』弘文堂、1980年。

加賀乙彦『ドストエフスキイ』中公新書、1973年。

柿本昭人『健康と病のエピステーメー』ミネルヴァ書房、1991年。

金澤治『知られざる万人の病てんかん』南山堂、1998年。

金沢美知子「ウォルター・スコットとロシア・ロマン主義文学」『スラヴ研究』36号、1989年、1-19頁。

アーサー・クラインマン『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、1996年。

栗原成郎『吸血鬼伝説』河出文庫、1995年。

越野剛「ナポレオン戦争と歴史小説」『現代文芸研究のフロンティア(VII)』、北海道大学スラブ研究センター21世紀COE研究報告集(9)、2005年、69-87頁。

越野剛「ナポレオン戦争におけるフォードル・ロストプチンと民衆（ナロード）イメージ」『ロシア語ロシア文学研究』第40号、2008年、28-37頁。

後藤正憲「革命と結核」『スラヴ研究』50号、2003年、269-283頁。

白石治朗『ロシアの神々と民間信仰：ロシア宗教社会史序説』彩流社、1997年。

鈴木淳一「永遠の失敗者—イワン・ガヴリロヴィチ・プルイジョフ略伝」『札幌大学外国語学部紀要：文化と言語』19-1号、1996年、37-61頁。

鈴木杜機子『ナポレオン伝説の形成』筑摩書房、1994年。

スーザン・ソントグ『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』みすず書房、1982年。

マリア・タタール『魔の眼に魅かれて—メスメリズムと文学の研究』国書刊行会、1994年。

ロバート・ダントン『パリのメスマー—大革命と動物磁気催眠術』平凡社、1987年。

オッセイ・テムキン『てんかんの歴史』中央洋書出版部、1988年。

ルネ・デュボス、ジーン・デュボス『白い疫病—結核と人間と社会』結核予防会、1982年。

寺田光徳「19世紀のフランス文学と結核（前編）」『熊本大学文学部論叢』100号、2009年、81-104頁。

エーメ・ドストエフスキイ「ドストエフスキイ伝」『ドストエフスキイ文献集成』17巻、大空社、1996年。

エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』青土社、1998年。

ヨラン・ノイフェルト「ドストエフスキイの精神分析」『ドストエフスキイ文献集成』11巻、大空社、1995年。

ピーター・バーク『文化史とは何か』法政大学出版局、2008年。

番場俊『『罪と罰』と同時代のジャーナリズム』『新潟大学言語文化研究』、第10号、2004年、1-13頁。

福田真人『結核という文化：病の比較文化史』中公新書、2001年。

福田真人『結核の文化史：近代日本の病のイメージ』名古屋大学出版会、1995年。

ジグムント・フロイト「ドストエフスキイと父親殺し」『フロイト全集』岩波書店、第19巻、289-311頁。

ニコライ・ベルジャーエフ「ドストエフスキイの世界観」『ベルジャーエフ著作集』第2巻、白水社、1960年。

ユーリイ・マン『ファンタジーの方法：ゴーゴリのポエチカ』群像社、1992年。

見市雅俊『コレラの世界史』品文社、1994年。

望月哲男「謎への情熱—癲癇の記録から見たドストエフスキイ」『えうみ』22号、1991年、44-55頁。

コンスタンチン・モチュールスキー『評伝ドストエフスキイ』筑摩書店、2000年。

ヤニク・リーパ『女性と狂気：19世紀フランスの逸脱者たち』平凡社、1993年。

ユーリイ・ロートマン『ロシア貴族』筑摩書房、1997年。

渡辺節子「人が人を害する話—今も生きているポルチャ、ズグラース、キラ、イコータ」北海道大学スラブ研究センター研究会での口頭発表（2001年3月11日）。

## 英語

Robert L. Belknap, *The Genesis of The Brothers Karamazov: The Aesthetics, Ideology, and Psychology of Making a Text* (Northwestern UP, 1990)

Jacques Catteau, *Dostoevsky and the process of literary creation* (Cambridge UP, 1989)

Norman Daniel, *Islam and the West: The Making of An Image* (Oxford: Oneworld, 2000)

John C. DeToledo, "The Epilepsy of Fyodor Dostoyevsky: Insights from Smerdyakov Karamazov's Use of a Malingered Seizure as an Alibi," *Archives of Neurology* 58-8 (2001), pp. 1305-6.

Laura Engelstein, *The Keys to Happiness: Sex and the Search for Modernity in Fin-de-Siècle Russia* (Ithaca and London: Cornell UP, 1992)

Joseph Frank, *Dostoevsky: The Stir of Liberation, 1860-1865* (Princeton and New Jersey: Princeton UP, 1986)

Joseph Frank, *Dostoevsky: The Years of Ordeal, 1850-1859* (Princeton UP, 1983),

- Stephan P. Frank, « Narratives within Numbers: Women, Crime and Judicial Statics in Imperial Russia, 1834-1913 » *Russian Review* 55:4 (1996), pp.541-566.
- Cathy A. Frierson, *All Russia Is Burning! A Cultural History of Fire and Arson in Late Imperial Russia* (Seattle and London: University of Washington Press, 2002)
- Cathy A. Frierson, *Peasant Icons: Representations of Rural People in Late 19th Century Russia* (Oxford Univ. Press, 1993)
- M. Futrell "Dostoevsky and Islam," *The Slavic and East European Review* 57-1 (1979), pp.16-31.
- Henri Gastaut, "New Comments on the Epilepsy of Fyodor Dostoevsky," *Epilepsia* 25-4 (1984), pp.408-411.
- George Gibian, "G. C. Carus' 'Psyche' and Dostoevsky," *The American Slavonic and East European Review* 15 (1995), pp.371-382.
- Abbott Gleason, *Young Russia: the Genesis of Russian Radicalism in the 1960s* (New York: Viking Press, 1980)
- Gay Gullickson, "La Petroleuse: Representating Revolution," *Feminist Studies* 17:2, 1991, pp.240-266.
- Washington Irving, *Mahomet and His Successors* (N.Y.; London, 1849)
- Leslie A. Marchand, *Byron: A Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1957)
- Deborah A. Martinsen, *Surprised by Shame: Dostoevsky's Liars and Narrative Exposure* (Columbs: Ohio State University Press, 2003)
- Rodelick E. McGrew, *Russia and the Cholera 1823-1832*. (Madison: University of Wisconsin Press, 1965)
- Harriet Murav, *Holy Foolishness: Dostoevsky's Novels and the Poetics of Cultural Critique* (Stanford UP, 1992)
- Irina Paperno, *Chernyshevsky and the Age of Realism: a Study in the Semiotics of Behavior* (Stanford UP, 1988)
- James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art* (Ann Arbor: Ardis, 1985)
- Irina Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius: A Cultural History of Psychiatry in Russia, 1880-1930* (The John Hopkins UP, 2002)
- Yitzhak.Y. Tarasulo, *The Napoleonic Invasion of 1812 and the Political and Social Crisis in Russia* (Ann Arbor:UMI, 1983)
- Dan Ungurianu, *Plotting History: the Russian Historical Novel in the Imperial Age* (The University of Wisconsin Press, 2007)
- Molly W. Wesling, *The Russian Representation of Napoleon: A Cultural Myth* (Ann Arbor: UMI, 1998)
- Christine D. Worobec, *Possessed: Women, Witches, and Demons in Imperial Russia* (Northern Illinois UP, 2003)

ロシア語

- Авенариус В. П.* Поветрие // Собрание сочинений в 5 томах. М.: Терра, 1996. Т.3. С.541-686.
- Альциулер М.Г.* Эпоха Вальтера Скотта в России: Исторический роман 1830-х годов. СПб.: Академический проект, 1996.
- [*Антонович М.А.*] Стрижам (Послание Обер-стрижу, Господину Достоевскому) // Современник. 1864. №8. С.154-170.
- Афанасьев А. Н.* Поэтические воззрения славян на природу. М., 1995.
- Бальзак О. де.* Евгения Гранде // *Достоевский Ф. М.* Полное собрание сочинений. Канонические тексты. Петрозаводск, 1995. Т.1.
- Белов С.В.* Ф.М. Достоевский и его окружение. Энциклопедический словарь. СПб.: Алетейя: Российская национальная библиотека, 2001. Т.1-2.
- Бем А. Л.* Достоевский: психоаналитические этюды. Берлин, 1938. С.83-99; *Бем А. Л.* Драматизация бреда («Хозяйка» Достоевского) // О Достоевском. Т.1. Прага, 1929. С.81-93.
- Богданов К.А.* Врачи, пациенты, читатели, пациенты, читатели. Патографические тексты русской литературы XVIII – XIX веков. М.: О.Г.И., 2005.
- Булгарин Ф. В.* Дмитрий Самозванец. // Полное собрание сочинений Фадея Булгарина. СПб., 1839-1844. Т.2. С.1-349.
- Булгарин Ф.В.* Петр Иванович Выжигин // Полное собрание сочинений Фадея Булгарина, СПб., 1839-1844. Т.4. С.1-242.
- Велланский Д. М.* Замечание на статью литературного Французского журнала: Le Furet. // Литературная газета, Т.1, №16, 1830. С.126-128.
- Вигель Ф. Ф.* Записки. М., 1891-1893.
- Власова М.* Русские суеверия: энциклопедический словарь. СПб., 1998.
- Врангель А. Е.* Из «Воспоминаний о Ф. М. Достоевском в Сибири» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.345-368.
- Горностаев М.В.* Генерал-губернатор Ф.В.Ростопчин: страницы истории 1812 года. Библиотека интернет-проекта «1812 года». 2003. <http://www.museum.ru/1812/library/Gornostaev>
- Греч Н. И.* Черная женщина. СПб., 1838.
- Громбах С. М.* Пушкин и медицина его времени. М., 1994.
- Гроссман Л. П.* Достоевский. М.: Молодая гвардия, 1965.
- Гроссман Л. П.* Жизнь и труды Ф.М. Достоевского: биография в датах и документах. Academia, 1935.
- Даль В.И.* О поверьях, суевериях и предрассудках русского народа. М., 1997.
- Данилевский Г.П.* Сожженная Москва. М., 1977.
- Данилов В.В.* К вопросу о композиционных приемах в «Преступлении и Наказании»

- Достоевского // Известия АН СССР (Отделение общественных наук), 1933, №3. С.249-263.
- Державин Г. Р.* Стихотворения. Библиотека поэта. Л., 1957.
- Дмитриев М. А.* Главы из воспоминаний моей жизни. М., 1998.
- Добролюбов Н.А.* Жизнь Магомета //О религии и церкви. М., 1960. С.327-335.
- Достоевская А. Г.* Воспоминания. М.: Правда, 1987.
- Достоевский А.М.* Еще о болезни Ф. М. Достоевского. // Новое время, № 1798, 1 марта 1881. С.3-4.
- Достоевский А.М.* Письмо к издателю // Новое время, №1778, 8 февраля 1881. С.2.
- [*Жуковский В. А.*] Из Письма В. А. Жуковского к принцессе Луизе прусской (О холерном возмущении в С.-Петербурге на Сенной площади) // Русский архив. 1866. С. 339-346.
- Загоскин М. Н.* Рославлев, или Русские в 1812 году // Сочинения в двух томах. Т.1 М., 1987. С.287-617.
- Загоскин М. Н.* Юрий Милославский, или русские в 1612 году // Сочинения в двух томах. Т.1. М., 1987. С.35-286.
- Зотов Р.М.* Леонид, или некоторые черты из жизни Наполеона // Собрание сочинений в пяти томах. Т.1. М.:Терра, 1996. С.5-579.
- Зорин А. Л.* Кормя двухглавого орла... Русская литература и государственная идеология в последней трети – первой трети века. М., 2001.
- Ким Г.Ф. Шастико П.М.* История отечественного востоковедения до середины века. М., 1990.
- Киселева Л.Н.* Становление русской национальной мифологии в николаевскую эпоху (сусанинский сюжет) // Лотманский сборник, Т.2. М., 1997. С.279-302.
- Клюге К. А.* Животный магнетизм, представленный в историческом практическом и феоретическом содержании. Пер. Велланского Д. СПб., 1818.
- Ковалевская С. В.* Из «Воспоминаний детства» // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.19-40.
- [*Кристина Ф.*] Холера в Москве. Из писем Кристина к С. А. Бобринской // Русский архив, 1884, Кн.3. С.141
- Лесков Н.С.* Житие одной бабы // Полное собрание сочинений. Т.2. 1998.
- Летопись жизни и творчества Ф. М. Достоевского в трех томах. Под ред. Будановой Н. Ф. и Фридендера Г. М. Т.1-3. СПб., 1999.
- Ловецкий А.* Свойства и происхождение зараз вообще и в особенности холеры. // Телескоп, 1831, №8. С. 53-74, 235-239, 354-382, 513-532.
- Лотман Ю. М.* Биография писателя: Пушкин. Л., 1981.
- Лотман Ю.М.* Избранные статьи. Таллинн: Александра, 1992-1993. Т.1-3.
- Макаров М. Н.* Александр Сергеевич Пушкин в детстве (Из записок о моем знакомстве) // А. С. Пушкин в воспоминаниях современников. Т.1. СПб.: Академический проект, 1998. С.43-47.



- Максимов В. Е.*. Карантин // Собрание сочинений в 8 томах. М.: Терра, 1991-1993. Т. 3. С.1-362.
- Максимов С.В.* Год на севере // Избранные произведения в 2-х томах. М., 1987. Т.2.
- Максимов С.В.* Нечистая, неведомая и крестная сила. СПб., 1994.
- Мартыанов П.К.* Из воспоминаний «В переломе века». //Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.333-344.
- Мельгунов Н. А.* Кто же он. // Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С.224-255.
- Моисеева Н.И.* Был ли Достоевский эпилептиком? История одной врачебной ошибки. // Знамя, 1993, № 10, С.199-204.
- [*Муравьев-Апостл М.И.*] Воспоминания Матвея Ивановича Муравьева-Апостла // Русская старина, 1886, №9, С.525-528.
- Миллер О. Ф.* Материалы для жизнеописания Ф. М. Достоевского. // Полное собрание сочинений Ф. М. Достоевского. СПб., 1883. С.1-176.
- Назиров Р. Г.* Владимир Одоевский и Достоевский // Русская литература. 1974. № 3. С. 203-206.
- Никитенко А.В.* Записки и дневник. СПб.: Герольд, 1904.
- Никитина С.Н.* Устная народная культура и языковое сознание. М., 1993.
- Новичкова Т. А.* Русский демонологический словарь. СПб., 1995.
- Одоевский В. Ф.* Косморама // Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С.304-352.
- Одоевский В. Ф.* Письма к Графине Е. П. Р'й, о привидениях, суеверных страхах, обманах чувств, магии, каббалистике, алхимии и других таинственных науках. // Сочинения князя В. Ф. Одоевского. Ч.3. СПб., 1844. С.307-359.
- Одоевский В. Ф.* 4338-год. Петербургские письма. // Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С.367-397.
- Орлов А.* Встреча Чумы с Холерой. М., 1830.
- Панченко А. А.* Христовщина и скопчество: фольклор и традиционная культура русских мистических сект. М.: О.Г.И, 2004.
- Пигин А.В.* Из истории русской демонологии XVII века. СПб.: Институт русской литературы, 1998.
- Писемский А.Ф.* Леший: рассказ исправника // Собрание сочинений в девяти томах. Т.2. 1959.
- Погодин М.П.* Черная немочь //Русская романтическая повесть, М., 1992. С.97-126.
- Попов Г. И.* Русская народно-бытовая медицина. СПб., 1903.
- [*Пржцлавский О. А.*] Воспоминания О. А. Пржцлавского // Русская старина, 1874, №12, С.665-698.
- Прыжов И.Г.* История нищенства, кабачества и кликушества на руси. М., 1997.
- Пупарев А. Г.* Холерный месяц в С.-Петербурге, июнь 1831 г. // Русская старина. 1884. Т. 44. С.

401-416; 1885. Т. 47. С. 69-86.

*Рейтблат А.И.* От Бовы к Бальмонту: очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века. М.: МПИ, 1991.

*Розенблюм Н.Г.* Петербургские пожары 1862 г. и Достоевский (Запрещенные цензурой статьи журнала «Время»), 1973, Литературное наследство, Т.86. С.16-54.

*Сенковский О. И.* Превращение голов в книги и книг в головы // Русская романтическая повесть. М., 1992. С.189-212.

*Сенковский О. И.* Черная женщина и животный магнетизм. // Собрание сочинений Сенковского. СПб., 1859. Т.8. С.83-108.

*Соловьев В. С.* Воспоминания о Ф. М. Достоевском. // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.197-230.

Статистические сведения о пожарах в России, Издание Центрального статистического комитета Министерства внутренних дел, СПб., 1865.

*Страхов Н. Н.* Воспоминания о Федоре Михайловиче Достоевском // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.375-532.

[*Суворин А.С.*] О покойном. // Новое время, №1771, 1 февраля 1881. С.1.

*Тартаковский А.Г.* Обманутый Герострат. Ростопчин и пожар Москвы // Родина, №6-7, 1992. С.88-93

*Тимофеева В.В.* Год работы с знаменитым писателем. // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.2. М.: Художественная литература, 1990. С.137-196.

*Фойницкий И.Я.* Женщина-Преступница // Северный вестник, 1893, №2. С.123-144. №3. С.111-140.

*Фукс А.А.* А. С. Пушкин в Казани // А. С. Пушкин в воспоминаниях современников. СПб.: Академический проект, 1998. Т.2. С.253-257.

*Холодковский В.М.* Наполеон ли сжег Москву? // Вопрос истории, 1966. №4. С.31-43.

*Цветаева М.* Пушкин и Пугачев // Цветаева М. Собр. соч.: В 7-ми т. М.: Эллис Лак, 1994. Т. 5. С. 498-524.

*Цявловский М. А.* Книга воспоминаний о Пушкине. М., 1931.

*Чернова Н.В.* «Господин Прохарчин» (Символика огня) // Достоевский. Материалы и исследования. СПб., 1996. Т.13. С.29-49.

*Шильдер Н. К.* Император Николай I в 1830-1831 гг. (из зап. графа А. Х. Бенкендорфа) // Русская старина. 1896. Т. 88. С.65-96.

[*Яновский С.Д.*] Болезнь Ф. М. Достоевского // Новое время, №1793, 24 февраля 1881. С.2.

*Яновский С. Д.* Воспоминания о Достоевском // Достоевский Ф. М. в воспоминаниях современников. В двух томах. Т.1. С.230-251.